ふるひ天神身より光を出シて此國をたぶす。いかに諫むれども用ざれば結句は人の身に入ッて自界叛逆せしめ佗國より責ムべし。問テ云ク此事何なる證據あるや。答フ經ニ云ク由下愛ニ敬シ惡人ヲ治ニ罰善人上ヲ故ニ星宿及風雨皆不ニ以テ時行一等云云。夫天地は國の明鏡也今此國に天災地夭あり。可シ知ル國主に失ありと云ッ事を。鏡にうかべたれば不レ可レ諍フ之ヲ國主小禍のある時は天鏡に小災見ゆ。今の大災は當レ知ル大禍ありと云フ事を。仁王經には小難は無量なり中難は二十九大難ハ七とあり。此經をば一には仁王と名け二には天地鏡と名く。此國主を天地鏡に移して見ルに明白也。又此經文ニ云ク聖人去ン時ハ七難必起ル等云云。當ニ知ル此國に有ニ大聖人ニ又可シ知ル彼聖人を國主不レ信セ云フ事を。問テ云ク先代に佛寺を失ひし時何ッ此瑞なきや。答テ云ク瑞は失の輕重によりて大小あり此度の瑞は怪むべし。一度二度にあらず一返二返にあらず年月をふるまゝに彌盛也。以テ之ヲ可シ察ス之ヲ先代の失よりも過キたる國主に失あり。國主の身にて萬民を殺し又萬臣を殺しアヽ父母を殺す失よりも。聖人を怨む事彼に過ぐる事を。今日本國の王臣並に萬民には。月氏漢土總じて一閻浮提に佛滅後二千二百二十餘年之間。いまだなき大科人ごとにあるなり。譬ば十方世界の五逆の者を一處に集メたるが如し。此國の一切の僧は皆提婆羅伽利が魂を移し。國主は阿闍世王波瑠璃王の化身也。一切の臣民は雨行大臣月稱大臣刹陀耆利等の惡人をあつめて日本國の民となせり。古は二人三人逆罪不孝の者ありしかばこそ其人の在所は大地も破て入リぬれ。今は此國に充滿せる故に国本國の大地一時にわれ無間に墮チ入ラざらん外は。一人二人の住所の墮ッべきやうなし。例せば老人の一二の白毛をば拔ゞども老耄の時は皆白毛なれば何を分て拔キ捨ッべき。只一度に剃捨る如ク也。問テ云ク如ニ汝カ義ノ者我法華經の行者なるを用ざるが故に天變地夭等ありと。法華經第八ニ云ク頭ヘ破作ニ七分ト第五ニ云ク若人惡ニ罵口則閉塞ス等云云。如何ぞ數年が間罵とも怨とも其義なきや。答フ反詰云ク不輕菩薩を毀訾し罵詈し打擲せし人は口閉頭破ありけるか如何。問フ然者經文に相違する事如何。答フ法華經を怨む人に二人あり。一人は先生に善根ありて今生に緣を求ッて。菩提心を發して佛になるべき者は或は口閉テ或は頭ヘ破。一人は先生に謗人也今生にも謗じ生生に無間地獄の業を成就せる者あり。是はのれども口則閉塞せず。譬ば獄に入ッて死罪に定マる者は獄の中にて何なる僻事あれども死罪を行フまでにて別の失なし。ゆり(免)ぬべき者は獄中

にて辟事あればこれをいましむるが如し。問テ云ク此事第一の大事也委細に可レ承ハル。答テ云ク涅槃經ニ云ク法華經ニ云ク云云。

日蓮花押

明治三十六年十二月六日延山日朝上人御眞蹟對照ノ御本ヲ以テ遺文大本六十三紙（一一四八）ヨリ六十七紙ノ右初行（一一五二の三行）「大地」マデ餘ハ朝本等ニ依テ校ス（稻田海素記）

高祖遺文錄卷之十八

○上野殿御返事　微上三　考三四四

さつきの二日にいも（芋）のかしらひし（石）のやうにほされて候ヲ一駄。ふじ（富士）のうへの（上野）よりみのぶ（身延）の山へをくり給ヒて候。佛の御弟子にありちち（阿那律）と申せし人は。天眼第一のあなりちとて十人の御弟子のうの一。迦葉舍利弗目連阿難にかたをならべし人也。この人のゆらひ（由來）をたづねみれば。師子頰王と申せし國王の第二の王子にこくぼん（斛飯）王と申せし人の御子。釋迦如來のいとこ（從弟）にてれはしましき。この人の御名三ツ候一には無貧ムヒン二には如意ニヨイ三にはむれう（無邊）と申す一一にふしぎの事候。昔うゑ（飢）たるよ（世）にりだ（利陀）りんたやと申せしたうとき辟支佛ありき。うゑたるよに七日とき（齋）もならざりけるが。山里にれうし（獵師）の御器ウツワに入レて候けるひゑ（稗）のはん（飯）をこひてならせ給フ。このゆへにこのれうし（獵師）現在には長者となりのち九十一劫が間人中天上にたのしみをうけて。今最後にこくぼん王の太子とむまれさせ給フ。金カネのごき（御器）にはん（飯）とこしなへにたえ（絶）せ

ずあらかん（阿羅漢）とならせ給フ。御眼ニ三千大千世界を一時ニ御らんありていみじくをはせしが。法華經第四ノ巻にして普明如來と成ルべきよし佛に仰セをかはらせ給ヒき。妙樂大師此事ヲ釋云ク稗飯雖レ輕以下盡ニ所有一及田勝上故ニ故得ニ勝報一ヲと云云。釋の心かろきひねのはんなれども此よのほかにはも（持）たざりしを。たうとき人のうゑてはせしにまいらせてありしゆへにかゝるめでたき人となると云云。此身のぶのさわは石なんどはたほく候されどもかゝるものなし。りの上夏のころなれば民のいとまも候はじ。又御造營と申さこそ候らんに。山里の事をもひやらせ給ヒてをくりたびて候。所詮はわがをや（我親）のわかれ（別）をしさに。父の御ために釋迦佛法華經へまいらせ給フにや孝養の御心か。さる事なくば梵王帝釋日月四天りの人の家をすみか（栖）とせんとちかはせ給ヒて候はゞ。いふにかひなきものなれども。約束と申ス事はたがへぬ事にて候に。さりともこの人人はいかでか佛前の御約束をばたがへさせ給フべき。もし此事まことになり候はば。わが（我）大事とおもはん人人のせいし（御止）候。又ほきなる難來るべし。りの時すでに此事かなう（叶）べきにやとおぼしめしていよいよ強盛なるべし。さるほどならば聖靈佛になり給フべし。成リ給フならば來ルてまほり給フべし。其時一切は心にまかせんずるなり。かへすがへす人のせいし（制止）あらば心にうれし（嬉）くおぼすべし。恐恐謹言。

五月三日　　日蓮花押

上野殿御返事

明治三十六年一月十七日富士大石寺ニ於テ日興上人ノ御寫本ヲ以テ校正ス（稲田海素記）

○一谷入道御書　啓三五二七　鈔二五九　語五二　拾七五四　扶一四五一

去弘長元年太歳辛酉五月十二日に御勘氣を蒙ッて。伊豆ノ國伊東ノ郷と云フ處に流罪せられたりき。兵衛ノ介頼朝のながされてありし處也。さありしかども無レ程同三年太歳癸亥二月二十二日に召シ返されぬ。又文永八年太歳辛未九月十二日重テて御勘氣を蒙りしが。忽に頸を刎らるべきにてありけるが。子細ありけるかの故にしばらくのびて北國佐渡の嶋を知行する武藏ノ前司預リて。其内の者どもの沙汰として彼嶋に行キ付ィてありしが。彼島の者ども因果の理をも辨へぬあらゑびす（荒夷）なればあらくあたりし事は申ス計リなし。然ども一分も恨ムる心なし。其故は日本國の主として少シも道理を知リぬべき相摸殿だにも。國をたすけんと云フ

者を子細も聞ほど(解)かず理不盡に死罪にあてがう事なれば。況や其末の者どもの事はよき(善)もたのまれずあしき(惡)もにくからず。此法門を申始しより命をば法華經に奉り名をば十方世界の諸佛の淨土にながすべしと思ひ儲けし也。弘演と云し者は主衛の懿公の肝を取て我腹を割て納めて死にき。豫讓と云し者は主の知伯が恥をすゝがんがために劒を呑て死せしぞかし。是は但わづかの世間の恩を報せんがためぞかし。況や無量劫より已來六道に流轉して佛にならざりし事は。法華經の御ために身を惜み命を捨ざる故ぞかし。されば意見菩薩と申せし菩薩は千二百歲の間臂を燒て法華經を供養し。七萬二千歲の間身を燒て日月淨明德佛を供養し奉る。其人は藥王菩薩ぞかし。不輕菩薩は法華經の御ために多劫之間罵詈毀辱杖木瓦石にせめられき。今の釋迦佛にあらずや。されば佛になる道は時により品品に替って行ずべきにや。今の世には法華經はさる事にてれはすれども時によりて事ことなるなれば。山林に交て讀誦すとも將又里に住して演說すとも。持戒にして行ずとも臂を燒て供養すとも佛にはなるべからず。日本國は佛法盛なるやうなれども佛法について不思議あり人是を不知ず。譬ば蟲の火に入り鳥の蛇の口に入るが如し。眞言師華嚴宗法相三論禪宗淨土宗律宗等の人人は。我も法を得たり我も生死を離たる人とは思へども。立始めし本師等依經の意をも不辨。但我心の思付て有りしまゝに其經を取立んと思へる無墓心計りにて。法華經に背けば又佛意にも叶はざる事をば知ずして弘め行く程に。國主萬民是を信じぬ。又佗國へ渡り又年久く成りぬ。末學の者共本師の誤りをば知ずして弘め習ひし人人をも智者とは思へり。源濁りぬれば流不淨身曲りぬれば影不直。眞言の元祖善無畏等は既に地獄に墮ぬべかりしが。或は改悔して地獄を免れたる者もあり。或は唯依經を弘て法華經の讚歎をもせざれば。生死は離れねども不墮惡道人もあり。而を末末の者此事を知ずして諸人一同に信をなしぬ。譬ば破たる船に乘て大海に浮び酒に醉る者の火の中に臥せるが如し。日蓮是を見し故に忽に菩提心を發して此事を申始し也。世間の人人何に申すとも信ずる事はあるべからず。還て流罪死罪せらるべしとは兼て知ってありしかども。今の日本國は法華經に背き釋迦佛を捨る故に。後生は必無間大城に墮ちん事はさてをきぬ今生にも必大難に値べし。所謂佗國より責來て上下一人より下萬民に至まで一同の歎きあるべし。譬ば千人の兄弟が一人の親を殺

したらんに此罪を千に分ては受ぐべからず。一一に皆無間大城に墮て同く一劫を經べし。此國も又又如是ノ娑婆世界は五百塵點劫より已來教主釋尊の御所領也。大地虛空山海草木一分も佗佛の有ならず。又一切衆生は釋尊の御子也。譬ば成劫の始ノ一人の梵王下って六道の衆生をば生て候ぞかし。梵王の一切衆生の親たるが如く釋迦佛も又一切衆生の親也。又此國の一切衆生のために教主釋尊は明師にてれはずるぞかし。父母を知ぬも師の恩也黑白を辨も釋尊の恩也。而ルを天魔の身に入って候善導法然なんどが申スに付て。國土に阿彌陀堂を造り或は一郡一鄕一村等に阿彌陀堂を造り。或は百姓萬民の宅ごとに阿彌陀堂を造り。或は宅宅人人ごとに阿彌陀佛を書造り。或は人ごとに口口に或は高聲に唱へ或は一萬遍或は六萬遍なんど唱るに。少シも智慧ある者はいよいよこれをすゝむ。譬へば火にかれたる草をくわへ水に風を合たるに似たり。此國の人人は一人もなく教主釋尊の御弟子御民ぞかし。而ルに阿彌陀等の佗佛を一佛もつくらずかかず念佛も申さずある者は。惡人なれども釋迦佛を奉ル捨テ色は未タ顯レ。一向に阿彌陀佛を念ずる人人は既に釋迦佛を捨て奉る色顯然也。彼人人の無ク墓念佛を申す者は惡人にてあるぞかし。父母にもあらず主君師匠にてもれはせぬ佛をばいとをし（最愛）き妻の樣にもてなし。現に國主父母明師たる釋迦佛を捨て。乳母の如ノなる法華經をば口にも不レ奉レ誦シ是豈ニ不孝の者にあらずや。此不孝の人人一人二人百人千人ならず一國二國ならず。上ミ一人より下モ萬民に至まで日本國皆こぞりて一人もなく三逆罪の者也。されば日月は色を變じて此をにらめ大地も瞋てをどりあが（震動）り大彗星天にはびこり。大火國に充滿すれども僻事ありともれもはず。我等は念佛にひまなし其上念佛堂を造り阿彌陀佛を持テ奉るなんど自讚する也。是は賢き樣にて無シ墓。譬ば若き夫妻等が夫は女を愛し女は夫をいとれしむ程に。父母のゆくへ（行方）をしらず父母は衣薄けれども我はねや（閨）熱し。父母は食せざれども我は腹に飽ぬ。是は第一の不孝なれども彼等は失ともしらず。況や母に背く妻父にさか（逆）へる夫逆重罪にあらずや。阿彌陀佛は十萬億のあなたに有って此娑婆世界には一分も緣なし。なにと云ッとも故もなき也。馬に牛を合セ犬に猿をかたらひたるが如し。但日蓮一人計リ此事を知りぬ。命を惜て云はずば國恩を報せぬ上教主釋尊の御敵となるべし。是を恐れずして有のまゝに申スならば死罪となるべし。設ひ死罪は免るとも流罪は疑なかる

べしとは兼て知ってありしかども。佛ノ恩重キが故に人をはばからず申シぬ。案に
たがはず兩度まで流されて候し中に。文永九年の夏の比佐渡ノ國石田ノ郷一谷
と云し處に有りしに。預りたる名主等は公と云ひ私と云ひ。父母の敵よりも
宿世の敵よりも惡げにありしに。宿の入道と云ひ妻と云ひつかう者と云ひ。
始ハはぢ(畏)をうれしかども先世の事にやありけん。內內不便と思ふ心付
ぬ。預りよりあづかる食は少し付ケる弟子は多くありしに。僅の飯の二口三
口あり。しを或はれしき(折敷)に分け或は手に入て食しに。宅主內內心あて外
にはをりるる樣なれども。內には不便げにありし事何の世にかわすれん。我を
生てれはせし父母よりも當時は大事とこそ思しか。何なる恩をもはげむべし
まして約束せし事たがうべしや。然れども入道の心は後世を深く思てある者
なれば久く念佛を申シつもりぬ。其上阿彌陀堂を造り田畠も其佛の物也。地頭
も又をろろ(怖)しなんど思て直に法華經にはならず。是は彼身には第一の
道理ぞかし。然れども又無間大城は無レ疑ヒ。設ひ是より法華經を遣したりと
も世間もをろろしければ念佛すつべからずなんど思はば。火に水を合せたる
が如し。謗法の大水法華經を信ずる小火をけさん事疑ヒなかるべし。入道地
獄に墮るならば還て日蓮が失になるべし。如何んがせん如何んがせんと思わ
づらひて今まで法華經を渡し奉らず。渡し進せんが爲にまう(儲)けまいらせ
て有りつる法華經をば。鎌倉の燒亡に取り失ひ參せて候由申ス。旁入道の法華
經の緣はなかりけり。約束申シける我心も不思議也。又我とはすゝまざりし
を鎌倉の尼の還りの用途に歎きし故に口入有りし事なげかし。本錢に利分を添
て返さんとすれば。又弟子が云ク御約束違ひなんど申ス。旁進退極りて候へど
も人の思ハん樣は狂惑の樣なるべし。力及ばずして法華經を一部十卷渡し奉
る。入道よりもうば(祖母)にてありし者は內內心よせなりしかば是を持ち給
へ。且蓮が申ス事は愚なる者の申ス事なれば用ひず。されども去文永十一年太歲甲戌
十月に蒙古國より筑紫によせて有りしに對馬の者かため(固)て有りしに宗ノ總
馬ノ尉逃ければ。百姓等は男をば或は殺し或は生取にし。女をば或は取集て
手をとを(通)して船に結付或は生ケ取にす。一人も助かる者なし。壹岐によせて
も又如レ是ノ。船れしよせて有りけるには奉行入道豐前ノ前司は逃て落チぬ。松浦カ
黨は數百人打れ或は生ケ取にせられしかば。寄たりける浦浦の百姓ども壹岐
對馬の如し。又今度は如何が有ルらん。彼國の百千萬億の兵日本國を引回し

を寄て有ならば如何に成べきぞ。北の手は先ッ佐渡の島に付て地頭守護をば須臾に打殺し。百姓等は北山へにげ（逃）ん程に或は殺され或は生ケ取れ或は山にして死ぬべし。抑是程の事は如何として起るべきぞと推すべし。前に申しつるが如く此國の者は一人もなく三逆罪の者也。是は梵王帝釋日月四天の彼蒙古國の大王の身に入らせ給て責め給ふ也。日蓮は愚なれども釋迦佛の御使法華經の行者也となのり候を。用ゐざらんだにも不思議なるべし。其失に依ッて國破れなんとす。況や或は國國を追ひ或は引はり或は打擲し或は流罪し。或は弟子を殺し或は所領を取る。現の父母の使をかくせん人人よ（善）かるべしや。日蓮は日本國の人人の父母ぞかし主君ぞかし明師ぞかし。是を背ん事よ。念佛を申さん人人は無間地獄に墮ん事決定なるべしたのもしたのもし。抑蒙古國より責ッん時は如何がせさせ給ふべき。此法華經をいただ（戴）き頸にかけさせ給て北山へ登らせ給ふとも。年比念佛者を養ひ念佛を申して。釋迦佛法華經の御敵とならせ給て有りし事は久しし。又若し命ともなるならば法華經ばし恨ませ給ふなよ。又閻魔王宮にしては何とか仰せあるべき。れこがましき事とはれぼすとも。其時は日蓮が檀那也ところ仰せあらんずらめ。又是はさてをきぬ。此法華經をば學乖房に常に開かさせ給ふべし。人如何に云ッとも念佛者眞言師持齋なんどにばし開かさせ給ふべからず。又日蓮が弟子となのるとも日蓮が判を持ざらん者をば御用あるべからず。恐恐謹言。

五月八日　　日蓮花押

一谷入道女房

此書ノ斷編即チ大本ノ六丁右六行（一一七八の十一行）「いよ」ヨリ「くゐ」マデ二行廿三字ノ御眞蹟ハ京都本國寺ニアリ參考ノタメニ記ス（稻田海素記）

○さじき（樓敷）女房御返事　考三九

女人は水のごとしうつは（器）物にしたがう。女人はさじきさる。女人はふね（舟）のごとしかぢ（楫）のまかするによるべし。しかるに女人はをとこ（夫）ぬす（盜）人なれば女人ぬす人となる。をとこ王なれば女人きさき（后）となる。をとこ善人なれば女人佛になる。今生のみならず後生もをとこによるなり。しかるに兵衛のさゑもんどの（左衛門殿）は法華經の行者なり。たどひいかなる事ありともをとこのめ（妻）なれば。法華經の女人とこそ佛はしろし

めされて候らんに。又我とこゝろ(心)をを(發)して法華經の御ために御かたびら(帷)をくり(贈)たびて候。法華經の行者に二人あり聖人は皮をはい(剝)で文字をうつす。凡夫はただひとつ(一領)きて候かたびらなどを法華經の行者に供養すれば皮をはぐうちに佛をさめ(收)させ給ふなり。此人のかたびらは法華經の六萬九千三百八十四の文字の佛にまいらせさせ給ぬれば。六萬九千三百八十四のかたびら也。又六萬九千三百八十四の佛一一六萬九千三百八十四の文字なれば。此かたびらも又かくのごとし。たとへばはる(春)の野の千里ばかりにくさ(草)のみちて候はんに。すこしの豆ばかりの火をくさひとつにはなち(放)たれば。一時に無量無邊の火となる。此かたびらも又かくのごとし。ひとつ(一領)のかたびらなれども法華經の一切の文字の佛にたてまつるべし。この功德は父母祖父母乃至無邊の衆生にもをよぼしてん。ましてわがいとをし(最愛)とをもふをとこは申ゝに及ばずと。ねぼしめすべしねぼしめすべし。

五月二十五日　　日蓮花押

さじき女房御返事

○妙一尼御前御消息　考二一九

妙一尼御前　　日蓮

夫レ天に月なく日なくば草木いかでか生ずべき。人に父母あり一人もかけば子息等うだちがたし。其上過去の聖靈は或は病子あり或は女子あり。とゞめ(留)をく母もかいがいしからず。たれ(誰)にいゐあつけ(言託)てか冥途にをもむき給ふけん。大覺世尊御涅槃の時なげいてのたまはく。我涅槃すべし但心にかゝる事は阿闍世王耳(のみ)。迦葉童子菩薩佛に申(サク)佛は平等の慈悲なり一切衆生のためにいのち(命)を惜ミ給べし。いかにかさわけ(擇別)て阿闍世王一人とをぼせあるやらんと問ふまいらせしかば。其御返事に云ク譬如(ヘシ)一人而有(ニリ)七子一是ノ七子ノ中ニ一子遇(リ)病ニ父母之心非(ルニハ)不(ルニハ)平等(ナラ)一然(ナレ)於(チハ)病子一心則偏ニ重(キカ)上等云云。天台摩訶止觀に此經文ヲ釋シ云ク譬如七子父母非不平等然於病者心則偏重等云云とこゝろ佛は答ヘさせ給ふしが。文の心は人にはあまたの子あれども父母の心は病する子にあり(うも)となり。佛の御ためには一切衆生は皆子なり。其の中罪ふかくして世間の父母をこゝろし。佛經のかたきとなる者は病子(ヌル)のごとし。しかるに阿闍世王は摩竭提(まかだ)國の主なり。我大檀那(だんな)たりし頻婆舎羅(びんばしやら)王をこゝろし我がてきとなりし

かば。天も すてて日月に變いで地も頂かじとふるひ。萬民みな佛法にうむき佗國より摩竭提國をせむ。此等は偏に惡人提婆達多を師とせるゆへなり。結句は今日より惡瘡身に出て三月の七日無間地獄に墮ッべし。これがかなしければ我涅槃せんこと心にかゝるというなり。我阿闍世王をすくひ（救）なば一切の罪人阿闍世王のごとしとなげかせ給ひき。しかるに聖靈は或は病子あり或は女子あり。われすてて冥途にゆきなばかれ（枯）たる朽木のやうなるとしより（老）尼が一人とどまりて。此子どもをいかに心ぐるし（苦）かるらんとなげかれ（嘆）ぬらんとたのもゆ。かの心のかたがたには又日蓮が事心にかゝらせ給ひけん。佛語むなしからざれば法華經ひろまらせ給ッべし。うれについては此御房はいかなる事もありていみじくならせ給ッべしとたのもしつらんに。いうかいなくながし（流）し失しかば。いかにやいかにや法華經十羅刹はところをもはれけんに。いまだにもながら（存生）ゐ給ひたりしかば日蓮がゆりて候し時いかに悅ばせ給ッはん。又いゐ（言）し事むなし（空）からずして。大蒙古國もよせて國土もあやをしげ（危無）になりて候へばいかに悅ひ給はん。これは凡夫の心なり。法華經を信ずる人は冬のごとし冬は必春となる。いまだ昔よりきかずみず冬の秋とかへれる事を。いまだきかず法華經を信ずる人の凡夫となる事を。經文には若有聞法者無一不成佛ととかれて候。故聖靈は法華經に命をすててをはしき。わづかの身命をさゝい（支）しところを法華經のゆへにめさ（召）れしは命をすつるにあらずや。彼の雪山童子の半偈のために身をすて。藥王菩薩の臂をやき給は彼聖人なり火に水を入がごとし。此凡夫なり紙を火に入がごとし。此をもつて案に聖靈は此功德あり。大月輪の中か大日輪の中か天鏡をもつて妻子の身を浮て十二時に御らんあるらん。設妻子は凡夫なればみずきかず。譬へば耳しゐ（聾）たる者の雷の聲をきかず目つぶ（失明）れたる者の日輪を見ざるがごとし。御疑あるべからず定て御まほりとならせ給ッらん。其上さこそ御わたりあるらめ。力あらばとひ（訪）まひらせんとをもうところに衣を一ッ給でう存外の次第なり。法華經はいみじき御經にてをはすれば。もし今生にいき（生）ある身ともなり候なば尼ごぜん（御前）の生きてをわしませ。もし（若）は草のかげ（陰）にても御らんあれ。をさなきさんだち（公達）等をば。かへり見たてまつるべし。さど（佐渡）の國と申しこれと申し下人一人つけられて候はいつの世にかわすれ候べき。此恩はかへりてつかへ（仕）たてまつり候べし。南無妙法蓮華

經南無妙法蓮華經。恐恐。

五月　日　　日蓮　花押

妙一尼御前

明治三十五年四月一日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜服シ奉ル但シ封書ノ處ニ讃ガタキ所アリ又御眞蹟ハ六丁ニシテ九十八行ナリ（稻田海素處記）

釋子日蓮遺

○撰時抄

夫レ佛法を學せん法は必ず先ず時をならうべし。過去の大通智勝佛は出世し給ヒて十小劫が間一經も說き給はず。經ニ云ク一坐十小劫又云ク佛知時未至受請默然坐等云云。今の教主釋尊は四十餘年之程法華經を說き給はず經に云ク說時未至故と云云。老子は母ノ胎に處して八十年。彌勒菩薩は兜率の內院に籠ら世給ヒて五十六億七千萬歲をまち給うべし。彼時鳥は春ををくり鷄鳥は曉をまつ畜生すらなをかくのごとし。何に況や佛法を修行せんに時を糾ざるべしや。寂滅道場の砌には十方の諸佛示現し一切の大菩薩集會し給フに。梵帝四天は衣をひるがへし龍神八部は掌を合せ。凡夫大根性の者は耳をうばだて生身得忍の諸菩薩解脫月等請をなし給ヒしかども。世尊は二乘作佛久遠實成をば名字をかく(祕)し。即身成佛一念三千の肝心其義を宣給はず。此等は偏にこれ機は有りしかども時ノ來らざればのべさせ給はず經に云ク說時未ダ至ラ故等云云。靈山會上の砌には閻浮第一の不孝ノ人たりし阿闍世大王座につらなり。一代謗法の提婆達多には天王如來と名をさづけ。五障の龍女は蛇身をあ

らためずして佛になる。決定性の成佛は燋種の花さき果なり。久遠實成は百歳の叟二十五の子となれるかとうたがふ。一念三千は九界即佛界佛界即九界と談ず。されば此經の一字は如意寶珠なり一句は諸佛の種子となる。此等は機の熟不熟はさてをきぬ時の至れるゆへなり。經ニ云ク今正是其時決定說ニ大乘ヲ等云云。問テ云ク機にあらざるに大法を授ゞられば愚人は定て誹謗をなして。惡道に墮ルならば豈ニ說ク者の罪にあらずや。答テ云ク人路をつくる路に迷フ者あり作ル者の罪となるべしや。良醫藥を病人にあたう病人嫌て服せずして死セば良醫の失となるか。尋ネ云ク法華經の第二ニ云ク無智ノ人ノ中ニ莫レ說ニ此經ヲ。同第四ニ云ク不レ可ニ分布ノ妄授ニ與ス人ニ。同第五ニ云ク此法華經ハ諸佛如來ノ祕密之藏於ニ諸經ノ中ニ最モ在ニ其上ニ長夜ニ守護ノ不ニ妄宣說ヲ等云云。此等の經文は機にあらずば說ざれというか。今反詰云ク不輕品ニ云ク而モ作ニ是ノ言ヲ我深ク敬フニ汝等ヲ等云云。四衆之中ニ有リ生ニ瞋恚ヲ心不淨者上惡口罵詈言ク是ノ無智ノ比丘。又云ク衆人或ハ以ニ杖木瓦石ヲ而打ニ擲ス之ヲ等云云。勸持品ニ云ク有下諸ノ無智ノ人ノ惡口罵詈等シ及ト加ニ刀杖ヲ者上等云云。此等の經文は惡口罵詈乃至打擲すれども・とかれ（說）て候は說ク人の失となりけるか。求云ク此の兩說は水火なりいかんが心うべき。答テ云ク天台云ク適レ時ニ而已章安云ク取捨得レテ宜不レ可ニ一向ニ等云云。釋の心は或時は謗じぬべきにはしばらくとかず。或時は謗ずとも強て說ク べし。或時は一機は信ずべくとも萬機謗ルべくばとくべからず。或時は萬機一同に謗ずとも強て說ク べし。初成道の時は法慧功德林金剛幢金剛藏文殊普賢彌勒解脫月等の大菩薩。梵帝四天等の凡夫大根性の者かずをしらず。鹿野苑の苑には俱鄰等の五人迦葉等の二百五十人舍利弗等の二百五十人八萬の諸天。方等大會の儀式には世尊の慈父の淨飯大王ねんごろに戀せさせ給ヒしかば。佛宮に入ラせ給テ觀佛三昧經をとかせ給ヒ。悲母の御ために忉利天に九十日が間籠らせ給ヒしには摩耶經をとかせ給フ。慈父悲母なんどにはいかなる祕法か惜ませ給フべき。なれども法華經をば說せ給はず。せんするところ機にはよらず時いたらざればいかにもとかせ給はぬにや。問テ云ク いかなる時にか小乘權經をときいかなる時にか法華經を說ク べきや。答テ云ク十信の菩薩より等覺の大士にいたるまで時と機とをば相知ッがたき事なり。何に況や我等は凡夫なりいかでか時機をしるべきや。求テ云ク すこしも知ル事あるべからざるか。答テ云ク佛眼をかつて時機をかんがへよ佛日を用て國土をてらせ。問テ云ク

其心如何。答テ云ク大集經に大覺世尊月藏菩薩に對して末來の時を定メ給ひ。所謂我滅度ノ後ノ五百歳ノ中解脫堅固次の五百年には禪定堅固已上千年。次の五百年には讀誦多聞堅固次の五百年には多造塔寺堅固已上千年。次の五百年には於我法ノ中ニ鬪諍言訟白法隱沒等云云。此の五百歳二千五百餘年に人人の料簡さまざまなり。漢土の道綽禪師が云ク正像二千四箇の五百歳には小乘と大乘との白法盛なるべし。末法に入ッては彼等の白法皆な消滅して淨土の法門念佛の白法を修行せん人計リ生死をはなるべし。日本國の法然が料簡して云ク今日本國に流布する法華經華嚴經竝大日經諸ノ小乘經天台眞言律等の諸宗は。大集經の記文の正像二千年の白法なり。末法に入ッては彼等の白法は皆滅盡すべし。設行ずる人ありとも一人も生死をはなる（離）べからず。十住毗婆沙論と曇鸞法師の難行道道綽の未有一人得者善導の千中無一これなり。彼等の白法隱沒の次には淨土三部經彌陀稱名の一行ばかり大白法として出現すべし。此を行せん人人はいかなる惡人愚人なりとも。十即十生百即百生唯有淨土ノ一門可通入路これなり。されば後世を願はん人人は叡山東寺園城七大寺等の日本一州の諸寺諸山の御歸依をとゞめて。彼寺山によせ（寄）をけ

る田畠郡郷をうばいと（取）て念佛堂につけば。決定往生南無阿彌陀佛とすゝめければ。我朝一同に其の義になりて今に五十餘年なり。日蓮此等の惡義を難じやぶる事はことぶり候ぬ。彼の大集經の白法隱沒の時は第五の五百歳當世なる事は疑ひなし。但し彼の白法隱沒の次には法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の。一閻浮提の內八萬の國あり其の國國に八萬の王あり王王ごとに臣下竝に萬民までも。今日本國に彌陀稱名を四衆の口口に唱がごとく廣宣流布せさせ給ふべきなり。問テ云ク其證文如何。答テ云ク法華經の第七ニ云ク我滅度ノ後後五百歳ノ中ニ廣宣流布於閻浮提ニ無レ令ニ斷絶一等云云。經文は大集經の白法隱沒の次の時をとかせ給ふに廣宣流布と云云。同第六の卷ニ云ク惡世末法ノ時能持ッ是ノ經ヲ者等云云。又第五の卷ニ云ク於ニ後ノ末世ノ法欲レ滅時ニ等。又第四の卷ニ云ク而モ此經ハ者如來現在猶多ニ怨嫉一況滅度ノ後。又第五の卷に云ク一切世間多レ怨難レ信。又第七ノ卷に第五の五百歳鬪諍堅固の時を說テ云ク惡魔魔民諸ノ天龍夜叉鳩槃茶等得ニ其便一也。大集經ニ云ク於ニ我法ノ中ニ鬪諍言訟等云云。法華經ノ第五ニ云ク惡世ノ中ノ比丘又云ク或ハ有リ阿蘭若ニ等云云又云ク惡鬼入ッ其身ニ等云云。文の心は第五の五百歳の時惡鬼の身に入る大僧等國中に充

滿せん。其時に智人一人出現せん。彼の惡鬼の入レる大僧等時の王臣萬民等を語て惡口罵詈杖木瓦礫流罪死罪に行はん時。釋迦多寶十方の諸佛地涌の大菩薩らに仰セつけ。大菩薩は梵帝日月四天等に申シくだされ其時天變地夭盛なるべし。國主等其のいさめ(諫)を用ヒずは鄰國にをほせつけて。彼彼の國國の惡王惡比丘等をせめらるるならば。前代未聞の大鬪諍一閻浮提に起るべし。其時日月所照の四天下の一切衆生。或は國ををしみ或は身ををしむゆへに一切の佛菩薩にいのり(祈)をかくともしるし(驗)なくば。彼のにくみ(憎)つる一の小僧を信シて無量の大僧等八萬の大王等。一切の萬民皆頭を地につけ掌を合セて南無妙法蓮華經ととなうべし。例せば神力品の十神力の時十方世界の一切衆生一人もなく。娑婆世界に向テて大音聲をはな(發)ちて南無釋迦牟尼佛南無釋迦牟尼佛。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と一同にさけび(叫)しがごとし。問テ曰ク經文は分明に候天台妙樂傳敎等の未來記の言はありや。答テ曰ク汝が不審逆なり。釋を引かん時こそ經論はいかにとは不審せられたれ經文に分明ならば釋を尋ぬべからず。さて釋ノ文カ經に相違せば經をすてて釋につくべきか如何。彼レ云ク道理至極せりしかれども凡夫の習ヒ經は遠し釋は近し。近キ釋分明ならばいまだこし信心をます(增)べし。今云ク汝が不審ぬんどろなれば少少釋をいだすべし。天台大師云ク後ノ五百歲遠ク沾ヒ妙道ニ。妙樂大師云ク末法之初冥利不レ無。傳敎大師云ク正像稍過キ已テ末法太タ有リ近ニ法華一乘ノ機今正是其時何ヲ以テ得レ知ルコトヲ安樂行品ニ云ク末世法滅ノ時也。又云ク語レ代ヲ則像ノ終リ末ノ初メ尋レ地ヲ唐ノ東朔ノ西原レハ人ヲ則五濁之生鬪諍之時ナリ經ニ云ク猶多怨嫉況滅度後ト此言良有レ以也云云。夫釋尊の出世は住劫第九の減ノ人壽百歲の時也。百歲と十歲との中間在世五十年滅後二千年と一萬年となり。其中間に法華經の流布の時二度あるべし。所謂在世ノ八年滅後には末法の始ノ五百年なり。而に天台妙樂傳敎等は進ンては在世法華經の時にもれさせ給ヒぬ。退イては滅後末法の時にも生レさせ給はず。中間なる事をなげかせ給ヒて末法の始をこひ(戀)させ給フ御筆なり。例せば阿弘陀仙人が悉達太子の生レさせ給シを見て悲テ云ク。現生には九十にあまれり太子の成道を見ルべからず。後生には無色界に生レて五十年の說法の坐にもつら(列)なるべからず。正像末にも生るべからずとなげきしがごとし。道心あらん人人は此を見きて悅ばせ給へ。正像二千年の大王よりも後世ををもはん人人は末法の今の民にてこそあるべけれ。此を信せざらんや。彼の天台ノ

座主よりも南無妙法蓮華經と唱る癲人とはなるべし。梁ノ武帝ノ願ニ云ク寧ろ提婆達多となる（成）て無間地獄には沈むとも鷲頭羅弗とはならじと云云。問テ云ク龍樹天親等の論師の中に此義ありや。答テ云ク龍樹天親等は内心には存せざれども言には此義を宣給はず。求云ク いかなる故にか宣給ハざるや。答テ云ク多クの故あり。一には彼ノ時には機なし二には時なし三には迹化なれば付囑せられ給はず。求テ云ク願くは此事よくよくきかんとをもう。答テ云ク夫佛の滅後二月十六日よりは正法の始メなり。迦葉尊者佛の付囑をうけて二十年。次に阿難尊者二十年次ニ商那和修二十年次ニ優婆崛多二十年次に提多迦二十年。已上一百年が間は但小乘經の法門をのみ弘通して諸大乘經は名字もなし。何況ヤ法華經をひろむべしや。次には彌遮迦 佛陀難提 佛馱密多 脇比丘 富那奢等の四五人。前ノ五百餘年が間は大乘經の法門少少出來せしかどもとりたてて弘通し給はず。但小乘經を面としてやみぬ。已上大集經の先キ五百年解脫堅固の時なり。正法の後六百年已後一千年が前。其中間に馬鳴菩薩 毗羅尊者 龍樹菩薩 提婆菩薩 羅睺尊者 僧佉難提 僧伽耶奢 鳩摩羅駄 闍夜那 盤陀 摩奴羅 鶴勒夜那 師子等の十餘人の人人。始メには外道の家に入ッ次には小乘經をきわめ。後には諸大乘經をもて諸小乘經をさんざんに破し失ハ給ヒき。此等の大士等は諸大乘經をもつて諸小乘經をば破せさせ給ヒしかども。諸大乘經と法華經の勝劣をば分明にかかせ給はず。設勝劣をすこしかかせ給ヒたるやうなれども本迹の十妙二乘作佛久遠實成已今當の妙百界千如一念三千の簡要の法門は分明ならず。但或は指をもつて月をさすがごとくし。或は文にあたりてひとはし（一端）計りかかせ給ヒて。化道の始終師弟の遠近得道の有無はすべて一分もみへず。此等は正法の後ノ五百年大集經の禪定堅固の時にあたれり。正法一千年の後は月氏に佛法充滿せしかども。或は小をもて大を破し或は權經をもつて實經を隱沒し。佛法さまざまに亂レしかば得道の人やふやくすくなく佛法につけて惡道に墮ル者かずをしらず。正法二千年の後像法に入ッて一十五年と申せしに佛法東に流レて漢土に入ッにき。像法の前五百年の内始の一百餘年が間は漢土の道士と月氏の佛法と諍論していまだ事さだまらず。設定りたりしかども佛法を信ずる人の心いまだふかからず。而に佛法の中に大小權實顯密をわか（分）つならば。聖教一同ならざる故疑をこりてかへりて外典ともな（伴）う者もありぬべし。これらのをろかのゆへに摩騰 竺蘭は自

は知て而も大小を分ず權實をいはずしてやみぬ。其後魏晉宋齊梁の五代が間佛法の内に大小權實顯密をあらりひし程に。いづれころ道理ともきこゑずして。上み一人より下も萬民にいたるまで不審すくなからず。南三北七と申して佛法十流にわかれり。所謂る南には三時四時五時北には五時半滿四宗五宗六宗。二宗の大乘一音等各各義を立て邊執水火なり。しかれども大綱は一同なり。所謂一代聖教の中には華嚴經第一涅槃經第二法華經第三なり。法華經は阿含般若淨名思益等の經經に對すれば眞實なり了義經正見なり。しかりといへども涅槃經に對すれば無常教不了義經邪見の經等云云。漢より四百餘年の末へ五百年に入って。陳隋二代に智顗と申す小僧一人あり後には天台智者大師と號したてまつる。南北の邪義をやぶりて一代聖教の中には法華經第一涅槃經第二華嚴經第三なり等云云。此れ像法の前五百歳大集經の讀誦多聞堅固の時にあひあたれり。像法の後五百歳は唐の始め太宗皇帝の御宇に。玄奘三藏月支に入って十九年が間。百三十箇國の寺塔を見聞して多々の論師に値たてまつりて。八萬聖教十二部經の淵底を習きわめしに。其中に二宗あり所謂法相宗三論宗なり。此二宗の中に法相大乘に遠々は彌勒無著近々は戒賢論師に傳へて。漢土にかへりて太宗皇帝にさづけさせ給ふ。此宗の心は佛教は機に隨ふべし。一乘の機のためには三乘方便一乘眞實なり所謂法華經等なり。三乘の機のためには三乘眞實一乘方便所謂深密經勝鬘經等此なり。天台智者等は此の旨を辨へず等云云。而も太宗は賢王なり當時名を一天にひびかすのみならず。三皇にもこゑ五帝にも勝たるよし四海にひびき。漢土を手ににぎるのみならず。高昌高麗等の一千八百餘國をなび(靡)かし。內外を極たる王ときこへし賢王の第一の御歸依の僧なり。天台宗の學者の中にも頭をさしいだす人一人もなし。而れば法華經の實義すでに一國に隱沒しぬ。同き太宗の太子高宗高宗の繼母則天皇后の御宇に法藏法師といふ者あり。法相宗に天台宗のをりわる(劣)るところを見て。前に天台の御時せめられし華嚴經を取り出して。一代の中には華嚴第一法華第二涅槃第三と立てけり。太宗第四代玄宗皇帝の御宇開元四年に同八年に。西天印度より善無畏三藏金剛智三藏不空三藏。大日經金剛頂經蘇悉地經を持て渡り眞言宗を立て。此の宗の立義に云く教に二種あり。一には釋迦の顯教所謂華嚴法華等。二には大日の密教所謂大日經等。法華經は顯教の第一なり此經は大日の密教に對すれ

ば極理は少し同じけれども。事相の印契と眞言とはたがへず三密相應せざれば不了義經等云云。已上法相華嚴眞言の三宗一同に天台法華宗をやぶれども。天台大師程の智人法華宗の中になかりけるかの問。内内はゆはれなき由は存じけれども。天台のごとく公場にして論せられざりければ。上は國王大臣下は一切の人民にいたるまで皆佛法に迷て衆生の得道みなとどまりけり。此等は像法の後の五百年の前二百餘年が内なり。像法に入って四百餘年と申しけるに。百濟國より一切經並に教主釋尊の木像僧尼等日本國にわたる。漢土の梁の末陳の始にあひわたる。日本には神武天王よりは第三十代欽明天王の御宇なり。欽明の御子用明の太子に上宮王子佛法を弘通し給ふのみならず。並に法華經淨名經勝鬘經を鎮護國家の法と定ざさせ給ひぬ。其後人王第三十七代に孝德天王の御宇に三論宗成實宗を觀勒僧正百濟國よりわたす。同御代に道昭法師漢土より法相宗倶舍宗をわたす。人王第四十四代元正天王の御宇に天竺より大日經をわたして有りしかども。而も弘通せずして漢土へかへる。此僧をば善無畏三藏という。人王第四十五代に聖武天皇の御宇に審祥大德新羅國より華嚴宗をわたして。良辨僧正聖武天王にさづけたてまつりて東大寺の大佛を立てさせ給へり。同御代に大唐の鑒眞和尚天台宗と律宗をわたす。其中に律宗をば弘通し小乘の戒場を東大寺に建立せしかども。法華宗の事をば名字をも申し出させ給はずして入滅し了。其後人王第五十代像法八百年に相當て桓武天王の御宇に。最澄と申す小僧出來せり後には傳教大師と號したてまつる。始めには三論法相華嚴倶舍成實律の六宗並に禪宗等を行表僧正等に習學せさせ給ひし程に。我と立給へる國昌寺後には比叡山と號す。此にして六宗の本經本論と宗宗の人師の釋とを引合て御らむありしかば。彼の宗宗の人師の釋所依の經論に相違せる事多き上僻見多多にして信受せん人皆惡道に墮ぬべしとかんがへさせ給ふ。其上法華經の實義は宗宗の人人我も得たり我も得たりと自讃ありしかども其義なし。此を申すならば喧嘩出來すべしもだして申さずは佛誓にそむきなんと。をもひわづらはせ給ひしかども。終に佛の誡めををそれて桓武皇帝に奏し給ひしかば。帝此の事ををどろかせ給ひて六宗の碩學に召し合させ給ふ。彼學者等始めは慢の鼻山のごとし惡心毒蛇のやうなりしかども。終に王の前にしてせめをとされて六宗七寺一同に御弟子となりぬ。例せば漢土の南北の諸師陳殿にして天台大師にせめをとされて御弟子

となりしがごとし。此はこれ圓定圓慧計りなり。其上天台大師のいまだせめ給はざりし小乘の別受戒をせめをとし。六宗の八大德に梵網經の大乘円愛戒をさづけ給ふのみならず。法華經の圓頓の別受戒を叡山に建立せしかず。延曆圓頓の別受戒は日本第一たるのみならず。佛ノ滅後一千八百餘年が間身毒ノ那一閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒日本國に始まる。されば傳敎大師は其功を論すれば龍樹天親にもこゑ天台妙樂にも勝ゝてをはします聖人なり。されば日本國の當世の東寺園城七大寺諸國の八宗淨土禪宗律宗等の諸僧等。誰人か傳敎大師の圓戒をうむくべき。かの漢土九國の諸律には圓定圓慧は天台の弟子にに(似)たれども。圓頓一同の戒場は漢土になければ戒にをいては弟子とならぬ者もあゝけん。この日本國は傳敎大師の御弟子にあらざる者ハ外道なり惡人なり。而ども漢土日本の天台宗と眞言の勝劣は大師心中には存知せさせ給ひけれども。六宗と天台宗とのごとく公場にして勝負なかりけるゆへにや。傳敎大師已後には東寺七寺園城ノ諸寺日本一州一同に。眞言宗は天台宗に勝ゝたりと上ゝ一人より下萬民にいたるまでをぼしめしをもひり。しかれば天台法華宗は傳敎大師の御時計りにぞありける。此傳敎の御時は像法の末ハ大集經の多造塔寺堅固の時なり。いまだ於我法中鬪諍言訟白法隱沒の時にはあたらず。今末法に入ッて二百餘歲大集經の於我法中鬪諍言訟白法隱沒の時にあたれり。佛語まこと(實)ならば定ッて一閻浮提に鬪諍起ルべき時節なり。傳ハ聞ク漢土は三百六十箇國二百六十餘州はすでに蒙古國に打チやぶられぬ。華洛すでにやぶられて徽宗欽宗の兩帝北蕃にいけどりにせられて。韃靼にして終にかくれ(崩御)させ給ヒぬ。徽宗の孫高宗皇帝は長安をせめをとされて田舍ノ臨安行在府に落チさせ給ヒて今に數年が間京を見ず。高麗六百餘國も新羅百濟等の諸國等も皆皆大蒙古國の皇帝にせめられぬ。今の日本國の壹岐對馬並に九國のごとし。鬪諍堅固の佛語地に墮ちず。あだかもこれ大海の一滴(雫)の時をたがへざるがごとし。是をもつて案ずるに大集經の白法隱沒の時に次で。法華經の大白法の日本國並に一閻浮提に廣宣流布せん事も疑うべからざるか。彼の大集經は佛說の中の權大乘ぞかし。生死をはなるる道には法華經の結緣なき者のためには未顯眞實なれども。六道四生三世の事を記シ給ヒけるは寸分もたがはざりけるにや。何況ヤ法華經は釋尊要當說眞實となのらせ給ヒ。多寶佛は眞實なりと御判をそう(添)へ十方の諸佛は廣長舌を梵天につけて

誠諦と指し示し。釋尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給ひて。後五百歳に一切の佛法の滅せん時。上行菩薩に妙法蓮華經の五字をもたしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良藥とせんと。梵帝日月四天龍神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや。大地は反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は來らずとも。日は東へかへるとも月は地に落ルとも此事は一定なるべし。此事一定ならば闘諍堅固の時日本國の王臣と竝に萬民等が。佛の御使として南無妙法蓮華經を流布せんとするを。或は罵詈し或ハ惡口し或ハ流罪し或は打擲し弟子眷屬等を種種の難にあわする人人いかでか安穩にては候べき。これをば愚癡の者は咒詛すとをもひぬべし。法華經をひろむる者は日本國の一切衆生の父母なり章安大師云ク爲レ彼除レ惡ヲ即是彼親等云云。されば日蓮は當帝の父母念佛者禪衆眞言師等が師範なり又主君なり。而ルを上を一人より下モ萬民にいたるまでわだ(怨)をなすをば日月いかでか彼等が頂を照し給ふべき。地神いかでか彼等の足を戴給ふべき。提婆達多ハ佛を打チたてまつりしかば大地搖動して火炎いでにき。檀彌羅王ハ師子尊者の頸を切りしかば右の手刀とともに落チぬ。徽宗皇帝ハ法道が面にかなやき(火印)をやきて江南にながせしかば半年が内にほろびす(夷人)の手にかゝり給ひき。蒙古のせめも又かくのごとくなるべし。設五天のつわもの(兵)をあつめて鐵圍山を城とせりともかなふべからず。必日本國の一切衆生兵難に値ふべし。されば日蓮が法華經の行者にてあるなき(有無)かはこれにて見ルべし。教主釋尊記云ク末代惡世に法華經を弘通するものを惡口罵詈等せん人は。我を一劫が間あだせん者の罪にも百千萬億倍すぎたるべしとときかせ給へり。而ルを今の日本國の國主萬民等雅(我)意にまかせて。父母宿世の敵よりもいたくにく(憎)み謀反殺害の者よりもつよくせめ(責)ぬるは。現身にも大地われて入り天雷も身をさか(裂)ざるは不審なり。日蓮が法華經の行者にてあらざるか。もししからばをゝきになげかし。今生には萬人にせめられて片時もやすからず。後生には惡道に墮ン事あさましとも申すばかりなし。又日蓮法華經の行者ならずばいかなる者の一乘の持者にてはあるべきぞ。法然が法華經をなげすてよ善導が千中無一道綽が未有一人得者と申スが法華經の行者にて候か。又弘法大師の云ク法華經を行ずるは戲論なりとかかれたるが法華經の行者なるべきか。經文には能持是經能說此經なんどてゝとかれて候へ。よくとくと申スはいかなるぞと申スに。於諸經中最在其上と

申して大日經華嚴經涅槃經般若經等に。法華經はすぐれて候なりと申す者をこそ。經文には法華經の行者とはとかれて候へ。もし經文のごとくならば日本國に佛法わたって七百餘年。傳教大師と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし。いかにいかにとをもうところに。頭破作七分の罰則閉塞のなかりけるは道理にて候けるなり。此等は淺き罰なり但一人二人等のことなり。日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。此をうしり此をあだむ人を結構せん人は閻浮第一の大難にあうべし。これは日本國をふりゆるがす正嘉の大地震一天を罰する文永の大彗星等なり。此等をみよ。佛滅後の後佛法を行ずる者にあだをなすといへども今のごとくの大難は一度もなきなり。南無妙法蓮華經と一切衆生にすゝめたる人一人もなし。此德はたれか一天に眼を合せ四海に肩をならぶべきや。疑て云く設正法の時は佛の在世に對すれば根機劣なりとも像末に對すれば最上の上機なり。いかでか正法の始めに法華經をば用ゐざるべき。隨て馬鳴龍樹提婆無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ。天親菩薩は千部の論師法華論を造りて諸經の第一の義を存す。眞諦三藏の相傳に云く月支に法華經を弘通せる家五十餘家天親は其一也。已上正法なり。像法に入っては天台大師像法の半に漢土に出現して玄と文と止との三十卷を造りて法華經の淵底を極めたり。像法の末に傳教大師日本に出現して天台大師の圓慧圓定の二法を我朝に弘通せしむるのみならず。圓頓の大戒場を叡山に建立して日本一州皆同く圓戒の地になして。上は一人より下は萬民まで延曆寺を師範と仰がせ給ふ。豈に像法の時法華經の廣宣流布にあらずや。答て云く如來の教法は必機に隨ふという事は世間の學者の存知なり。しかれども佛教はしからず。上根上智の人のために必大法を說くならば初成道の時なんぞ法華經をとき給はざる。正法の先五百年に大乘經を弘通すべし。有緣の人に大法を說せ給ふならば淨飯大王摩耶夫人に觀佛三昧經摩耶經をとくべからず。無緣の惡人謗法の者に祕法をあたへずは。覺德比丘は無量の破戒の者に涅槃經をざつくべからず。不輕菩薩は誹謗の四衆に向ッていかに法華經をば弘通せさせ給しぞ。されば機に隨て法を說くと申すは大なる僻見なり。問て云く龍樹世親等は法華經の實義をば宣給へずや答て云く宣給はず。問て云く何なる教をか宣給とし。答て云く華嚴方等般若大日經等の權大乘顯密の諸經をのべさせ給ひて。法華經の法門をば宣させ給はず。問て云く何にをもつてこれをしるや。答て

云ク龍樹菩薩の所造の論三十萬偈。而ども盡て漢土日本にわたらざれば其心しりがたしといわぬども。漢土にわたれる十住毗婆婆論中論大論等をもつて天竺の論をも比知して此を知ルなり。疑テ云ク天竺に殘る論の中にわたれる論よりも勝レたる論やあるらん。答テ云ク龍樹菩薩の事は私に申スべからず。佛記シ給フ我滅後に龍樹菩薩と申ス人南天竺に出ッべし彼人の所詮は中論という論に有ルべしと佛記シ給フ。隨て龍樹菩薩の流天竺に七十家あり七十人ともに大論師なり。彼の七十家の人人は皆中論を本とす。中論四卷二十七品ノ肝心は因緣所生法の四句の偈なり。此の四句の偈は華嚴般若等の四教三諦の法門なりいまだ法華開會の三諦をば宣給はず。疑テ云ク汝がごとくに料簡せる人ありや。答テ云ク天台云ク莫レ以テ中論ヲ相比スルコト上。又云ク天親龍樹内鑒洽然外ハ適フ時ノ宜キニ等云云。妙樂云ク論ニ破會ヲ者未タ若カ法華ニ故ニ云云。從義ノ云ク龍樹天親未タ若カ天台ニ云云。問テ云ク唐の末に不空三藏一卷の論をわたす其名を菩提心論スとなづく龍猛菩薩の造なり云云。弘法大師云ク此論は龍猛千部の中の第一肝心の論と云云。答テ云ク此論一部七丁あり龍猛の言ならぬ事處處に多し。故に目錄にも或は龍猛或は不空と兩方にいまだ事定マらず。其上此論文は一代を括れる論にもわらず荒量なる事此多し。先ッ唯眞言法中の肝心の文あやま(誤)りなり。其故は文證現證ある法華經の即身成佛をばなきになして。文證も現證もあとかたもなき眞言ノ經に即身成佛を立テ候。又唯という唯の一字は第一のあやまりなり。事のてい(體)を見るに不空三藏の私につくりて候を。時の人にをもく(重)せさせんがために事を龍猛によせ(寄)たるか。其上不空三藏は誤る事かずをはし。所謂法華經の觀智の儀軌に壽量品を阿彌陀佛とかける眼の前の大僻見。陀羅尼品を神力品の次にをける屬累品を經末に下セる此等はいうかひなし。さるかとみれば天台の大乘戒を盜ンで代宗皇帝に宣旨を申シ五臺山の五寺に立テたり。而も又眞言の教相には天台宗をす(爲)べしといわりかたがた誑惑の事ども多し。佗人の譯ならば用ユる事もありなん此人の譯せる經論は信ぜられず。揔じて月支より漢土に經論をわたす人舊譯新譯に一百八十七人なり。雜什三藏一人を除イてはいづれの人人も悞ラざるはなし。其中に不空三藏は殊に誤リ多き上誑惑の心顯なり。疑テ云ク何にをもつて知ルぞ。雜什三藏より外の人人はあやまりなりとは。汝が禪宗念佛眞言等の七宗を破るのみならず。漢土日本にわたる一切の譯者を用ざるかいかん。答テ云ク此事は余が第一の祕事なり委細

には向ッて問ッべし。但すこし申べし。羅什三藏の云ク我漢土の一切經を見るに皆梵語のごとくならずいかでか此事を顯すべき。但し一ッの大願あり。身を不淨になして妻を帶すべし舌計リ清淨になして佛法に妄語せじ。我死セば必やくべし。燒かん時舌燒るならば我が經をすてよと。常に高座にしてとかせ給ヒしなり。上一人より下モ萬民にいたるまで願云ク願くは羅什三藏より後に死せんと。終に死シ給フ後燒たてまつりしかば不淨の身は皆灰となりぬ。御舌計リ火中に青蓮華生て其上にあり。五色の光明を放チて夜は晝のごとく晝は日輪の御光をうばい給ヒき。さてこそ一切の譯人の經經は輕くなりて羅什三藏の譯シ給フる經經。殊に法華經は漢土にやすやすとひろまり給ヒしか。疑テ云ク羅什已前はしかるべし已後の善無畏不空等ハ如何。答テ云ク已後なりとも譯者の舌の燒ケるをば悞リありけりとしるべし。されば日本國に法相宗のはやり（流行）たりしを傳敎大師責めさせ給ヒしには。羅什三藏は舌燒けずと雖慈恩は舌燒ケぬとせめさせ給しかば。桓武天王は道理とをぼして天台法華宗へはうつらせ給ヒしなり。涅槃經の第三第九等をみまいらすれば我佛法は月支より佗國へわたらん之時。多クの謬誤出來して衆生の得道うす（薄）かるべしと（說）かれて候。されば妙樂大師は竝進退ハ在レ人ニ何ッ關ニ聖旨ニとこそうばされて候へ。今の人人いかに經のまゝに後世をねがうとも。あやま（過誤）れる經經のまゝにねがはば得道もあるべからず。しかればとても佛の御とがには（書）かれて候。佛敎を習ふ程には大小權實顯密はさてをく。これこそ第一の大事にては候らめ。疑テ云ク正法一千年の論師の內心には法華經の實義の顯密の諸經に超過してあるよしはしろしめしながら。外には宣說せずして但權大乘計リを宣させ給フことは。しかるべしとはをぼへねども其義はすこしきこえ候ぬ。像法一千年の半に天台智者大師出現して。題目の妙法蓮華經の五字を玄義十卷一千枚にかきつくし。文句十卷には始め如是我聞より終リ作禮而去にいたるまで。一字一句に因緣約敎本迹觀心の四の釋をならべて又一千枚に盡し給フ。已上玄義文句の二十卷には一切經の心を江河として法華經を大海にたとえ。十方界の佛法の露一滴も漏さず。妙法蓮華經の大海に入レさせ給ぬ。其上天竺の大論の諸義一點ももらさず。漢土南北の十師の義破すべきをばこれをはし取ルべきをば此を用フ。其上止觀十卷を注して一代の觀門ヲ一念にすべ（統）十界の依正を三千につづめ（縮）たり。此の書の文體は遠クは月支一千年之間の

論師にも超。近ゞは尸那五百年の人師の釋にも勝レたり。故に三論宗の吉藏大師南北一百餘人の先達と長者らをすゝめて。天台大師の講經を聞ケと勸る狀に云ク千年之興五百之實復在ニ於今日一。乃至南岳ノ叡聖天台ノ明哲昔三業住持シ今ハ二尊紹係ス。豈ニ止灑ニ甘露ヲ於震旦ニ亦當レ震フ法鼓ヲ於天竺ニ。生知妙悟魏晉以來典籍ノ風謠實ニ無シ連類一。乃至共ニ禪衆一百餘ノ僧ト奉ニ請スル智者大師ヲ一等云云。終南山ノ道宣律師天台大師ヲ讚歎云ク照ニ丁法華ヲ若ク高輝之臨ニ幽谷ニ說ニ摩訶衍ヲ一似ニ長風之遊ニ大虛ニ假令文字之師千羣萬衆數メ尋彼妙辨ヲ無シ能窮者一也。乃至義同指レ月ヲ乃至宗歸ス一極ニ云云。華嚴宗の法藏法師天台を讚云ク如ニ思禪師智者等ノ神異ニ感通迹參ニ登位ニ靈山ノ聽法憶ヒ在ニ於今一等云云。眞言宗の不空三藏含光法師等師弟共に眞言宗をすてて天台大師に歸伏する物語ニ云ク。高僧傳ニ云ク興ニ不空三藏一親遊ニ天竺ニ彼ニ有レ僧。問テ曰ク大唐ニ有ニ天台ノ迹敎一最モ堪下簡ヒ邪正一曉中偏圓上可ニ能譯レ之ヲ將ニ至ニ此土一耶等云云。此物語は含光が妙樂大師にかたり給ヒしなり。妙樂大師此物語を聞テ云ク豈ニ非ニ中國ニ失レ法ヲ求ニ之ヲ四維一ニ而此方少ニ有レ識者一如ニ魯人ノ耳等云云。身毒國の中に天台三十卷のごとくなる大論あるならば。南天の僧いかでか漢土の天台の釋をねがうべき。これあに像法の中に法華經の實義顯レて南閻浮提に廣宣流布するにあらずや。答テ云ク正法一千年像法の前、四百年。已上佛滅後一千四百餘年にいまだ論師の弘通し給はざる。一代超過の圓定圓慧を漢土に弘通し給ッのみならず其聲月氏までもきこえぬ。法華經の廣宣流布にはに(似)たれどもいまだ圓頓の戒壇を立テられず。小乘の威儀をもつて圓ノ慧定に切リつけるはすこし便なきにたり。例せば日輪の蝕がごとし月輪のかけたるに似たり。何にいわうや天台大師の御時は大集經の讀誦多聞堅固の時にあひあた(當)ていまだ廣宣流布の時にあらず。問テ云ク傳敎大師は日本國の士也。桓武の御宇に出世して欽明より二百餘年が間の邪義をなんじやぶ(難破)り。天台大師の圓慧圓定をせん(撰)じ給ッのみならず。鑒眞和尙の弘通せし日本小乘の三處の戒壇をなんじやぶり。叡山ニ圓頓の大乘別受戒を建立せり。此の大事は佛滅後一千八百年が間の身毒尸那扶桑乃至一閻浮提第一の奇事なり。內證は龍樹天台等には或は劣ルにもや或は同くもやあるらん。佛法の人をすべ(統)て一法となせる事は。龍樹天親にもこゑ南岳天台にもすぐれて見ゑさせ給ッなり。總じては如來御入滅ノ後一千八百餘年が間。此二人こそ法華經の行者にてはをはすれ。故ニ秀句ニ云ク若シ接テ須

彌ヲ擲ケ置カンモ佗方無數ノ佛土ニ亦未タ爲シトセ難ニ。乃至若佛ノ滅度ニ於テ惡世ノ中ニ能ク說シ此經ヲ是則爲レ難シ等云云。釋ノ此經ヲ云ク淺ハ易ク深ハ難シト釋迦ノ所判去レ淺ヲ就レ深ニ丈夫之心也。天台大師ハ信ニ順シ釋迦ニ助ケテ法華宗ヲ敷ケ揚シ震旦ニ叡山ノ一家ハ相ニ承シ天台ニ助ケテ法華宗ヲ弘ニ通ス日本ニ云云。釋の心は賢劫第九の減人壽百歲ノ時より。如來在世五十年滅後一千八百餘年が中間に。高サ十六萬八千由旬六百六千十二萬里の金山を。有人五尺の小身の手をもつて方一寸二寸等の瓦礫をにぎり(握)て一丁二丁までなぐるがごとく。雀鳥のとぶよりもはやく鐵圍山の外へなぐる者はありとも。法華經を佛のとかせ給ひしやうに說かん人は末法にはまれなるべし。天台大師傳敎大師こそ佛說に相似してとかせ給ひたる人にてはすれとなり。天竺の論師はいまだ法華經へゆきつ(行付)き給はず。漢土の天台已前の人師は或はすぎ或はたらず。慈恩法藏善無畏等は東を西といゐ天を地と申せる人人なり。此等は傳敎大師の自讚にはあらず。去延曆二十一年正月十九日高雄山に桓武皇帝行幸なりて。六宗七大寺の碩德善議勝猷奉基寵忍賢玉安福勤操修圓慈誥玄耀歲光道證光證覩敏等の十有餘人。最澄法師と召し合せられて宗論ありしに。或ハ一言に舌を卷て二言三言に及ばず皆一同に頭をかたぶけ手をあざ(叉)う。三論の二藏三時三轉法輪法相の三時五性華嚴宗の四敎五敎根本枝末六相十玄皆大綱をやぶらる。例せば大屋の棟梁のをれたるがごとし。十大德の慢ノ幢も倒レにき。爾時天子大に驚かせ給ひて同二十九日に弘世國道の兩吏を敕使として。重テ七寺六宗に仰せ下サれしかば。各各歸伏の狀を載セて云ク竊ニ見ニ天台ノ玄疏ヲ者摠ノ括ニ釋迦一代ノ敎ヲ悉ク顯ニ其趣ヲ無レ所レ不レ通セ獨リ逾ニ諸宗ニ殊ニ示ス一道ヲ。其中ノ所說甚深ノ妙理七箇ノ大寺六宗ノ學生昔所レ未タ聞カ曾テ所レ未タ見ルカ。三論法相久年之諍ヒ渙焉氷ノ釋ケ照然既ニ明猶ホ披ニ雲霧ヲ而見ニ中ヘ二光上ヲ矣。自リ聖德ノ弘化ニ以降于レ今二百餘年之間所レ講經論其數多ク矣彼此爭レ理ヲ其疑未タ解ケ。而此最妙ノ圓宗猶未タ闡揚セ蓋シ以テ此間ノ羣生未タ應ニ圓味ニ歟。伏惟聖朝久ク受ケ如來之付ヲ深ク結ヒ純圓之機ヲ一妙ノ義理始メテ乃チ興顯シ六宗ノ學者初メテ悟ニ至極ヲ。可レ謂ル此界ノ含靈而今而後悉ク載セ妙圓之船ニ早ク得ト濟ルコヲ於彼岸ニ。乃至善議等牽テ逢ヒ休運ニ乃闕ス奇詞ヲ自リ非ル深期ニ何ッ託ニ聖世ニ哉等云云。彼漢土の嘉祥等は一百餘人をあつめて天台大師を聖人と定メたり。今日本の七寺二百餘人は傳敎大師を聖人とがうしたてまつる。佛ノ滅後二千餘年に及ンて兩國に聖人二人出現せり。其上天台大師の未弘の圓頓大戒ヲ叡山に

建立し給う。此レ豈に像法の末に法華經廣宣流布するにあらずや。答テ云ク迦葉阿難等の弘通せざる大法ヲ馬鳴 龍樹 提婆 天親等の弘通せる事前の難に顯レたり。又龍樹天親等の流布し殘シ給ヘる大法天台大師の弘通し給ヲ事又難にあらはれぬ。又天台智者大師の弘通し給はざる圓頓の大戒ヲ傳敎大師の建立せさせ給ヲ事又顯然なり。但し詮と不審なる事は佛は說き盡クし給ヘども。佛ノ滅後に迦葉阿難馬鳴龍樹無著天親乃至天台傳敎のいまだ弘通しましまさぬ最大の深密の正法。經文の面に現前なり。此深法今末法の始ノ五五百歲に一閻浮提に廣宣流布すべきやの事不審無キ極なり。問ヲいかなる祕法ゾ先ヲ名をきき次に義をきかんとをもう。此事もし實事ならば釋尊の二度世に出現し給ヲか上行菩薩の重涌出せるか。いうぎいうぎ慈悲をたれられよ。彼の玄奘三藏は六生を經て月氏に入リて十九年法華一乘は方便敎小乘阿含經は眞實敎。不空三藏は身毒に返リて壽量品を阿彌陀佛とかかれたり。此等は東を西という日を月とあやまてり。身を苦シめてなにかせん心に染てようなし。幸ヒ我等末法に生レて一歩をあゆまずして三祇をこゑ頭を虎にかわ(飼)ずして無見頂相をえん。答テ云ク此の法門を申さん事は經文に候へばやすかるべし。但此法門には先ヲ三ヲの大事あり。大海は廣けれども死骸をとどめず大地は厚けれども不孝の者をば載せず。佛法には五逆をたすけ不孝をばすくう。但し誹謗一闡提の者持戒にして第一なるをばゆる(容)されず。此の三ヲのわざはひと者所謂念佛宗と禪宗と眞言宗となり。一には念佛宗は日本國に充滿して四衆の口あり(遊)びとす。二に禪宗は三衣一鉢の大慢の比丘の四海に充滿して一天の明導とをもへり。三に眞言宗は又彼等の二宗にはにるべくもなし。叡山東寺七寺園城或は官主或は御室或は長吏或は檢校なり。かの內侍所の神鏡燼灰となりしかども大日如來の寶印を佛鏡とたのみ。寶劍西海に入リしかども五大尊をもつて國敵を切ると思へり。此等の堅固ノ信心は設ヒ鉄石はひすらく(磷)ともかたぶくべしとはみへず。大地は反覆すとも疑心をこりがたし。彼の天台大師の南北をせめ給ヒし時も此宗いまだわたらず。此傳敎大師の六宗をしゑたげ給ヒし時ももれ(洩)ぬ。かたがたの强敵をまぬがれてかへて大法をかす(掠)め失う。其上傳敎大師の御弟子慈覺大師此宗をとりたてて叡山の天台宗をかすめをとして一向眞言宗になししかば。此の人には誰の人か敵をなすべき。かゝる僻見のたよりをゑて弘法大師の邪義をもとがむ(咎)る人もなし。安然和尙す

こし弘法を難せんとせしかども只華嚴宗のところ計りとがむるにて。かへて法華經をば大日經に對して沈めはてぬ。ただ世間のたて（立）入りの者のごとし。　啓一〇一六一一　鈔六一　註六一　語一二六　語記上一七　拾二一　扶四一　見聞一一

○撰時鈔

問テ云ク此三宗の謬悞如何。答テ云ク淨土宗は齊の世に曇鸞法師と申ス者あり本は三論宗の人。龍樹菩薩の十住毗婆沙論を見て難行道易行道を立テたり。道綽禪師という者あり唐の世の者本は涅槃經をかう（講）じけるが。曇鸞法師が淨土にうつる筆を見て。涅槃經をすてて淨土にうつ（移）て聖道淨土の二門を立テたり。又道綽が弟子に善導という者あり雜行正行を立つ。日本國に末法に入ッて二百餘年後鳥羽ノ院の御宇に法然という ものあり。一切の道俗をすゝめて云ク佛法は時機を本とす。法華經大日經天台眞言等の八宗九宗一代の大小顯密權實等の經宗等は上根上智の正像二千年の機のためなり。末法に入ッてはいかに功をなして行ずるとも其益あるべからず。其上彌陀念佛にまじへて行ずるならば念佛も往生すべからず。此れわたくしに申スにはあらず龍樹菩薩曇鸞法師は難行道となづけ。道綽は未有一人得者とさだ（定）めたり。此等は佗宗なれば御不審もあるべし。慧心先德にすぎさせ給へる天台眞言の智者は末代にをはすべきか。彼往生要集には顯密の教法は予が死生をはなるべき法にはあらず。又三論の永觀が十因等をみよ。されば法華眞言等をすてて一向に念佛せば十即十生百即百生とすゝめければ。叡山東寺園城七寺等始ノは評論するやうなれども。往生要集の序の詞道理かとみへければ顯眞座主落サせ給ヒて法然が弟子となる。其上設法然が弟子とならぬ人人も。彌陀念佛は佗佛にこるべくもなく口ずさみとし心よせにをもひければ。日本國皆一同に法然房の弟子と見へけり。此五十年が間一天四海一人もなく法然が弟子となる。法然が弟子となりぬれば日本國一人もなく誘法の者となりぬ。譬へば千人の子が一同に一人の親を殺害せば千人共に五逆の者なり。一人阿鼻に墮テなば餘人墮テざるべしや。結句は法然流罪をあだ（怨）みて惡靈となつて。我並に弟子等をとが（科）せし國主山寺の僧等が身に入ッて或は謀反ををこし或は惡事をなして皆關東にほろぼされぬ。わづかにのこれる叡山東

寺等の諸僧は。俗男俗女にあなづらるること猿猴の人にわらはれ俘囚が童子に蔑如せらるるがごとし。禪宗は又此便を得て持齋等となつて人の眼を迷かし。たつと（貴）げなる氣色なればいかにひ（僻）がほうもん（法門）をいゐくるへ（狂）ども失ともをぼへず。禪宗と申す宗は教外別傳と申して釋尊の一切經の外に迦葉尊者にひりか（密）にさゝや（囁）かせ給へり。されば禪宗をしらずして一切經を習うものは。犬の雷をか（嗤）むがごとし。猿の月の影をとるにたり云云。此故に日本國の中に不孝にして父母にすてられ。無禮なる故に主君にかんどうせられ。あるいは若なる法師等の學文にものう（懶）さ。遊女のものぐる（物狂）わしき本性に叶る邪法なるゆへに。皆一同に持齋になりて國の百姓をくらう蝗虫となれり。しかれば天は天眼をいからかし地神は身をふるう。眞言宗と申すは上の二ッのわざはひ（災）にはにるべくもなき大僻見なり。あらあら此を申すべし。所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に善無畏三藏金剛智三藏不空三藏。大日經金剛頂經蘇悉地經を月支よりわたす。此三經の說相分明なり。其の極理を尋れば會二破二の一乘其の相を論ずれば印と眞言と計りなり。尙華嚴般若の三一相對の一乘にも及ばず天台宗の爾前の別圓程もなし。但通藏二教を面とするを善無畏三藏をもはく此の經文をあら（現）わにいゐ出す程ならば。華嚴法相にもをこつ（嘲）かれ天台宗にもわら（笑）はれなん。大事として月支よりは持來りぬさてもだ（默止）せば本意にあらずとやをもひけん。天台宗の中に一行禪師という僻人一人あり。これをかたらひて漢土の法門をかたらせけり。一行阿闍梨うちぬか（欺）れて三論法相華嚴等をあらあらかたるのみならず。天台宗の立てられけるやうを申しければ。善無畏をもはく天台宗は天竺にして聞しにもなをうちすく（勝）れてかさむ（累層）べきやうもなかりければ。善無畏一行をうちぬひて云。和僧は漢土にはこざかしき者にてありけり。天台宗は神妙の宗なり。今眞言宗の天台宗にかさむ（重崇）ところは印と眞言と計りなりといゐければ。一行さもやとをもひければ善無畏三藏一行にか（語）たて云。天台大師の法華經に疏をつくらせ給へるごとく。大日經の疏を造眞言を弘通せんとをもう汝かきなんやといゐければ。一行が云やすう候。但しいかやうにかき候べきぞ。天台宗はにく（惡）き宗なり。諸宗は我も我もとわらろわ（爭）をなせども一切に叶はざる事一ッあり。所謂法華經の序分に無量義經と申す經をもつて。前四十餘年の經經をば其門を打ふさ（塞）ぎ候ぬ。法華經の法師品神

力品をもつて後の經經をば又ふせ(防)がせぬ。肩をならぶ經經をば今說の文をもつてせめ候。大日經をば三說の中にはいづくにかをき候べきと問ひければ。爾ゝ時に善無畏三藏大に巧んで云ゝ大日經に住心品という品あり。無量義經の四十餘年の經經を打ちはらう(掃)がごとし。大日經の入漫陀羅已下の諸品は漢土にては法華經大日經とて二本なれども天竺にては一經のごとし。釋迦佛は舍利弗彌勒に向ッて大日經を法華經となづけて。印と眞言とをすてて但理計りをとけるを。羅什三藏此をわた(渡)す天台大師此をみる。大日如來は法華經を大日經となづけて金剛薩埵に向ッてとかせ給ッ此を大日經となづく。我まのあた(親)り天竺にしてこれを見る。されば汝がかくべさやうは大日經と法華經とをば水と乳とのやうに一味となすべし。もししからば大日經は已今當の三說をば皆法華經のごとくうちをと(下)すべし。さて印と眞言とは心法の一念三千に莊嚴するならば三密相應の祕法なるべし。三密相應する程ならば天台宗は意密なり。眞言は甲なる將軍の甲鎧を帶して弓箭を横たへ太刀を腰にはけ(佩)るがごとし。天台宗は意密計りなれば甲なる將軍の赤裸なるがごとくならんといゐるければ。一行阿闍梨は此のやうにかきけり。漢土三百六十箇國には此事を知る人なかりけるかのあひだ始ゝには勝劣を諍論しけれども。善無畏等は人がら(品)は重し天台宗の人人は輕かりけり。又天台大師ほどの智ある者もなかりければ。但日日に眞言宗になりてさてやみにけり。二年ひさしくなればいよいよ眞言の誑惑の根ふかくかく(隱)れて候けり。日本國の傳敎大師漢土にわたりて天台宗をわたし給ッついで(次序)に眞言宗をならべわたす。天台宗を日本の皇帝にさづけ眞言宗を六宗の大德にならはせ給ッ。但し六宗と天台宗の勝劣は入唐已前に定ゝさせ給ッ。入唐已後には圓頓の戒場を立てう立じの論ゝ計りなかりけるかのあひだ。敵多くしては戒場の一事成りがたしとやをぼしめしけん。又末法にせめさせんとやをぼしけん。皇帝の御前にしても論ぜさせ給はず。弟子等にもはかばかしくかたらせ給はず。但し依憑集と申ス一卷の祕書あり七宗の人人の天台に落チたるやうをかかれつる文なり。かの文の序に眞言宗の誑惑一筆みへて候。弘法大師は同シき延曆年中に御入唐青龍寺の慧果に値ヒ給て眞言宗をならはせ給へり。御歸朝の後一代の勝劣を判じ給ヒけるに第一眞言第二華嚴第三法華とかかれて候。此大師は世間の人人はもつてのほかに重ずる人なり。但し佛法の事は申ス人にをうれあれど

ももつてのほかにあらさ(荒量)事どもみへり。此事をあらあらかんがへたるに。漢土にわたらせ給とては但眞言の事相の印眞言計り習とつたゑて。其義理をばくはしくもさはぐら(思案)せ給はざりけるほどに。日本にわたりて後大に世間を見れば天台宗もつてのほかにかさみ(嵩)たりければ。我が重ずる眞言宗ひろめがたかりけるかのゆへに。本日本國にして習たりし華嚴宗をとりいだして法華經にまされたるよしを申シけり。されも常の華嚴宗に申スやうに申スならば人信ずまじとやをぼしめしけん。すこしいろ(色)をかねて此は大日經龍猛菩薩の菩提心論善無畏等の實義なりと。大妄語をひきり(引添)へたりけれども。天台宗の人人いたうとがめ申す事なし。問テ云ク弘法大師の十住心論祕藏寶鑰二教論に云ク如レキ此乘乘自乘ニ得レ名ヲ望レ後ニ作ス戲論ト。又云ク無明ノ邊域ニシテ非ス明ノ分位ニ。又云ク第四熟蘇味ナリ。又云ク震旦ノ人師等諍テ盗ミ醍醐ヲ一テ各名ヒ自宗ニ等云云。此等の釋ノ心如何。答テ云ク予此の釋にをどろいて一切經並ニ大日の三部經等をひらきみるに。華嚴經と大日經とに對すれば法華經戲論。六波羅蜜經に對すれば盗人。守護經に對すれば無明の邊域と申ス經文は一字一句も候はず。此事はいとはかなき事なれども。此の三四百餘年に日本國のうこばくの智者どもの用とさせ給へば定てゆへあるかとをもひぬべし。しばらく(暫)いとやすきひ(健)が事をあげて餘事のはかなき事をしらすべし。法華經を醍醐味と稱することは陳隋の代なり。六波羅蜜經は唐の半(なかば)に般若三藏此をわたす。六波羅蜜經の醍醐は陳隋の世にはわた(渡)りてあらばこそ天台大師は眞言の醍醐をば盗(ぬすみ)ませ給はめ。傍例あり日本の得一が云ク天台大師は深密經の三時教をやぶる。三寸の舌をもつて五尺の身をたつ(斷)べしとのゝしりしを。傳教大師此をただして云ク深密經は唐の始メ玄奘三藏これをわたす。天台は陳隋の人智者御入滅の後數箇年あつて解深密經わたれり。死して已後にわたれる經をばいかでか破シ給べきとせめさせ給て候しかば。得一はつま(詰)るのみならず舌八ツにさけて死シ候ぬ。これは彼にはに(似)るべくもなき惡口なり。華嚴の法藏三論の嘉祥法相の玄奘天台等乃至南北の諸師。後漢より已下の三藏人師を皆をさゑ(押)て盗人とかかれて候なり。其上又法華經を醍醐と稱することは天台等の私の言にはあらず。佛涅槃經に法華經を醍醐ととかせ給と天親菩薩は法華經涅槃經を醍醐とかかれて候。龍樹菩薩は法華經を妙藥となづけさせ給フ。されば法華經等を醍醐と申ス人盗人ならば釋迦多寶十方ノ諸佛龍樹天親

等は盗人にてをはすべきか。弘法の門人等乃至日本の東寺の眞言師如何自眼の黒白はつた(拙)なくして辨へずとも佗の鏡をもつて自禍をしれ。此の外法華經を戯論の法とかかること大日經金剛頂經等にたしかなる經文をいだされよ。設彼彼の經經に法華經を戯論ととかれたりとも。譯者の悞る事もあるかしよくよく思慮のあるべかりけるか。孔子は九思一言周公旦は沐に三にぎり(握髮)食には三はかれ(吐哺)けり。外書のはかなき世間の淺き事を習ふ人すら智人はかう候ずかし。いかにかゝるあさましき事はありけるやらん。かゝる僻見の末へなれば彼の傳法院の本願とがうする正覺房が舍利講の式に云く。尊高者ハ也不二摩訶衍之佛。驢牛三身ハ不レ能レ扶レ車ヲ。祕奥者ハ也兩部漫陀羅之教と顯乘ノ四法ハ不レ堪レ採レ履ヲと云云。顯乘の四法と申すは法相三論華嚴法華の四人。驢牛の三身と申すは法華華嚴般若深密經の教主の四佛。此等の佛僧は眞言師に對すれば聖(正)覺弘法の牛飼履物取者にもたらぬ程の事なりとかいて候。彼の月氏の大慢婆羅門は生知の博學顯密二道胸にうかべ内外の典籍掌ににぎる。されば王臣頭をかたぶけ萬人師範と仰ぐ。あまりの慢心に世間に尊崇する者は大自在天婆藪天那羅延天大覺世尊此四聖なり我が座の四足にせんと。座の足につくりて坐して法門を申けり。當時の眞言師が釋迦佛等の一切の佛をかきあつめて灌頂する時。敷まんだら(曼荼羅)とするがごとし。禪宗の法師等が云く此宗は佛の頂をふむ大法なりというがごとし。而るを賢愛論師と申せし小僧あり彼をただすべきよし申せしかども。王臣萬民これをもちゐず。結句は大慢が弟子等檀那等に申つけて無量の妄語をかまへて惡口打擲せしかども。すこしも命もをしまずのゝしりしかば。帝王賢愛をにくみてつめ(詰)させんとし給ひしほどに。かへりて大慢がせめられたりしかば。大王天に仰き地に伏してなげひての給はく。朕はまのあたり此事をきひて邪見をはらしぬ。先王はいかに此者にたぼら(誑)されて阿鼻地獄にをはすらんと。賢愛論師の御足にとりつきて悲涙せさせ給ひしかば。賢愛の御計として大慢を驢にのせて五竺に面をさらし給ひければ。いよいよ惡心盛になりて現身に無間地獄に墮ぬ。今の世の眞言と禪宗等とは此にかわれりや。漢土の三階禪師ノ云く教主釋尊の法華經は第一第二階の正像の法門なり。末代のためには我がつくれる普經なり。法華經を今の世に行せん者は十方の大阿鼻獄に墮ッべし。末代の根機にあたらざるゆへなりと申して。六時ッ禮懺四時の坐禪生身佛のごとく

なりしかば。人多く尊て弟子萬餘人ありしかども。わづかの小女の法華經をよみしにせめられて當坐には音を失後には大蛇になりて。りこばくの檀那弟子並に小女處女等をのみ食しなり。今の善導法然等が千中無一の惡義もこれにて候なり。此等の三大事はすでに久くなり候へば。いやしむべきにはあらねども申さば信ずる人もやありなん。これよりも百千萬億倍信じがたき最大の惡事はんべり。慈覺大師は傳教大師の第三の御弟子なり。しかれども上一人より下萬民にいたるまで傳教大師には勝てをはします人なりとをもひり。此人眞言宗と法華宗の實義を極めさせ給て候が眞言は法華經には勝たりとかかせ給へり。而を叡山三千人の大衆日本一州の學者等一同の歸伏の義なり。弘法の門人等は大師の法華經を華嚴經に劣とかかせ給へるは。我がかた(方)ながらも少し強さやうなれども。慈覺大師の釋をもつてをもうに眞言宗の法華經に勝たることは一定なり。日本國にして眞言宗を法華經に勝と立をば叡山こそ強かたきなりぬべかりつるに。慈覺をもつて三千人の口をふさぎなば眞言宗はをもうごとし。されば東寺第一のかたうど(方人)慈覺大師にはすぐべからず。例せば淨土宗禪宗は餘國にてはひろ(弘)まるとも。日本國にしては延暦寺のゆるされ(許可)なからんには無邊劫はふとも叶つまじかりしを。安然和尚と申す叡山第一の古德教時諍論と申す文に九宗の勝劣を立てられたるに。第一眞言宗第二禪宗第三天台法華宗第四華嚴宗等云云。此の大謬釋につひて禪宗は日本國に充滿してすでに亡國とならんとはするなり。法然が念佛宗のはやりて一國を失とする因緣は慧心の往生要集の序よりはじまれり。師子の身の中の虫の師子を食つと佛の記し給はまことなるかなや。傳教大師は日本國にして十五年が間天台眞言等を自見せさせ給へども。生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給しかども。世間の不審をはらさんがために漢土に亙て天台眞言の二宗を傳へ給し時。漢土の人人はやうやうの義ありしかども。我心には法華は眞言にすぐれたりとをぼしめししゆへに。眞言宗の宗の名字をば削らせ給て天台宗の止觀眞言等かかせ給へ。十二年の年分得度ノ者二人をかかせ給へ。重て止觀院に法華經 金光明經 仁王經の三部を鎮護國家の三部と定て宣旨を申下す。永代日本國の第一の重寶神璽 寶劔 內侍所とあがめさせ給へき。叡山第一の座主義眞和尚第二の座主圓澄大師までは此義相違なし。第三の慈覺大師御入唐漢土にわたりて十年が間顯密二道の勝劣を八箇

の大德にならひつたう。又天台宗の人人廣脩維蠲等にならはせ給ふしかども。心の内にをぼしけるは眞言宗は天台宗には勝レたりけり。我師傳敎大師はいまだ此事をばくはしく習ハせ給ざりけり。漢土に久クもわたらせ給ハざりける故に。此の法門はあらうち(荒唐)にみ(見)をはしけるやとをぼして日本國に歸朝し。叡山東塔止觀院の西に摠持院と申ス大講堂を立テ。御本尊は金剛界の大日如來此御前にして大日經の善無畏の疏を本として。金剛頂經の疏七卷蘇悉地經の疏七卷已上十四卷をつくる。此疏ノ肝心の釋ニ云ク敎ニ有リ二種一ニハ顯示敎謂ク三乘敎世俗ト勝義ト未タ圓融セ故ニ。二ハ祕密敎謂ク一乘敎世俗ト勝義ト一體ニシテ融スル故ニ。祕密敎ノ中ニ亦有リ二種一ニハ理祕密ノ敎諸ノ華嚴般若維摩法華涅槃等。但タ說テ世俗ト勝義不二ヲ未タ說カレ眞言密印ノ事ヲ故ニ。二ハ事理俱密ノ敎謂ク大日經金剛頂經蘇悉地經等亦說キ眞言密印ノ事ヲ故ニ等云云。釋の心は法華經と眞言の三部との勝劣を定メさせ給フに。眞言の三部經と法華とは所詮の理は同シく一念三千の法門なり。しかれども密印と眞言等の事法は法華經ハかけ(欠)てをはせず。法華經は理祕密眞言の三部經は事理俱密なれば天地雲泥なりとかかれたり。しかも此の筆は私の釋にはあらず善無畏三藏の大日經の疏の心なりとをぼせども。なをなを二宗の勝劣不審にやありけんはた又佗人の疑ヒをさん(散)ぜんとやをぼしけん。大師慈覺の傳ニ云ク大師造リ三經ノ疏ヲ成シ功ヲ已畢テ心中獨リ謂此疏通ニ佛意ニ否乎若不レ通セ佛意ニ者不レ流ニ傳セ於世ニ矣。仍テ安置シ佛像ノ前ニ七日七夜翹ニ企シ深誠ヲ勤ニ修ス祈請ヲ。至テ五日ノ五更ニ夢ニ當テ于正午ニ仰キ見リ日輪ヲ而以テ弓ヲ射レ之ヲ其箭當ツテ日輪ニ日輪即轉動ス。夢覺テ之後深ク悟リ通ニ達ス於佛意ニ可シ傳フ於後世ニ等云云。慈覺大師は本朝にしては傳敎弘法の兩家を習ヒきわめ。異朝にしては八大德並に南天の寶月三藏等に十年が間最大事の祕法をきわめさせ給ふる上。二經の疏をつくり了リ重テ本尊に祈請をなすに。善慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうちをとろかせ給ヒ。歡喜のあまりに仁明天王に宣旨を申シうへ(副)させ給ヒ。天台の座主を眞言の宮主となし。眞言の鎭護國家の三部とて今に四百餘年が間碩學稻麻のごとし渴仰竹葦に同シ。されば桓武傳敎等の日本國建立ノ寺塔ハ一宇もなく眞言の寺となりぬ。公家も武家も一同に眞言師を召シて師匠とあをぎ官をなし寺をあづけ給フ。佛事の木畫の開眼供養は八宗一同に大日佛眼の印眞言なり。疑テ云ク法華經を眞言に勝ルと申ス人は此釋をばいかがせん用ユベきか又すつべきか。答フ佛けの未來

を定云ク依レテ法ニ不レ依レ人ニ。龍樹菩薩ノ云ク依レルハ修多羅ニ白論不レ依レ修多羅ニ黒論。天台ノ云ク復興ニ修多羅一合者錄而用レ之ヲ無レ文無レ義不レ可ニ信受一。傳教大師云ク依ニ憑佛說一莫レ信ニ口傳一等云云。此等の經論釋のごときんば夢を本トにはすべからず。ただついさして法華經と大日經との勝劣を分明に說キたらん經論の文こうたいせちに候はめ。但シ印眞言なくば木畫の像の開眼の事此又をこ（嗚呼）の事なり。眞言のなかりし已前には木畫の開眼はなかりしか。天竺漢土日本には眞言宗已前の木畫の像は或は行キ或は說法し或は御物言あり。印眞言をも（以）て佛を供養せしよりこのかた利生もかたがた失たるなり。此は常の論談の義なり。此一事にをひては但し日蓮は分明の證據を餘所に引クべからず。慈覺大師の御釋を仰イて信シて候なり。問テ云ク何にと信ぜらるるや。答テ云ク此夢の根源は眞言は法華經に勝ルと造リ定メての御ゆめなり。此夢吉夢ならば慈覺大師の合せさせ給ヲがごとく眞言勝るべし。但シ日輪を射ルとゆめにみたるは吉夢なりというべきか。內典五千七千餘卷外典三千餘卷の中に日を射ルとゆめに見て吉夢なる證據をうけ給るべし。少少此より出し申。阿闍世王は天より月落ルとゆめにみて耆婆大臣ニ合せさせ給ヒしかば大臣合テ云ク佛の御入滅なり。須拔多羅天より日落ルとゆめにみる我とあわせて云ク佛の御入滅なり。脩羅は帝釋と合戰の時まづ日月をいて（射）たてまつる。夏の桀殷の紂と申せし惡王は常に日をいて身をほろぼし國をやぶる。摩耶夫人は日をはらむ（孕）とゆめにみて悉達太子をうませ給フ。かるがゆへに佛のわらわな（幼名）をば日種という。日本國と申スは天照太神の日天にてましますゆへなり。されば此のゆめは天照太神 傳教大師 釋迦佛 法華經をいたてまつれる矢にてこそ二部の疏は候なれ。日蓮は愚癡の者なれば經論もしらず。但此の夢をもつて法華經に眞言すぐれたりと申スは合生には國をほろぼし家を失ひ。後生には阿鼻地獄に入ルべしとはしりて候。今現證あるべし日本國と蒙古との合戰に一切の眞言師の調伏を行ひ候へば。日本かちて候ならば眞言はいみじかりけりとれもひ候なん。但し承久の合戰にうこばくの眞言師のいのり候しが。調伏せられ給ヒし權の大夫殿はかたせ給ヒ。後鳥羽院は隱岐の國へ御子ノ天子は佐渡の嶋嶋へ調伏しやりまいらせ候ぬ。結句は野干のなき（鳴）の己が身にをうなるやうに還著於本人の經文にすこしもたがはず。叡山の三千人かまくら（鎌倉）にせめ（攻）られて一同にしたがい（從）はてぬ。しかるに又かまくら

日本を失（ハン）といのるかと申すなり。これをよくよくしる人は一閻浮提一人の智人なるべしよくよくしるべきか。今はかまくらの世さかん（盛）なるゆへに東寺天台園城七寺の眞言師等と竝に自立をわすれたる法華經の謗法の人人關東にをちくだりて。頭をかたぶけひざ（膝）をかゝ（屈）めやうやうに武士の心をとりて。諸寺諸山の別當となり長吏（ヒニ）となりて。王位を失し惡法をとりいだして國土安穩といのれば。將軍家竝所從の侍（さむらい）已下は國土の安穩なるべき事なんめりとうちをもひて有るほどに。法華經を失大禍（ナテ）の僧どもを用とらるれば國定ほろびなん。亡國のかなしさ亡身のかなしさに身命をすてて此事をあらわすべし。國主世を持べきならばあやし（怪）とをもひてたづ（尋）ぬべきところに。ただざんげん（讒言）のことばのみ用てやうやうのあだをなす。而ルに法華經守護の梵天帝釋日月四天地神等は古の謗法をば不思議とはをぼせども。此をしれる人なければ一子の惡事のごとくうちゆるして。いつわりをろかなる時もあり又すてしつみじら（摘知）する時もあり。今は謗法を用たるだに不思議なるに。まれ（稀）まれ諫曉する人をかへりてあだをなす。一日二日二月二月一年二年ならず數年に及ぶ。彼の不輕菩薩の杖木の難に値しにもすぐれ覺德比丘の殺害に及しにもこえたり。而ル間梵釋ノ二王日月四天衆星地神等やうやうにいかり。度度（たびたび）いさめらるれども。いよいよあだをなすゆへに。天の御計（ラヒ）として鄰國の聖人にをぼせつけられて此をいましめ。大鬼神を國に入レて人の心をたぼらかし自界反逆せしむ。吉凶につけて瑞（きざし）大なれば難多かるべきことわり（理）にて。佛滅後二千二百三十餘年が間いまだいでざる大長星いまだふら（震）ざる大地しん出來せり。漢土日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度度ありしかども。いまだ日蓮ほど法華經のかたうど（方人）して國土に强敵多くまうけ（儲）たる者なきなり。まづ眼前の事をもつて日蓮は閻浮提第一の者としるべし。佛法日本にわた（渡）て七百餘年一切經は五千七千宗は八宗十宗。智人は稻麻のごとし弘通は竹葦にことにたり。しかれども佛には阿彌陀佛諸佛の名號には彌陀の名號ほどひろまりてをはするは候はず。此名號を弘通する人は慧心は往生要集をつくる。日本國三分が一は一同の彌陀念佛者。永觀は十因と往生講の式をつくる扶桑三分が二分は一同の念佛者。法然せんちやく（選擇）をつくる本朝一同の念佛者。而かれば今の彌陀の名號を唱ふる人人は一人が弟子にはあらず。此念佛と申すは雙觀經觀經阿彌陀經の題名なり。權大乘

經の題目の廣宣流布するは實大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや。心あらん人は此をすひ(推)しぬべし。權經流布せば實經流布すべし。權經の題目流布せば實經の題目も又流布すべし。欽明より當帝にいたるまで七百餘年いまださかずいまだ見ず。南無妙法蓮華經と唱へよと他人をすゝめ我と唱へたる智人なし。日出ぬれば星かくる賢王來れば愚王ほろぶ。實經流布せば權經のとゞ(止)まり智人南無妙法蓮華經と唱へば愚人の此に隨はんこと影と身と聲と響とのごとくならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あきらかなり。これをもつてすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず。問テ云ク正嘉の大地しん文永の大彗星はいかなる事によつて出來せるや。答テ云ク天台云ク智人ハ知レリ起ラ蛇ハ自識ル蛇ヲ等云云。問テ云ク心いかん。答テ云ク上行菩薩の大地より出現し給ひたりしをば。彌勒菩薩文殊師利菩薩觀世音菩薩藥王菩薩等の四十一品の無明を斷せし人人も。元品の無明を斷せざれば愚人といはれて。壽量品ノ南無妙法蓮華經の末法に流布せんずるゆへに。此の菩薩ヲ召シ出されたるとはしらざりしという事なり。問テ云ク日本漢土月支の中に此事を知る人あるべしや。答テ云ク見思を斷盡し四十一品の無明を盡せる大菩薩だにも此事をしらせ給はず。いかにいわう(何況)や一毫の惑をも斷せぬ者どもの此事を知るべきか。問テ云ク智人なくばいかでか此を對治すべき。例せば病の所起を知らぬ人の。病人を治すれば人必ず死す。此災の根源を知ラぬ人人がいのり(祈)をなさば國まさに亡びん事疑ヒなきか。あらあさましやあらあさましや。答テ云ク蛇は七日が内の大雨をしり鳥は年中の吉凶をしる。此レ則大龍の所從又久學のゆへか。日蓮は凡夫なり。此事をしるべからずといへども汝等にほぼこれをさとさん。彼の周の平王の時禿にして裸なる者出現せしを。辛有といわし者うらなつて云ク百年が内に世ほろびん。同ジき幽王の時山川くづれ大地ふるひ(震)き。白陽と云ッ者勘ていはく十二年の内に大王事に値せ給ッべし。今の大地震大長星等は國主日蓮をにくみて。亡國の法たる禪宗と念佛者と眞言師をかたふどせらるれば。天いからせ給ひていださせ給ッところの災難なり。問テ云ク何にをもつてか此を信ぜん。答テ云ク最勝王經ニ云ク由下愛ニ敬シ惡人ヲ治中罰シ善人ヲ故ニ星宿及風雨皆不ニ以テ時ヲ行ハレ等云云。此經文のごときんば此國に惡人のあるを王臣此を歸依すという事疑ヒなし。又此國に智人あり國主此をにく(惡)みてあだ(怨)すという事も又疑ヒなし。又云ッ

三十三天ノ衆咸生ニ忿怒ノ心ヲ一變怪流星墮テ二ノ日俱時ニ出テ佗方ノ怨賊來テ國人遭ニ喪亂ニ等云云。すでに此國に天變あり地天あり佗國より此をせ(攻)む。三十三天の御いかり有ること又疑なきか。仁王經ニ云ク諸ノ惡比丘多ク求ニ名利ヲ一於ニ國王太子王子ノ前ニ自說ニ破佛法ノ因緣ヲ一其王不レ別信ノ聽ニ此語ヲ一等云云。又云ク日月失レ度ヲ時節反逆シ或ハ赤日出テ或ハ黑日出テ二三四五ノ日出テ或ハ日蝕無レ光リ或ハ日輪一重二重四五重輪現ス等云云。文の心は惡比丘等國に充滿して國王太子王子等をたぼらかして破佛法破國の因緣をとかば。其の國の王等此人にたぼらかされてをぼすやう。此法こそ持佛法の因緣持國の因緣とをもひ。此言ををさめ(納)てをこなう(行)ならば日月に變あり大風と大雨と大火等出來し。次には內賊と申して親類より大兵亂をこり。我がかたうど(方人)しぬべき者をば皆打ヲ失て後には佗國にせめられて。或は自殺し或はいけどりにせられ或は降人となるべし。是偏に佛法をほろぼし國をほろぼす故なり。守護經ニ云ク彼釋迦牟尼如來所有ノ教法ハ一切ノ天魔外道惡人五通ノ神仙皆不レ破ニ壞セ乃至少分ヲ一。而此名相ノ諸ノ惡沙門皆悉ク毀滅令レ無ラ有レ餘リ。如須彌山ヲ假使盡ニ於三千界ノ中ノ艸木ヲ一爲レ薪ト長時ニ焚燒ス一毫モ無レ損。若劫火起テ火從リ內生須臾ニ燒滅ス無餘ニ灰燼ヲ一等云云。蓮華面經ニ云ク佛告ニ阿難ニ譬如下師子ノ命終シ若空若地若水若陸所有ノ衆生不ニ敢テ食ハ師子ノ身ノ宍ヲ一唯師子自生ノ諸ノ蟲ヲ自食ス中師子之宍上。阿難我之佛法ハ非ニ餘ノ能壞ル一是我法ノ中ノ諸ノ惡比丘破ニ我三大阿僧祇劫積行勤苦シ所レ集佛法ヲ一等云云。經文の心は過去の迦葉佛釋迦如來の末法の事を訖哩枳王にかたらせ給ひ。釋迦如來の佛法をばいかなるものがうしなうべき。大族王の五天の堂舍を燒き拂ひ十六大國の僧尼を殺せし。漢土の武宗皇帝の九國の寺塔四千六百餘所を消滅せしめ。僧尼二十六萬五百人を還俗せし等のごとくなる惡人等は。釋迦の佛法をば失ふべからず。三衣を身にまとひ一鉢を頸にかけ八萬法藏を胸にうかべ。十二部經を口にずう(誦)せん僧侶が彼の佛法を失ふうべし。譬へば須彌山は金の山なり。三千大千世界の草木をもつて四天六欲に充滿してつみこめ(積籠)て。一年二年百千萬億年が間やく(燒)とも一分も損ずべからず。而ルを劫火をこらん時須彌の根より豆計リの火いでて。須彌山をやくのみならず三千大千世界をやき失ふうべし。若し佛記のごとくならば十宗八宗內典の僧等が佛教の須彌山をば燒き拂うべきにや。小乘ノ俱舍成實律僧等が大乘をうね(嫉)む胸の瞋恚は炎なり。眞言の善無畏禪宗の三階等淨土

宗の善導等は佛敎の師子の肉より出來せる蝗虫の比丘なり。傳敎大師は三論法相華嚴等の日本の碩德等を六虫とかかせ給へり。日蓮は眞言禪宗淨土等の元祖を三虫となづく。又天台宗の慈覺安然慧心等は法華經傳敎大師の師子の身の中の三虫なり。此等の大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば。天神もをしみ地祇もいからせ給て災天も大に起るなり。されば心うべし一閻浮提第一の大事を申ゆへに最第一の瑞相此をこれり。あわれなるかなやなげかしきかなや日本國の人皆無間大城に墮ちむ事よ。悅ハしきかなや樂ミかなや不肖の身として今度心田に佛種をうゑ(植)たる。いまにしもみ(見)よ大蒙古國數萬艘の兵船をうかべて日本國をせめば。上は一人より下も萬民にいたるまで一切の佛寺一切の神寺をばなげすてて。各各聲をつるべ(連合)て南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱(掌を合)てたすけ給へ。日蓮の御房日蓮の御房とさけび候はんずるにや。例せば月支のいう大族王は幻日王に掌をあはせ日本の盛時はかぢわら(梶原)をうやまう。大慢のものは敵に隨ッというこのことわり(此理)なり。彼の輕毀大慢の比丘等は始めには杖木をとゝの(調)へて不輕菩薩を打ちしかども後には掌をあはせて失をく(悔)ゆ。提婆達多は釋尊の御身に血をいだしかども臨終の時には南無と唱へたりき。佛とだに申したりしかば地獄には墮ざるべからざりしを。業ふか(深)くして但南無とのみとなへて佛とはいはず。今日本國の高僧等も南無日蓮聖人ととなへんとすとも。南無計りにてやあらんずらんふびんふびん。外典に云く未萠をしるを聖人という內典に云く三世を知を聖人という。余に三度のかうみやう(高名)あり。一ッには去し文應元年太歲庚申七月十六日に立正安國論を最明寺殿に奏したてまつりし時。宿谷の入道に向て云く禪宗と念佛宗とを失ひ給へしと申させ給へ。此事を御用ひなきならば此一門より事をこりて佗國にせめられさせ給ッべし。二去し文永八年九月十二日申ノ時に平ノ左衛門ノ尉に向て云く。日蓮は日本國の棟梁也予を失ッは日本國の柱橦を倒ス なり。只今に自界反逆難とてをしうちして。佗國侵逼難とて此の國の人人他國に打殺るのみならず多くいけどりにせらるべし。建長寺壽福寺 極樂寺 大佛 長樂寺等の一切の念佛者禪僧等が寺塔をばやき(燒)はらいて。彼等が頸をゆひ(由比)のはま(濱)にて切らずは日本國必ほろぶべしと申候了。第三去年文永十一年四月八日左衛門ノ尉に語て云く。王地に生たれば身をば隨へられたてまつるやうなりとも心をば隨へられたてまつるべからず。念佛の無

間獄禪の天魔の所爲なる事は疑となし。殊に眞言宗が此國土の大なるわざはひにては候なり。大蒙古を調伏せん事眞言師には仰せ付らるべからず。若大事を眞言師調伏するならばいよいよいそ(急)いで此國ほろぶべしと申せしかば。頼綱問テ云ク いつごろ(何頃)よ(寄)せ候べき。予言ク 經文にはいつ(何時)とはみへ候はねども。天の御氣色いかりすくなからずさう(急)に見へて候。よも今年はすごし候はじと語りたりき。此の三ツの大事は日蓮が申シたるにはあらず。只偏に釋迦如來の御神我身に入りかわせ給ヒけるにや我カ身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申ス大事の法門はこれなり。經に云ク所謂諸法如是相と申スは何事ぞ。十如是の始メの相如是が第一の大事にて候へば。佛は世にいでさせ給フ。智人ハ起リをしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり。一滴あつまりて大海となる微塵つもりて須彌山となれり。日蓮が法華經を信シ始メしは日本國には一滴一微塵のごとし。法華經を二人三人十人百千萬億人唱ヘ傳うるほどならば。妙覺の須彌山ともなり大涅槃の大海ともなるべし。佛になる道は此よりほかに又もとむる事なかれ。問テ云ク第二の文永八年九月十二日の御勘氣ノ時は。いかにとして我をうん(損)せば自他のいくさ(軍)をこるべしとはしり給フや。答フ大集經十五云ク若復有下諸ノ刹利國王作二諸ノ非法一惱二亂シ世尊ノ聲聞ノ弟子一。若以テ毀罵シ刀杖打斫シ及奪ヒ衣鉢種種ノ資具ヲ若佗ノ給施ニ作ス留難一者上。我等令ム彼自然ニ卒ニ起ニ佗方ノ怨敵一及自界ノ國土亦令ム兵起飢疫飢饉非時ノ風雨鬪諍言訟譏謗セ。又令ム其王不レ久復當ニ亡ニ失ス己國一等云云。夫諸經に諸文多シといへども此經文は。身にあたり時にのぞんで殊に尊くをぼうるゆへにこれをせん(撰)しいだす。此の經文に我等と者梵王と帝釋と第六天の魔王と日月と四天等の三界の一切の天龍等なり。此等の上主佛前に詣して誓ッて云ク佛ノ滅後正法像法末代の中に。正法を行ぜん者を邪法の比丘等が國主にうつたへ(言上)ば。王に近きもの王に心よせ(寄)なる者我がたつと(尊)しとをもう者のいうことなれば理不盡に是非を糾さず。彼の智人をさんざんにはぢ(恥)にをよばせなんどせば。其故どもなく其國ににわか(卒)に大兵亂出現し後には佗國にせめらるべし。其國主もうせ其國もほろびなんずととかれて候。いたひ(痛)とかゆき(痒)とはこれなり。日蓮が身には今生にはさせる失なし。但國をたすけ(扶)んがため生國の恩をほう(報)ぜんと申せしを御用となからんこと本意にあらざるに。あまさ(剰)へ召し出シて法華經の第五の卷を懷中せる

をとりいだしてさんざんとさいな(呵責)み。結句はこうぢ(小路)をわた(渡)しなんどせしかば。申したりしなり。日月天に處し給ながら日蓮が大難にあうを今度かわ(代)らせ給はずは。一ッには日蓮が法華經の行者ならざるか忽に邪見をあら(改)たむべし。若日蓮法華經の行者ならば忽に國にしるし(驗)を見せ給へ。若しからずは今の日月等は釋迦多寶十方の佛をたぶらかし奉る大妄語の人なり。提婆が虛誑罪俱伽利が大妄語にも百千萬億倍すぎさせ給へる大妄語の天なりと聲をあげて申せしかば。忽に出來せる自界反逆難なり。されば國土いたくみだ(亂)れば我身はいうにかひなき凡夫なれども。御經を持ちまいらせ候分齊は當世には日本第一の大人なりと申ス。問テ云ク慢煩惱は七慢九慢八慢あり。汝が大慢は佛敎に明ところの大慢にも百千萬億倍すぐれたり。彼の德光論師は彌勒菩薩を禮せず大慢婆羅門は四聖を座とせり。大天は凡夫にして阿羅漢となのる無垢論師が五天第一といゐし。此等は皆阿鼻に墮ぬ無間の罪人なり。汝いかでか一閻浮提第一の智人となのれる大地獄に墮ざるべしや。をろをろしをろし。答テ云ク汝は七慢九慢八慢等をばしれりや。大覺世尊は三界第一となのらせ給フ。一切の外道が云ク只今天に罰せらるべし大地われて入リなんと。日本國の七寺三百餘人が云ク最澄法師は大天が蘇生か鐵腹が再誕か等云云。而リといゐども天も罰せずかへて左右を守護し地もわれず金剛のごとし。傳敎大師は叡山を立テて一切衆生の眼目となる。結句七大寺は落チて弟子となり諸國は檀那となる。されば現に勝レたるを勝レたりという事は慢にて大功德なりけるか。傳敎大師云ク天台法華宗ノ勝レタルハ諸宗ニ者據ルカ所宗ノ經ニ故ニ不ス自讚毀他ナラ等云云。法華經第七ニ云ク衆山之中ニ須彌山爲第一此法華經モ亦復如シ是ノ於テ諸經ノ中ニ最モ爲其上等云云。此經文は已說ノ華嚴般若大日經等。今說の無量義經。當說の涅槃經等の五千七千。月支 龍宮 四王天 忉利天 日月ノ中の一切經盡十方界の諸經は土山 黑山 小鐵圍山 大鐵圍山のごとし。日本國にわたらせ給フる法華經は須彌山のごとし。又云ク有リ能受持スル是ノ經典ヲ者モ亦復如シ是ノ於テ一切衆生ノ中ニ亦爲第一ナリ等云云。此の經文をもつて案ずるに華嚴經を持る普賢菩薩 解脫月菩薩等。龍樹菩薩 馬鳴菩薩 法藏大師 清涼國師 則天皇后 審祥大師 玄奘三藏 太宗 高宗 觀勒 道昭 孝德天皇。眞言宗ノ大日經を持る金剛薩埵 龍猛菩薩 龍智菩薩 印生王 善無畏三藏

金剛智三藏 不空三藏 玄宗 代宗 慧果 弘法大師 慈覺大師。涅槃經を持る迦葉童子菩薩 五十二類 曇無讖三藏。光宅寺の法雲南三北七の十師等よりも。末代惡世の凡夫の一戒も持たず一闡提のごとくに人には思たれども。經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は佛になる道なしと強盛に信じて。而も一分の解なからん人人は。彼等の大聖には百千萬億倍のまさりなりと申す經文なり。彼の人人は或は彼の經經に且く人を入て法華經へうつ(移)さんがためなる人もあり。或は彼の經に著をなして法華經へ入ぬ人もあり。或は彼の經經に留逗のみならず彼經經を深く執するゆへに。法華經を彼の經に劣るという人もあり。されば今法華經の行者は心うべし。譬如一切の川流江河の諸水之中に海爲第一に持法華經者亦復如是。又如衆星之中に月天子最爲第一に持法華經者亦復如是。是の等と御心にあるべし。當世日本國の智人等は衆星のごとし日蓮は滿月のごとし。問て云古へかくのごとくいへる人ありや。答て云傳敎大師の云當に知佗宗所依の經は未だ最爲第一に其能持經者亦未だ第一に。天台法華宗は所持の經最爲第一故に能持法華者亦衆生の中の第一已に據佛說豈に自歎哉等云云。夫驥驎の尾につけるだに(蚋)の一日に千里を飛るといへ。輪王に隨る劣夫の須臾に四天下をめぐるというをば難ずべしや疑べしや。豈自歎哉の釋は肝にめい(銘)ずるか。若爾者法華經を經のごとくに持つ人は梵王にもすぐれ帝釋にもこえたり。脩羅を隨へば須彌山をもになひぬべし龍神をせめつかは(使役)ば大海をもくみほしぬべし。傳敎大師云讚者は積福を於安明に謗者は開罪を於無間に等云云。法華經に云見有讀誦書持經者輕賤憎嫉而懷結恨乃至其人命終入阿鼻獄に等云云。敎主釋尊の金言まことならば多寶佛の證明たが(違)ずば十方の諸佛の舌相一定ならば。今日本國の一切衆生無間地獄に墮事疑べしや。法華經の八の卷に云若於後の世に受持讀誦是の經典者は乃至所願不虛亦於現世に得其福報。又云若有供養讚歎之者は當於今世に得現の果報等云云。此の二の文の中に亦於現世得其福報の八字當於今世得現果報の八字。已上十六字の文むなし(虛)くして日蓮今生に大果報なくば。如來の金言は提婆が虛言に同く多寶の證明は俱伽利が妄語に異ならじ。謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮べからず。三世の諸佛もましまさざるか。されば我弟子等心みに法華經のごとく身命もれしまず修行して此度佛法の定否を心みよ。南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經。

抑此法華經の文に我不レ愛二身命一但惜二無上道一。涅槃經に云ク譬如下王使ノ善能談論ノ巧ニ於方便一奉二命一佗國一寧ロ喪二身命一終ニ不上レ匿ニ王ノ所說ノ言教一。智者モ亦爾於ニ凡夫ノ中一不レ惜二身命一要必宣二說大乘方等如來ノ祕藏一切衆生皆有二佛性一等云云。いかやうなる事のあるゆへに身命をすつるまでにてあるやらん。委細にうけ給候はん。答テ云ク予が初心の時の存念は傳教 弘法 慈覺 智證等の敕宣を給フて漢土にわたりし事の我不愛身命にあたれる歟。玄奘三藏の漢土より月氏に入しに六生が間身命をほろぼしし此等歟。雪山童子の半偈のために身をなげ。藥王菩薩の七萬二千歲が間臂をやきし事歟なんどをもひしほどに。經文のごときんば此等にはあらず。經文に我不愛身命と申スは上に三類の敵人をあげて彼等がのりせめ刀杖に及ンで身命をうばうともみへたり。又涅槃經の文に寧喪身命等ととかれて候は。次キ下の經文に云ク有リ二一闡提一作二羅漢ノ像ヲ住ニ於空處一誹ニ謗ス方等經典ヲ諸ノ凡夫人見已ヲ皆謂二眞ノ阿羅漢一是レ大菩薩一等云云。彼法華經の文に第三の敵人を說テ云ク或ハ有下阿蘭若ニ納衣在ニ空閑一乃至爲ニ世ニ所ヲ恭敬一如中六通ノ羅漢ノ上等云云。般泥洹經に云ク有下似ニ羅漢一ニ一闡提一而行ス二惡業一等云云。此等の經文は正法の强敵と申スは惡王惡臣よりも外道魔王よりも破戒の僧侶よりも。持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし。されば妙樂大師かいて云ク第三最モ甚シ以ノ後後ノ者ハ轉難レ識リ故ナリ等云云。法華經の第五の卷に云ク此法華經ハ諸佛如來ノ祕密之藏ナリ於ニ諸經ノ中一最在リ其上一等云云。此經文に最在其上の四字あり。されば此經文のごときんば法華經を一切經の頂にありと申スが法華經の行者にてはあるべきか。而ルを又國に尊重せらるる人人あまたありて。法華經にまさりてをはする經經ましますと申ス人にせめあひ(責合)候はん時。かの人は王臣に御歸依あり。法華經の行者は貧道なるゆへに國こぞつてこれをいやしみ候はん時。不輕菩薩のごとく賢愛論師がごとく申つをら(强)ば身命に及ンべし。此が第一の大事なるべしとみへて候。此事は今の日蓮が身にあたれり。予が分齊として弘法大師 慈覺大師 善無畏三藏 金剛智三藏 不空三藏なんどを法華經の强敵なり。經文まことならば無間地獄は疑なしなんど申スは。裸形にして大火に入ルはやすし。須彌を手にとてなげんはやすし。大石を負て大海をわたらんはやすし。日本國にして此法門を立は大事なるべし云云。靈山淨土ノ教主釋尊 寶淨世界の多寶佛 十方分身ノ諸佛地涌千界の菩薩等で 梵釋日月四天等冥に加し顯に助ケ給はずば。

一時一日も安穏なるべしや。

啓一一七　見聞二　註七七　語一三七　語記上一九　拾二一三　扶四五〇

明治三十五年九月十九日玉澤妙法華寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此抄一部五軸ニシテ九十九丁アリ上下ノ分册ナシ就中遺文大本十六丁右六行ノ「答云」ヨリ十七丁右四行ノ「擲之」（一一八九の一四行より一一九〇の一三行まで）マテ即御正本ニテハ第二紙ノ中ト第三ノ全紙ヲ失セリ又下卷四十五丁右七行ノ「言等」ヨリ左終行（一二一八の一三行ヵ一二一九の七行まで）ノ「要」ノ字マテ闕失セリ又下卷ノ四十八丁右五行（一二二二の一〇行）ノ「云」ト「天」トノ間ニ白紙アリ又十六丁右六行（一一九〇の七行より）ノ「者」ヨリ十七丁右四行ノ「擲之」マテ御眞蹟ノ斷編京都立本寺ニ在リ猶ホ失タル所ハ平賀本大野本休息本等ニ依テ校正ヲ加フ實ニ恐懼ノ至ナリ具ニハ別記ニ在リ

讀者往見セラレヨ（稲田海素慶記）

高祖遺文錄卷之十九

○千日尼御前御書　啓二八九八　鈔一八二三　語三三八　音下二七　拾五一　扶一〇七四

阿佛御房の尼ごぜん（御前）より世に（錢）三百文。同心なれば此文を二人して人によませてきこしめせ。

單衣一領佐渡ノ國より甲斐ノ國波木井ノ郷の内の深山まで送り給候と畢。法華經第四法師品ニ云ク有レテ人求ニ佛道一而於ニ一切ノ中一合掌在ニ我前一以ニ無數ノ偈一讚。由ニ是ノ讚佛一故ニ得ニ無量ノ功德一歎ニ美ニ持經者一其福復過ニ彼等一云云。文の心は釋尊ほどの佛を三業相應して一中劫が間ねんごろに供養し奉るよりも。末代惡世の世に法華經の行者を供養せん功德はすぐれたりとときかれて候。まことに（實）しからぬ事にては候へども。佛の金言にて候へば疑フべきにあらず。其上妙樂大師ど申ス人此の經文を重テてやわら（解）げて云ク若毀謗者ハ頭破ニ七分一若供養者ハ福過ニ十號一等云云。釋の心は末代の法華經の行者を供養するは十號を具足しまします如來を供養したてまつるにも其功德すぎたり。又濁世に法華經の行者あらんを留難をなさん人は頭七分にわるべしと云云。夫日蓮は日

本第一のゑせ(僻)ものなり。其故は天神七代はさてをきぬ地神五代も又はかりがたし。人王始て神武より今に至るまで九十代。欽明天王より七百餘年が間。世間につけ佛法によりても日蓮ほどあまねく人にあだ(怨)まれたるものは候はじ。守屋が寺塔をやき清盛入道が東大寺興福寺を失ヘし彼等が一類は彼がにくまず。將門貞たう(任)が朝敵と成りし。傳敎大師の七寺にあだまれし。彼等もいまだ日本一州の比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆にはにくまれず。日蓮は父母兄弟師匠同法(朋)上ミ一人下モ萬民一人ももれず。父母のかたきのごとく謀反強盜にもすぐれて人ごとにあだをなすなり。されば或時は數百人にのられ或時は數千人に取こめられて刀杖の大難にあう。所をはれ國を出さる結句は國主より御勘氣二度。一度は伊豆ノ國今度は佐渡の嶋なり。されば身命をつぐ(續)べきかつて(資糧)もなし形體を隱べき藤の衣ももたず。北海の嶋にはなたれしかば彼國の道俗は相州の男女よりもあだをなしき。野中に捨テられて雪にはだへ(肌)をまじをくさ(草)をつみ(摘)て命をさゝゐたりき。彼の蘇夫が胡國に十九年雪を食て世をわたりし。李呂(陵)が北海ニ六ヶ年がんくつ(嵒窟)にせめられし。我は身にてしられぬ。これはひとゑに我が身には失なし日本國をたすけんとをもひしゆへなり。しかるに尼ごせん並に入道殿は彼の國に有ル時は人め(目)ををりれて夜中に食ををくり。或ル時は國のせめ(責)をもはばからず身にもかわらんとせし人人なり。さればつら(痛)かりし國なれどもをりり(剃)たるかみ(髮)をうしろ(後)へひかれすゝむ(進)あし(足)もかへりぞかし。いかなる過去のゑん(緣)にてやありけんとれば、つかなかりしに。又いつしかこれまでさしも大事なるわが(我)夫を御つかい(使)にてつかはされて候。ゆめ(夢)かまぼろし(幻)か尼ごせんの御すがたをばみまいらせ候はねども心をばこれにとどめをばへ候へ。日蓮をこゑ(恐)しくをはしせば常に出ッる日ゆうべにいづる月をを(拜)ませ給へ。いつ(何時)となく日月にかげ(影)をうかぶ(浮)る身なり。又後生には靈山淨土にまいりあひまひらせん。南無妙法蓮華經。

六月十六日　　日蓮花押

さゞの國のこう(國府)の尼御前

明治三十五年八月一日佐渡國妙宣寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル惜哉御正本七枚ノ内第三紙ヲ失セリ即初丁左七行ノ「其」ヨリ次丁右四行「寺を」マデ（一二五一の一四行ヵ次頁の四行まで）ナリ（稻田海素慶記）

○三三藏祈雨事　啓二八二九　註一八四一　鈔一七六一　語三三〇　音下二四　拾四四一　扶一〇五六

夫レ木をうゑ候には大風吹キ候へども つよ(強)きすけ(扶介)をかひぬればたうれず。本より生テ候木なれども根の弱きはたうれぬ。甲斐無き者なれども たすく(扶持)る者強ければたうれず。すこし健ノ者も獨なれば惡シきみちにはたうれぬ。又三千大千世界のなかには舍利弗　迦葉尊者をのぞいては。佛よ(世)にいで給はずば一人もなく三惡道に墮ッべかりしが。佛をたのみまいらせし强緣にまりて一切衆生はをほく佛になりしなり。まして阿闍世王あうくつまら(驚堀摩羅)なんど申せし惡人どもは。いかにもかなうまじくて必阿鼻地獄に墮ッべかりしかども。教主釋尊と申ス大人にゆきあは(値)せ給ヒてこそ佛にはならせ給ヒしか。されば佛になるみちは善知識にはすぎず。わが智慧なににかせん。ただあつきつめたき(温寒)ばかりの智慧だにも候ならば善知識たいせち(大切)なり。而ルに善知識に値フ事が第一のかたき事なり。されば佛は善知識に値フ事をば一眼のかめ(龜)の浮木に入ッ。梵天よりいと(糸)を下テ大地のはり(針)のめ(目)に入ルにたとへ給へり。而ニ末代惡世には惡知識は大地微塵よりもをほく善知識は爪上の土よりもすくなし。補陀落山の觀世音菩薩は善財童子の善知識。別圓二教ををしへていまだ純圓ならず。常啼菩薩は身をうり(賣)て善智識をもとめしに曇無竭菩薩にあへり。通別圓の三教をならひて法華經ををしへず。舍利弗は金師之善知識九十日と申せしかば闍提ノ人となしたりき。ふるな(富樓那)は一夏の說法に大乘の機を小乘ノ人となす。大聖すら法華經をゆる(許)されず證果ノらかん(羅漢)機をしらず。末代惡世の學者等をば此をもつてすひ(推)すべし。天を地といゐ東を西といゐ火を氷とをしへ星は月にすぐれたり。ありづか(蟻塚)は須彌山にこへたり。なんど申ス人人を信シて候はん人人はならはぎらん(不習)惡人にはるかをとりてあし(惡)かりぬべし。日蓮佛法をこゝろみるに道理と證文とにはすぎず。又道理證文よりも現證にはすぎず。而ルに去ル文永五年の比東には俘囚をこり西には蒙古よりせめつかひ(責使)つきぬ。日蓮案云ク佛法ヲ不ン信ヲなり。定テ調伏をこなはれずらん。調伏は又眞言宗にてゞあらんずらん。月支漢土日本三箇國の間に且月支ハをく。漢土日本の二國は眞言宗にやぶらるべし。善無畏三藏漢土に亙ッてありし時は唐の玄宗の時なり。大旱魃ありしに祈雨の法ををほせつけられて候しに。大雨ふらせて土ミ一人より下モ萬民にいたるまで大に悅ヒし程に。須臾ありて大風吹キ

來國土をふさやぶりしかばけを(興)さめてありしなり。又其世に金剛智三藏わたる。又雨の御いのり(祈)ありしかば七日之内に大雨下上のごとく悅ッであり し程に。前代未聞の大風吹しかば。眞言宗はをろしき惡法なりとて。月支へをはれしがとかうしてとゞまりぬ。又同御世に不空三藏雨をいのりし程に三日が内に大雨下悅さきのごとし。又大風吹てさき二度よりもをびただ(夥)し數十日とゞまらず。不可思議の事にてありしなり。此は日本國の智者愚者一人もしらぬ事なり。しらんとをもはば日蓮が生てある時くはしくたづねならへ。日本國には天長元年二月大旱魃あり。弘法大師も神泉苑にして祈雨あるべきにてありし程に守敏と申せし人すゝんで云弘法は下龍なり我は上龍なりまづをほせをかほるべしと申。こう(請)に隨て守敏をてなら。七日と申には大雨下しかゞも京中計にて田舍にふらず。弘法にをほせつけられてありしかば七日にふらず(不雨)二七日にふらず三七日にふらざりしかば。天子我といのりて雨をふらせ給ときゝ。而を東寺の門人等我が師の雨とがうす。くはしくは日記をひいて習ッべし。天下第一のわうわく(誑惑)のあるなり。これより外に弘仁九年の春のわざわい(疫癘)又三古(鈷)をなげ(投)た

る事に不可思議の誑惑あり口傳すべし。天台大師は陳の世に大旱魃あり法華經をよみて須臾に雨下。王臣からべ(頭)をかたぶけ萬民たなごころ(掌)をあはせたり。大雨にもあらず風もふかず甘雨にてありしかば。陳王大師の御前にをはしまして内裏へかへら(還御)んことをわすれ給ときゝ。此時三度の禮拜はありしなり。去弘仁九年の春大旱魃ありき嵯峨の天王眞綱と申臣下をもつて冬嗣のとり申されしかば。法華經 金光明經 仁王經をもつて傳教大師祈雨ありき。三日と申せし日ほうきくも(細雲)ほうきあめ(微雨)しづしづと下しかば天子あまりによろこばせ給て。日本第一のかたこと(雖事)たりし大乘ノ戒壇はゆるされしなり。傳教大師の御師護命と申せし聖人は南都第一の僧なり。四十人の御弟子あひぐ(相具)して仁王經をもつて祈雨ありしが五日と申せしに雨下ぬ。五日はいみじき事なれども。三日にはをとりて而雨あら(暴)かりしかばまけ(負)にならせ給ぬ。此をもつて弘法の雨をばすひ(推)せさせ給ッべし。かく法華經はめでたく眞言はをろか(愚)に候に日本のほろ(亡)ぶべきにや一向眞言にてあるなり。隱岐の法王の事をもつてをもうに。眞言をもつて蒙古とゐぐ(俘囚)とをでうぶく(調伏)せば。日本國やまけんずらんとすひせ候ゆへ

に。此事いのち(命)をすてていねてみんとをもひしなり。いねし時はでしら(弟子)せい(制)せしかども。いまはあひ(合)ぬれば心よかるべきにや。漢土日本の智者五百餘年の間一人もしらぬ事をかんがへて候なり。善無畏金剛智不空等の祈雨に雨は下りて而も大風のうめり(孫)ひ候はいかにか心へさせ給ふべき。外道の法なれどもいうにかひなき道士の法にも雨下ル事あり。まして佛法は小乘なりとも法のごとく行ふならばいかでか雨下らざるべき。いわうや大日經は華嚴般若にこうをよばねども阿含にはすこしまさりて候ゆへ。いかでかいのらん〻雨下らざるべき。されば雨は下りて候へども。大風のふいぬるは大なる僻事(ひがこと)のかの法の中にまじ(雜)われるなるべし。弘法大師の三七日に雨下らずして候を天子の雨を我が雨と申すは。又無善畏等よりも大にまさる失(とが)のあるなり。第一の大妄語には弘法大師の自筆に云〻。弘仁九年の春疫れい(癘)をいのりてありしかば夜中に日ひでたりと云云。かゝるうちごと(妄語)をいう人なり。此事は日蓮が門家第一の祕事なり本文をとりつめ(取詰)ていうべし。佛法はさてをきぬ上(かみ)にかきぬる事天下第一の大事なり。つで(傳)にをほせあるべからず御心ざしのいたりて候へばをどろかしまいらせ候。日蓮をばいかんがあるべかるらんとをぼつか(覺束)なしと。をぼしめすべきゆへにかゝる事ども候。むこう(蒙古)國だにもつよくせめ候はば今生にもひろ(弘)まる事も候なん。あまりにはげ(强)しくあたり(當)し人人はくゆ(悔)るへんもやあらんずらん。外道と申すは佛前八百年よりはじまりて。はじめは二天三仙にてありしがやうやくわか(分)れて九十五種なり。其中に多くの智者神通のものありしかども一人も生死をはなれず。又歸依せし人人も善につけ惡につけて皆三惡道に墮(ツル)候しを。佛出世せさせ給ひてありしかば。九十五種の外道十六の大國の王臣諸民をかたらひて或はのり或はうち。或は弟子或はだんな(檀那)等無量無邊ころ(害)せしかども佛たゆ(弛)む心なし。我ゝ此法門を諸人にをそ(嫉)されていねやむ波ぞならば。一切衆生地獄に墮ツべしとつよくなげかせ給ひしゆへに退する心なし。この外道と申すは先佛の經經を見てよみうこなひ(讀損)て候しより事をこれり。今も又かくのごとし。日本の法門多シといへども源(もと)は八宗九宗十宗よりをこれり。十宗のなかに華嚴等の宗宗はさてをきぬ。眞言と天台との勝劣に弘法　慈覺　智證のまどひ(惑)しによりて日本國の人人今生(ニハ)佗國にもせめられ後生にも惡道に墮(ツル)なり。漢土のほろび又惡道に墮(ツル)事も善無畏金

剛智不空のあやまりよりはじまれり。又天台宗の人人も慈覺智證より後はかの人人の智慧にせか(防)れて天台宗のごとくならず。されば さのみやはあるべき。いわうや日蓮はかれにすぐ(勝)べきとわが(我)弟子等をばせども。佛の記文にはたがはず末法に入ッて佛法をはう(謗)じ無間地獄に墮ッべきものは大地微塵よりも多ク。正法を得ん人は爪上の土よりもすくなしと涅槃經にはとかれ。法華經には設須彌山をなぐ(擲)るものはありとも。我末法に法華經を經のごとくにとく(説)者ありがたしと記シをかせ給へり。大集經 金光明經 仁王經 守護經 はちなひをん(般泥洹)經 最勝王經等に。末法に入ッて正法を行せん人出來せば邪法のもの王臣等にうた(訴)へてあらんほどに。彼王臣等他人がことばにつひて一人の正法のものを。或はのり或はせめ或はなが(流罪)し或はころさば。梵王帝釋無量の諸天天神地神等 りんごく(隣國)の賢王の身に入りかはりてうの國をほろぼすべしと記し給へり。今の世は似て候者哉。抑モ各各はいかなる宿善にて日蓮をば訪はせ給へるぞ。能能過去を御尋ネ有らばなにと無くとも此度生死は離レさせ給フべし。すりはむぎく(須梨槃特)は三箇年に十四字を暗にせざりしかども佛に成りぬ。提婆は六萬藏を暗にして無間に墮チぬ。是偏に末代の今の世を表する也。敢て人の上と不レ可二思食一ス。事繁クければ止置キ候畢。抑モ當時の怱怱に御志申ス計リ候はねば大事の事あらあらたどろかしまひらせ候。さゝげ(大角豆)青大豆給ヒ候ぬ。

六月二十二日　　日蓮　花押

西山殿御返事

明治三十六年一月十四日富士大石寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ御眞蹟十四丁ノ中今始終ノ二紙ヲ失セリ依テ闕タル所ハ北山本門寺ノ順師第二轉ノ御寫ニテ校正ス（稲田海素處記）

◎淨蓮房御書　啓二八五七　鈔一八一　語三三三　音下二五　拾四四四　扶一〇六三

細美帷一ッ送リ給ヒ候畢。善導和尚と申ス人は漢土に臨淄と申ス國の人也。幼少の時密州と申ス國の明勝と申ス人を師とせしが。彼の僧は法華經と淨名經を尊重して我も讀誦し人をもすゝめしかば善導に此を教ゆ。善導此を習ヒて師の如く行せし程に。過去の宿習にや有リけん案云ク佛法には無量の行あり機に隨て皆利益あり教いみじといへども機にあたらざれは虛きがごとし。されば我レ法華經を行は我が機に叶はずばいかんが有ルべかるらん。教には依ルべからず

と思て一切経蔵に入り両眼を閉て経をとる観無量壽経を得たり。披見すれば此経に云く爲未來世の爲に煩悩賊之所害者上説く清淨の業等云云。華厳経は二乘のため法華経涅槃経等は五乘にわたれどもたゞし（大旨）は聖人のためなり。末法の我等が爲なる経は唯観経にかぎれり。釋尊最後の遺言には涅槃経にはすぐべからず。彼経には七種の衆生を列たり。第一は入水則沒の一闡提人也生死の水に入りしより已來いまに出ず。譬へば大石を大海に投入たるがごとし。身重くして浮ことを習はず常に海底に有り此常沒と名く。第二をば出已復沒と申す譬へば身に力有りとも浮ことをならはざれは出て已て復入りぬ。此は第一の一闡提の人には有らねども一闡提のごとし又常沒と名く。第三は出已不沒と申す生死の河を出でてよりこのかた沒することなし。此は舍利弗等の聲聞。第四は出已即住第五は觀方第六は淺處第七は到彼岸等也。第四第五第六第七は縁覺菩薩也。釋迦如來世に出てさせ給ひて一代五時の経經を説き給ひて第三已上の人人を救ひ給ひ畢。第一は捨てさせ給ひぬ。法藏比丘阿彌陀佛此をうけとて四十八願を發して迎ひとらせ給へ。十方三世の佛と釋迦佛とは第三已上の一切衆生を救ひ給へ。あみだ（阿彌陀）佛は第一第二を迎ひとらせ給へ。而るに今末代の凡夫は第一第二に相當れり。而るを淨影大師天台大師等の佗宗の人師は此事を辨へずして九品の淨土に聖人も生ると思へり悞りが中の悞り也。一向末代の凡夫の中に上三品は遇大始めて大乘に値凡夫。中の三品は遇小始めて小乘に値へる凡夫。下の三品は遇惡一生造惡無間非法の荒凡夫。臨終の時始めて上の七種の衆生を辨へたる智人に行きあひて。岸の上の経經をうちすてて溺れる水の機を救はせ給へ。觀経の下品下生の大惡業の南無阿彌陀佛を授けたり。されば我一切経を見るに法華経等は末代の機には千中無一也。第一第二の我等衆生は第三已上の機の爲に説れて候法華経等を。末代に修行すれば身は苦しんで益なしと申して。善導和尚は立所に法華経を抛すてて觀経を行せしかば。三昧發得して阿彌陀佛に見參して重ねて此法門を渡し給へ四帖の疏是也。導の云く然諸佛の大悲は於苦者に心偏に愍念す常沒の衆生を是を以て勸て歸淨土に。亦如溺れる水の人の急に須く偏に救て岸上之者何の用て濟て爲と云云。又云く言深心者即是深信之心也亦有二種。一者決定深信自身は現是罪惡生死の凡夫曠劫已來常に沒常に流轉の無有出離之縁。又云く二者決定深信彼阿彌陀佛の四十八願は攝受衆生無疑無慮乘に彼願力に定て得往生云云。此の釋の心は上にかきあらはして候淨土宗の肝心と

申ス は此レ也。我等末代の凡夫は涅槃經の第一第二也。さる時に釋迦佛の敎に
は無シ有ニ出離之緣一法藏比丘の本願にては定得往生と知ルを三心の中の深心と
は申ス也等云云。此レ又導和尚の私義には非ず綽禪師と申せし人の涅槃經を二
十四反かう(講)せしが。曇鸞法師の碑の文を見て立所に涅槃經を捨てて觀經に
遷リて後此法門を導には敎へて候也。鸞法師と申せし人は齊の代の人也漢土に
ては時に獨歩ノ人也。初には四論と涅槃經とをかうせしが。菩提流支と申ス三
藏に値て四論ト涅槃を捨テ觀經に遷リて往生をとげし人也。三代が間傳へて候法
門也。漢土日本には八宗を習フ智人モ正法すでに過キて像法に入りしかば。かし
こき人人は皆自宗を捨てて淨土ノ念佛に遷りし事此レ也。日本國のいろはは天台
山の慧心ノ往生要集ナレ也。三論ノ永觀が十因往生講ノ式此等ハ皆此法門をうか
がい得たる人人也。然上人亦爾也云云。日蓮云ク此義を存ずる人人等も但
恆河の第一第二は一向淨土の機と云云。此レ此法門の肝要か。日蓮涅槃經の
三十二ト三十六を開キ見ルに第一は誹謗正法の一闡提常沒ノ大魚と名けたり。第
二は又常沒其第二の人を出タさば提婆達多瞿伽梨善星等也。此は誹謗五逆ノ人
人なり。詮する所第一第二は謗法と五逆也。法藏比丘の設我得レ佛ヲ十方衆生
至心ニ信樂欲シ生ニ我國ニ乃至十念若不レ生ザ者不レ取ラ正覺ヲ唯除ク五逆ト誹謗正法ト
云云。此願の如くんば法藏比丘は恆河の第一第二を捨はてて候ぬれ。導
和尚の如くならば末代の凡夫阿彌陀佛の本願には千中無一也。法華經の結經
たる普賢經には五逆と誹謗正法は一乘の機と定メ給たり。されば末代の凡夫の
爲には法華經は十即十生百即百生也。善導和尚が義に付て申ス詮は私案には
あらず。阿彌陀佛は無上念王たりし時婆娑世界は已にすて給ヒぬ。釋迦如來
は寶海梵志として此の忍土を取リ給ヒ畢。十方の淨土には誹謗正法と五逆ト
一闡提とをば迎フべからずと。阿彌陀佛十方の佛誓ヒ給キ。寶海梵志の願ニ
云ク即集ニ十方淨土ノ擯出ノ衆生ヲ我レ當ニ度ス之ヲ云云。法華經ニ云ク唯我一人能爲ス
救護ノ等云云。唯我一人の經文は堅きやうに候へども釋迦如來の自義にはあ
らず。阿彌陀佛等の諸佛我と娑婆世界を捨テしかば。敎主釋尊唯我一人と誓ッ
てすでに娑婆世界に出テ給ぬる上はなにをか疑ヒ候べき。鸞綽導心觀然等の
六人の人人は智者也日蓮は愚者也非學生也。但シ上の六人は何國の人ぞ三界
の外の人か六道の外の衆生歟。阿彌陀佛に値ヒ奉リて出家受戒して沙門となり
たる僧歟。今の人人は將門純友清盛義朝等には種性も及ばず威德も不レ

足ラ。心のから(剛)さは申スばかりなけれども。朝敵となりぬれば其人ならざる人人も將門か純友かと舌にうちからみ(縒)て申セども。彼の子孫等もとがめず。義朝なんど申スハ故右大將家の慈父也。子を敬ヒまいらせば父をこそ敬ヒまいらせ候べきに。いかなる人人も義朝爲朝なんど申スぞ。此レ則王法の重く逆臣の罪のむく(報)ゐ也。上の六人モ又かくのごとし。釋迦如來世に出テさせ給ヒて一代の聖教を說キをかせ給フ。五十年の說法を我と集メて淺深勝劣 虛妄眞實を定メて。四十餘年は未タ顯ハ眞實ヲ已今當第一等と說せ給ヒしかば。多寶十方の佛眞實なりと加判せさせ給ヒて定メをかれて候を。彼六人は未顯眞實の觀經に依リて皆是眞實の法華經を第一第二ノ惡人の爲にはわらずと申さば。今の人人は彼にすかされて數年を經たるゆへに。將門純友等が所從等彼を用ヒざりし百姓等を或は切リ或は打チなんどせしがごとし。彼をれうれて從ヒし男女は官軍にせめられて彼人人と一時に水火のせめに値ヒしなり。今日本國の一切の諸佛菩薩一切ノ經ヲ信ずるやうなれども心は彼の六人の心也身は又彼の六人ノ家人也。彼の將門等は官軍の向はざりし時は。大將ノ所從知行の地且安穩なりしやうなりしかども違敕の責ノ近づきしかば。所は偏羅道となり男子は厨者の魚をほふ(屠)るがごとし。炎に入リ水に入リしなり。今日本國モ又かくのごとし。彼六人が僻見に依ッて今生には守護の善神に放はなされて三災七難の國となり。後生には一業所感の衆生なれば阿鼻大城ノ炎に入ルべし。法華經の第五ノ卷に末代の法華經の强敵を佛記シ置キ給るは如六通羅漢と云云。上の六人は尊貴ナルこと如下現スル三六通ヲ羅漢上。然に淨蓮上人の親父は彼等の人人の御檀那也佛敎實ならば無間大城疑ヒなし。又君の心を演フは臣 親の苦をやすむるは子也。目犍尊者(悲母の餓鬼の苦を救ヒ淨藏淨眼は慈父の邪見を翻し給ヒき。父母の遺體は子の色心也。淨蓮上人の法華經を持チ給フ御功德は慈父の御力也。提婆達多は阿鼻地獄に墮チしかども天王如來の記を送リ給き。彼は佛と提婆と同性一家なる故也。此は又慈父也子息也。淨蓮上人の所持の法華經いかでか彼の故聖靈の功德とならざるべき。事多シと申せども止メ畢。三反人によませてきこしめせ。恐恐謹言。

六月二十七日　　日蓮花押

返返。するが(駿河)の人人みな同シ御心と申させ給ヒ候へ。

明治三十五年十二月十六日富士北山本門寺開山日興上人ノ御寫本ヲ以テ校正ス（稻田海素記）

○大學三郎殿御書　啓三四六　鈔二三三六　語四四三　音下三九　拾七一八　扶一三一五

外道ニハ明シ天人畜ノ三善道ヲ鬼道ノ有無論ンヲ地獄道ハ無シ其沙汰ヲ小乘經ニハ六道ノ因果ヲ四聖以テ不ニ分明ナラ一俱舍成實律ノ三宗ハ依ニ憑シテ小乘經ニ但明カサ二六道ヲ一是也。三論宗ハ天台宗已前ニ自リ天竺ニ渡レスヲ之ヲ立テ、ニ八界ヲ一不レ明カサ二十界ヲ一。法相宗ハ又天竺ノ宗ナリ天台已後ニ唐ノ太宗ノ世ニ渡レスヲ之ヲ又立ツ八界ヲ一。雖レ爲タリ大乘ニ立テ三五性各別ヲ一無性有情ハ永ク不ニ成佛セ一立ツ之ヲ殆ト似リ外道ノ法ニ自佗宗ノ歎キ也。華嚴宗眞言宗ノ兩宗ハ天台已後ニ有リ之ヲ。華嚴宗ハ唐ノ則天皇后ノ御宇ニ立ツ之ヲ眞言宗ハ玄宗之時善無畏三藏渡レスヲ之ヲ。但シ天竺ニ眞言宗ノ名無レ之ヲ無畏三藏以テ大日經ヲ爲ス宗ト之ヲ故ニ猥ニ稱スルヲ天竺ノ宗ト一歟。此三宗共ニ立ツ十界ヲ一。但シ天台宗已後也偷ニ盜智者大師ノ巧智ヲ一號ニ自身ノ才財ト一歟。如ク佛說ノ勸レ之ヲ法華經之外華嚴經　大集經　般若經　大日經　深密經等ノ諸經ハ但小衍相對也。但限テ法華經計リ一以テ已今當ヲ爲ス眷屬ノ修多羅ト一。雖レ然天台已前ノ諸師法華經等ノ一切ノ大乘經ヲ以テ小衍相對ヲ一釋スレ之ヲ。王臣ノ無ニ差別一上下混スレ之ヲ佛法未タレ顯ハ愚癡ノ失有リ之ヲ。天台已後ニ諸宗小衍相對ノ以テ經經ヲ一權實相對定レ之ヲ。天台ノ智盜レ之ヲ背ニ日月ニ向ヒ燈炷ニ丘塚ヲ比ニ華恆ニ是也。佛ハ十八界修羅ハ十九界天台ハ四智眞言ハ五智天台ハ九識十識眞言ハ十識十一識。而天台ノ學者誑ニ惑セ之ヲ悉ク思ヒ實義ニ法華經ハ釋尊ノ所說ニテ民ノ如ク萬言ノ大日經ハ天子ノ鳳文王ノ如ニ一言ノ等云云。善無畏三藏事ヲ寄セ天竺ニ法華經ト與ニ大日經ト一理同事勝ト立ツ是一ノ謬言ナリ。日蓮捨テ、ニ論師人師ノ添言ヲ一專ラ勸ニ經文ヲ一。大日經一部六卷並ビニ供養法ノ卷一卷三十一品見ニ聞之ヲ一聲聞乘ト緣覺乘ト大乘ノ菩薩ト佛乘ト四乘ト說ク之ヲ。其中ノ大乘ノ菩薩乘ト者三藏教ノ三祇ノ菩薩乘也。佛乘ハ實大乘也。不レ及ハ法華經ニ之上劣リ三華嚴般若ニ但タ阿含ト方等ニ二經也。大日經ノ極理ハ未タ及ハ天台ノ別教通教ノ極理ニ也。弘法大師延曆二十三年ニ入唐シ大同二年ニ歸朝ス。三箇年之間値テニ慧果和尙ニ學ニ習シ眞言ノ祕教ヲ一。歸朝之後十住心　二教論　注レ之ヲ流ニ布ス世間ニ一。釋迦牟尼佛並ビニ大日二佛ノ所說ノ勝劣定レ之ヲ。第一大日經　第二華嚴經　第三法華經自リ淺キ至レ深キニ義也。華嚴經勝ルトハ法華經ニ者取ル南北ノ二義ヲ一也。又華嚴宗ノ義也。南北並ビニ弘法大師ハ不レ見ニ無量義經　法華經　涅槃經ノ三經ヲ一愚人也。佛既ニ分明ニ華嚴經ト與ノ無量義經ニ勝劣說レ之ヲ何ッ捨テ、ニ聖言ヲ一南北ノ付ニ凡謬ニ乎。以テ近キ察スレ遠キ將タ又大日經ト與ノ法華經ニ勝劣不レ知ラ之ヲ大日經四十餘年之文無レ之ヲ又已今當之言削ルレ之ヲ二乘作佛久遠實成無シ之ヲ。法華經ト與ノ大日經ニ勝劣論レ之ヲ民ト與レ王石ト珠勝劣高下是也。而安然和尙粗顯レ之ヲ雖レ然タ但タ華嚴經ト與ノ法華經ニ勝劣ハ似レ

明ムルニ之ヲ。法華大日經ノ勝劣闇レ之ニ如シ闇ト與ノ漆ルレ也。慈覺大師ハ本雖レ稟ニ傳教大師ニ捨テレ本ヲ付キ末ニ。入唐之間眞言家ノ人人誑ニ惑之ヲ間又大日經ト與ニ法華ニ理同事勝ト云云。似レ賢但不レ出ニ善無畏ノ辟見ヲ耳。而日蓮居シ末代ニ粗疑ニ此義ヲ。尊レ遠ヲ賤レ近ヲ上レ死下レ生故ニ當世ノ學者等不レ用ヒ之ヲ。設ヒ堅ク持三歸五戒十善戒二百五十戒五百戒十無盡戒等ノ諸戒ヲ比丘比丘尼等モ。依テ愚智ノ(癡)失ニ小乘經ヲ謂ヒ大乘經ト權大乘經ヲ執ニ實大乘經ト等ノ謬義出來ス。大妄語大殺生大偸盜等ノ大逆罪ノ者也。愚人ハ不レ知レ之ヲ尊ニ智者ト。設世間ノ諸戒破ル之ヲ者堅ク辨ニ大小權實等ノ經ヲ世間ノ破戒ハ佛法ノ持戒也。涅槃經ニ云ク於テ戒ニ緩者ヲ不ニ名テ爲サレ緩ト於テ乘ニ緩者ヲ乃名爲スレ緩ト等云云。法華經ニ云ク是ヲ名ニ持戒ト等云云。重ニ故ニ留レ之ヲ事事期ス靈山ヲ。恐恐謹言。

七月二日　　日蓮花押

大學三郎殿

明治三十五年四月十一日下總平賀本土寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ御眞蹟ハ九枚ナリ

（稲田海素處記）

○大田殿女房御返事　啓三六三七　鈔二五五三　音下四五　語五三一　記下四〇　拾八二三　扶一九二九

八月分の八木一石給候畢。即身成佛と申ス法門は諸大乘經並に大日經等の經文に分明に候ゑ。爾ばいかで彼經經の人人の即身成佛と申スは二ノ增上慢に墮チて必無間地獄へ入リ候也。記ノ九ニ云ク然シテ二ノ上慢不レ無ニ深淺一謂レ如ト乃チ成ニ大無慙ノ人ト等云云。諸大乘經の煩惱即菩提生死即涅槃の即身成佛の法門は。いみじくをうたかきやうなれども此はあい(愛)して即身成佛の法門にはあらず。其心は二乘と申す者は鹿苑にして見思を斷じていまだ塵沙無明をば斷せざる者が。我は已に煩惱を盡シたり無餘に入リて灰身滅智の者となれり。灰身なれば即身にあらず滅智なれば成佛の義なし。されば凡夫は煩惱業もあり苦果の依身も失フ事なければ。煩惱業を種として報身應身ともなりなん。苦果あれば生死即涅槃とて法身如來ともなりなんと。二乘をこそ彈呵せさせ給ヒしか。さればとて煩惱業苦が三身の種トはなり候はず。今法華經にして有餘無餘の二乘が無き煩惱業苦をとり出シて即身成佛と說キ給フ時。二乘の即身成佛するのみならず凡夫も即身成佛するなり。此法門をだにもくはしく案ほどかせ給わば。華嚴眞言等の人人の即身成佛と申シ候は。依經に文は候へども其義は

あいてなき事なり。僻事の起り此也。弘法慈覺智證等は此法門に迷惑せる人なりとみ（見）候。何況（カニ）其已下ノ古德先德等は言ヲにたらず。但天台ノ第四十六の座主東陽の忠尋ト申ス人こそ此法門はすこし（少）あやぶまれて候事は候へ。然ども天台ノ座主慈覺の末をうくる人なればいつわりをろか（僞愚）にてさてはて（果）ぬるか。其上日本國に生を受ル人はいかでか心にはをもうとも言に出シ候べき。しかれども釋迦多寶十方の諸佛地涌龍樹菩薩天台妙樂傳敎大師は。即身成佛は法華經に限ルとをぼしめされて候ぞ。我弟子等は此事をもひ出（で）にせさせ給へ。妙法蓮華經の五字の中に諸論師諸人師の釋まちまちに候へども皆諸經の見（けん）を出テず。但龍樹菩薩の大論と申ス論に譬（ヘ）如（シト）ニ大藥師ノ能ク以テ毒ヲ爲（スカ）シ藥ト申ス釋こそ。此の一字を心へさせ給へたりける歟と見へて候へ。毒と申スは苦集（くじふ）ノ二諦生死の因果ハ毒の中の毒にて候ぞかし。此毒を生死即涅槃煩惱即菩提となし候を妙の極とは申シけるなり。良藥と申スは毒の變じて藥となりけるを良藥とは申シ候けり。此龍樹菩薩は大論と申ス文（ふみ）の一百の卷に。華嚴般若等は妙にあらず法華經こそ妙にて候へと申ス釋也。此大論は龍樹菩薩の論羅什三藏と申ス人の漢土へわたして候なり。天台大師は此の法門を御らむ（覽）わ（有）て南北をばせめさせ給ヒて候ぞ。而（カル）ニ漢土唐の中（なかころ）日本弘仁已後ノ人人の悞（みやまり）の出來（わたし）し候ける事は。唐の第九ノ代宗皇帝の御宇不空三藏と申ス人の天竺より渡て候論あり菩提心論と申ス。此論は龍樹の論となづ（名）けて候。此論ニ云ク唯眞言法ノ中（カニノミ）即身成佛（スル）故ニ是說ク三三摩地ノ法ヲ於テ諸敎ノ中（カニ）闕テ而不レ書セと申ス文あり。此釋にばかさ（誑）れて弘法慈覺智證等ノ法門はさんざんの事にては候也。但大論は龍樹の論たる事は自佗あらうう事なし。菩提心論は龍樹の論不空ノ論と申スあらうい有り。此はいかにも候へすてをき（捨置）候ぬ。但不審なる事は大論の心ならば即身成佛は法華經に限ルべし。文と申シ道理きわまれり。菩提心論が龍樹の論とは申スとも大論にうむいて眞言ノ即身成佛を立ツる上（うへ）。唯の一字は强（つよし）と見へて候。何（いつれ）の經文に依リて唯の一字をば置て法華經をば破シ候けるぞ證文尋ネべし。龍樹菩薩の十住毗婆娑論に云ク經に依ラざる法門をば黑論と云云自語相違あるべからず。大論ノ一百ニ云ク而モ法華等ノ阿羅漢ノ授決作佛乃至譬（ヘ）如（シ）ニ大藥師ノ能以テ毒ヲ爲（スカ）レ藥ト等云云。此釋こそ即身成佛の道理はかかれて候へ。但菩提心論と大論とは同シ龍樹大聖の論にて候が。水火の異をばいかんせんと見候に。此は龍樹の異說にはあらず譯者の所爲（うゐ）なり。羅什は舌やけ

（燒）ず不空が舌やけぬ妄語はやけ實語はやけぬ事顯然也。月支より漢土へ經論わたす人一百七十六人なり其中に羅什一人計りこそ教主釋尊の經文に私の言入ぬ人にては候へ。一百七十五人の中羅什より先後一百六十四人は羅什の智をもつて知り候べし。羅什來せ給ひて前後一百六十四人が悞も顯れ新譯の十一人が悞も顯。又少こざかさしくなりて候も羅什の故也。此は私の義にはあらず感通傳に云く絶後光前と云云。光は前ぞと申すは後漢より後秦までの譯者。絶ぬる後と申すは羅什已後善無畏金剛智不空等も羅什の智をうけ（受）てすこしてざかしく候也。感通傳に云く已下の諸人並皆俟つ事。されば此菩提心論の唯の文字は設龍樹の論なりとも不空の私の言也。何に況や次下に於て諸教の中に闕て而不書せとかかれて候存外のあやまりなり。即身成佛の手本たる法華經をば指をいてあとかたもなき眞言に即身成佛を立て。剩へ唯の一字をかるる條天下第一の僻見也此は偏に脩羅根性の法門なり。天台智者大師の文句の九に壽量品の心を釋し。佛於三世等有三身於諸教の中に祕之不傳とかかれて候。此はこゝろ即身成佛の明文にては候へ。不空三藏此釋を消が爲に事を龍樹に依て。唯眞言法の中に即身成佛故是說三摩地の法於諸教の中に闕而不書せとかかれて候也。されば此論の次下に即身成佛をかかれて候があへて即身成佛にはあらず生身得忍に似て候。此人は即身成佛はめづらしき法門とはきかれて候へども。即身成佛の義はあへてうかがわぬ人人なり。いかにも候へば二乘成佛久遠實成を說き給ふ經にあるべき事なり。天台大師の於諸教中祕之不傳の釋は千且千且恐恐。外典三千餘卷は政當（道）の相違せるに依って代は濁と明。內典五千七千餘卷は佛法の僻見に依って代濁べしとあかされて候。今の代は外典にも相違し內典にも違背せるかのゆへに。この大科一國に起りて已に亡國とならむとし候歟。不便不便。

七月二日　　日蓮花押

大田殿女房御返事

明治三十五年三月二十九日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ御正本ハ二十一丁二百十二行アリ（稻田海素慶記）

○高橋殿御返事　考二三

瓜一籠さゝげひげ（豇豆穂尖）こねだまめ（小枝豆）ねいも（根芋）かうのうり（南蠻瓜）給候ヒ畢。付法藏經と申ス經にはいさご（沙）のもちゐ（餅）を佛に供養しまいらせしわらは（童）百年と申せしに一閻浮提の四分カ一の王となる所謂阿育大王これなり。法華經の法師品には而於一劫中と申シて一劫が間釋迦佛を種種に供養せる人ノ功德と。末代の法華經の行者を須臾モ供養せる功德とたくらべ候に。其福復過ク彼レニと申シて法華經の行者を供養する功德すぐれたり。これを妙樂大師釋云ク有シテ供養スル者ハ福過ク十號ニと云云。されば佛を供養する功德よりもすくれて候なれば佛にならせ給はん事疑ヒなし。其上女人の御身として尼となら せ給ヒて候なりひよいよ申スに及ばず。但シさざめて念佛者にてやをはすらん。たうじ（當時）の念佛者持齋は國をほろぼし佗國の難をまねくものにて候。日本國の人人は一人もなく日蓮がかたき（敵）となり候ぬ。梵王帝釋日月四天のせめをかぶりてたうじのゆきつしま（壹岐對馬）のやうになり候はんずるに。いかがせさせ給ッべきせさせ給ッべき。なによりも入道殿の御所勞なげき入ッて候。しばらく（少時）いきさせ給ヒて法華經ヲ謗ずる世ノ中御覽あれと候へ。日本國の人人は大體はいけどりにせられ候はんずる也。日蓮を二度までながし法華經の五ノ卷をもてからべ（頭）を打チ候しは。こゝ候はんずらむ。

七月二十六日　　日蓮花押

御返事

明治三十六年一月十六日富士上野大石寺ニ於テ日興上人ノ御寫本ヲ以テ校正ス（稲田海素記）

○上野殿御返事　考三三

むぎ（麥）ひとひつ（一櫃）河のり五條はじかみ（薑）六ば（把）給畢ヌ。いつもの御事に候へばをどろかれずめづら（珍）しからぬやうにうちをぼへて候はぼむぶ（凡夫）の心なり。せけん（世間）うう〳〵（忽々）なるうへを〻みや（大宮）のつくられ（造營）させ給へば百姓と申シ我内の者と申シけかち（飢渴）と申しものつくり（物作）と申シいくうばく（許多）いとま（間）なく御わたりにて候らむに。山のなかのすまゐ（栖居）さこうと思ひやらせ給ヒて。鳥のかい子（卵）をやしなふが如く燈に油をうふるがごとく。かれ（枯）たる草に雨のふるが如くうへ（飢）たる子に乳をあたふるが如く。法華經の御命ヲをつがせ給ッ事三世ノ諸佛を供養し給へるにてあ

るなり。十方の衆生の眼を開く功徳にて候べし。尊しとも申す計りなし。あなかしこあなかしこ。恐恐謹言。

七月十二日　　日蓮　花押

進上　上野殿御返事

明治三十六年二月三日雪夜富士大石寺ニ於テ初ヨリ「山のなか」マヲチ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ御正本ハ一枚九行ナリキ其餘ハ朝本等ニテ校正ス（稻田海素慶記）

○高橋入道殿御返事　啓三五三七　鈔二五一四　語五一四　拾七五七　扶一四五三

進上　高橋入道殿御返事　　日蓮

我等が慈父大覺世尊は人壽百歳の時中天竺に出現しましまして。一切衆生のために一代聖教をとき給ふ。佛在世の一切衆生は過去の宿習有って佛に縁あつかりしかばすでに得道成りぬ。我滅後の衆生をばいかんがせんとなげき給ふしかば。八萬聖教を文字となして一代聖教の中に小乘經をば迦葉尊者にゆづり。大乘經並に法華經涅槃等をば文殊師利菩薩にゆづり給ふ。但八萬聖教の肝心法華經の眼目たる妙法蓮華經の五字をば。迦葉阿難にもゆづり給はず又文殊 普賢 觀音 彌勒 地藏 龍樹等の大菩薩にもさづけ給はず。此等の大菩薩等ののぞみ（望）申せしかども佛ゆるし給はず。大地の底より上行菩薩と申せし老人を召しいだして。多寶佛十方の諸佛の御前にして釋迦如來七寶の塔中にして。妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給ふ。其故は我が滅後の一切衆生は皆我子也いづれも平等に不便にをもうなり。しかれども醫師の習と病に隨て藥をさづくる事なれば。我滅後五百年が間は迦葉阿難等に小乘經の藥をもて一切衆生にあたへよ。次の五百年が間は文殊師利菩薩 彌勒菩薩 龍樹菩薩 天親菩薩に。華嚴經 大日經 般若經等の藥を一切衆生にさづけよ。我滅後一千年すぎて像法の時には藥王菩薩 觀世音菩薩等。法華經の題目を除て餘の法門の藥を一切衆生にさづけよ。末法に入りなば迦葉 阿難等 文殊 彌勒菩薩等 藥王 觀音等のゆづられしところの。小乘經 大乘經 並に法華經は文字はありとも衆生の病の藥とはなるべからず。所謂病は重し藥はあさし。其時上行菩薩出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし。其時一切衆生此の菩薩をかたきとせん。所謂さる（猿）のいぬ（犬）をみたるがごとく。鬼神の人をあだむがごとく。過去の不輕菩薩の一切衆生にの（罵）りあだまれしの

みならず杖木瓦礫にせめられしがごとく。覺德比丘が殺害に及がごとくなるべし。其時は迦葉阿難等も或は靈山にかくれ恆河に沒し。彌勒文殊等も或は都率の内院に入り或は香山に入ラせ給ヒ。觀世音菩薩は西方にかへり普賢菩薩は東方にかへらせ給フ。諸經は行ずる人はありとも守護ノ人なければ利生あるべからず。諸佛の名號は唱ルものありとも天神これをかご（加護）すべからず。但小牛の母をはなれ金鳥のたか（鷹）にあへるがごとくなるべし。其時十方世界の大鬼神一閻浮提に充滿して四衆の身に入。或は父母をがいし或は兄弟等を失はん。殊に國中の智者げなる持戒げなる僧尼の心に此鬼神入ッて國主並に臣下をたぼらかさん。此時上行菩薩の御かび（加被）をかぶりて法華經の題目南無妙法蓮華經の五字計リを一切衆生にさづけば。彼の四衆等並に大僧等此の人をあだむ事。父母のかたき宿世のかたき朝敵怨敵のごとくあだむべし。其時大なる天變あるべし。所謂日月蝕し大なる彗星天にわたり大地震動して水上の輪のごとくなるべし。其後は自界叛逆難と申シて國主兄弟並に國中の大人をうちころし。後には佗國侵逼難と申シて鄰國よりせめられて或はいけどりとなり或は自殺をし。國中の上下萬民皆大苦に値ッべし。此ひとへに上行菩薩のかびをかをぶりて法華經の題目をひろむる者を。或はのり或はうちはり或ハ流罪し或は命をたちなんどするゆへに。佛前にちかひをなせし梵天帝釋日月四天等の法華經の座にて。誓狀を立てて法華經の行者をあだまん人をば。父母のかたきよりもなをつよくいましむべしとちかうゆへなりとみへて候に。今日蓮日本國に生レて一切經並に法華經の明鏡をもて。日本國の一切衆生の面に引向たるに寸分もたがはぬ上。佛の記シ給ヒし天變あり地天あり。定テ此國亡國となるべしとかねてしりしかば。これを國主に申ズならば國土安穩なるべくもたづねあきらむべし。亡國となるべきならばよも用ヒし。用ヒぬ程ならば日蓮は流罪死罪となるべしとしりて候しかども。佛いましめて云ク此事を知リながら身命ををしみて一切衆生にかたらずば。我が敵たるのみならず一切衆生の怨敵なり。必阿鼻大城に墮ッべしと記シ給ヘり。此に日蓮進退わづらひて。此事を申ズならば我身いかにもなるべし。我身はさてをきぬ父母兄弟並に千萬人の中にも一人も隨ッものは國主萬民にあだまるべし。彼等あだまるるならば佛法はいまだわきまへず人のせめはたへがたし。佛法を行ずるは安穩なるべしとこうをもうに。此の法を持ッによって大難出

來するはしんぬ此法を邪法なり。と誹謗して惡道に墮ッべし。此も不便なり。又此を申ずは佛誓に違する上一切衆生の怨敵なり大阿鼻地獄疑なし。いかんがせんとをもひしかどもをもひ切ッて申出ぬ。申始メし上は又ひきさすべきにもあらざればいよいよつより申せしかば。佛の記文のごとく國主もあだみ萬民もせめき。あだをなせしかば天もいかりて日月に大變わり大せいせい（彗星）も出現しぬ大地もふり（震）かへしぬべくなりぬ。どしうち（同士打）もはじまり他國よりもせめるなり。佛の記文すこしもたがわず。日蓮が法華經の行者なる事も疑はす。但去年かまくら（鎌倉）より此ところへにげ入リ候し時。道にて候へば各各にも申ベく候しかども申ス事もなし。又先度の御返事も申候はぬ事はべち（別）の子細も候はす。なに事にか各各をばへだてまいらせ候べき。あだをなす念佛者禪宗眞言師等をも並に國主等ヲもたすけんがためにこそ申せ。かれ等のあだをなすはいよいよ不便にこそ候へ。まして一日も我かた（方）とて心よせなる人人はいかでかをろか（疎）なるべき。世間のをろろしさに妻子ある人人のとをざかるをばことに悅ブ身なり。日蓮に付てたす（助）けやりたるかたわなき上。わづかの所領をも召ルならば子細もしらぬ妻子所從等がいかになげかんずらんと心ぐるし。而も去年の二月に御勘氣をゆりて三月の十三日に佐渡の國を立チ同月の二十六日にかまくらに入ル。同四月の八日平ノ左衛門ノ尉にあひたりし時やうやうの事どもとひし中に。蒙古國はいつよ（寄）すべきと申せしかば。今年よすべし。うれにと（取）て日蓮は（離）なして日本國にたすくべき者一人もなし。たすからんとをもひしたら（墓）ならば。日本國の念佛者と禪と律僧等が頸を切ッてゆい（由比）のはま（濱）にかくべし。うれも今はすぎぬ。但シ皆人のをもひて候は。日蓮をば念佛師と禪と律をうしるとをもひて候。これは物ノかずにてかずならず。眞言宗と申ス宗がうるわ（麗）しき日本國の大なる呪詛の惡法なり。弘法大師と慈覺大師此事にまどひて此國を亡さんとするなり。設二年三年にやぶるべき國なりとも。眞言師にいのらする程ならば一年半年に此くにせめらるべしと申シきかせて候き。たすけんがために申ス事を此程あだまるる事なれば。ゆり（赦免）て候し時さど（佐渡）の國よりいかなる山中海邊にもまぎれ入ルべかりしかども。此事をいま一度平ノ左衛門に申シきかせて。日本國にせめのこされん衆生をたすけんがためにのぼりて候き。又申シきかせ候し後はかまくらに有ルべきならねば。足にまかせてい

でしほどに。便宜にて候しかば設と各各はいとはせ給ふとも。今一度はみたてまつらんと千度をもひしかども。心に心をたゝか（煩悩）いてすぎ候き。うのゆへはするが（駿河）の國は守殿の御領。ことにふじ（富士）なんどは後家尼ごぜんの内の人人多し。故最明寺殿極樂寺殿のかたきといきどを（憤）らせ給ふなれば。ときつけられれば各各の御なげきなるべしとをもひし心計りなり。いまにいたるまでも不便にをもひまいらせ候へば御返事までも申ず候き。この御房たちのゆきすり（通行）にもあなかしてあなかしてふじ（富士）かじま（鹿島）のへんへ。立てよるべからずと申せどもいかが候らんとをぼつかなし。ただし眞言の事ゞ御不審にわたらせ給と候らん。いかにと法門は申ずとも御心へあらん事かたし但眼前の事をもて知しめせ。隱岐ノ法皇は人王八十二代神武よりは二千餘年天照太神入りかわらせ給て人王とならせ給ふ。いかなる者かてきすべき上。欽明より隱岐の法皇にいたるまで漢土百濟新羅高麗よりわたり來る大法祕法ゞ。叡山東寺園城七寺並に日本國にあがめをかれて候。此は皆國を守護し國主をまぼらんため也。隱岐の法皇世をかまくらにとられたる事を口をしとをぼして。叡山東寺等の高僧等をかたらひて義時が命をめしとれと行せし也。此事一年二年ならず數年調伏せしに。權ノ大夫殿はゆめゆめしろしめさざりしかば一法も行ず。給はず。又行ずとも叶ふべしともをぼへずありしに。天子いくさ（軍）にまけさせ給て隱岐ノ國へつかはされさせ給ふ。日本國の王となる人は天照太神の御魂の入りかわらせ給ふ王也。先生の十善戒の力ゞといひいかでか國中の萬民の中にはかたぶくべき。設とが（失）ありともつみ（罪）あるをや（親）を失なき子のあだむにてこそ候ぬらめ。設親に重罪ありとも子の身として失に行はんに天うけ給ふべしや。しかるに隱岐の法皇のはぢ（恥）にあはせ給へしはいかなる大禍ぞ。此ゝひとへに法華經の怨敵たる日本國の眞言師をかたらはせ給しゆへなり。一切の眞言師は灌頂と申して釋迦佛等を八葉の蓮華にかき（書）て此を足にふみて祕事とするなり。かゝる不思議の者ども諸山諸寺の別當とあをぎてもてなすゆへにたみの手にわたりて現身にはぢにあひぬ。此大惡法又かまくらに下ッて御一門をすかし日本國をほろぼさんとする也。此事最大事なりしかば弟子等にもかたらず只いつはりをろかにて念佛と禪等計りをりしりてきかせし也。今は又用とられぬ事なれば身命もれしまず弟子どもにも申ゞ也。かう申せばいよいよ御不審あるべし。日蓮いかにいみじく尊ク

とも慈覺弘法にすぐるべきか。この疑ひすべてはるべからずいかにとかすべき。但し皆人はにくみ候にすこしも御信用のありし上。此(こ)れまでも御たづねの候は只今生計りの御事にはよも候はじ定めて過去のゆへ歟。御所勞の大事にならせ給ひて候なる事あさましく候。但しつるぎはかたきのため藥は病のためめ。阿闍世王は父をころし佛の敵となれり。惡瘡身に出て後に佛に歸伏し法華經を持ちしかば。惡瘡も平愈し壽(いのち)をも四十年のべたりき。而も法華經は閻浮提人病之良藥とこうとかれて候へ。閻浮の内の人は病の身なり。法華經の藥あり。三事すでに相應しぬ一身いかでかたすからざるべき。但し御疑ひのわたり候はんをば力ラをよばず。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

覺乘房はわき(伯耆)房に。度度よませてきこしめせきこしめせ。

七月十三日　　日蓮花押

進上　高橋六郎兵衛入道殿　御返事

明治三十六年三月二日富士西山本門寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ御眞蹟ハ二十四五枚アルベキカ今ハ遺文大本廿五丁右六行ノ「藥」ヨリ廿九丁左八行「かしこ」（一二七九の一〇行）「末四の七行迄）マデ十六枚ヲ存シテ餘ハ失ヘリ其中廿四丁左四行「八萬」ヨリ同六行ノ「法」（一二七八の一三行）ノ字マデ三十八字ハ大石寺ニ祕藏セリ猶ホ其闕タル所ハ同年一月十六日大石寺ニ於テ日興上人ノ御寫ヲモテ校正ス追記スラク彼御眞蹟ノ中ニテ廿五行右終行（一二七九の一〇行）「末法」已下廿九字ヲ失シ又次左八行ニモ「がごとく」ノ四字ヲ失セリ且ツ廿七丁右六行「不用程」ヲ御眞蹟ニ「用ユ程」トアレトモ今ハ興師ノ御寫本ニ依テ改ム（稻田海素慶記）

○四條金吾殿御返事

態(わざと)御使と喜と入(ツテ)候。又柑子(かうじ)五十蘆(かご)目五貫文給(たび)候ヒ畢(ンヌ)。各各御供養と云云。又御文ノ中ニ云(いはく)去十六日に有ル僧と寄合(よりあふ)て候時諸法實相の法門を申シ合たりと云云。今經は出世の本懷一切衆生皆成佛道の根元と申スも。只此諸法實相の四字より外は全くなき也。されば傳敎大師は萬里の波濤をしの(渡)ぎ給て相傳しましまする此文也。一句萬了の一言とは是也。當世天台宗の開會の法門を申スも此經文を惡(あし)く得テ意邪義を云出シ候ヲ。只此經を持テ南無妙法蓮華經と唱へて正直捨方便但說無上道と信ずるを諸法實相の開會の法門とは申ス也。其故は釋迦佛多寶如來十方三世の諸佛を證人とし奉リ候也。相構へてかくの如く心得させ給て諸法實相の四の文字を時時あぢわ(味)へ給ふべし。良藥に毒をまじ(交)うる事有るべき乎。うしほ(潮)の中より河の水を取リ出す事ありや。月は夜に出日は晝出(ひる)テ給フ此事諍ふべき乎。此より後には加樣(かやう)に意得給て御問

答あるべし。但し細細は論難し給ふべからず。猶も申さばるれがし（我等）の師にて候日蓮房に御法門候へと。うち咲ふて打返し打返し仰せ給ふべく候。

法門を書きつる間御供養の志は不レ申候。難レ有レ難レ有レ委ハ自レ是ねんごろに可レ申候。

建治元年乙亥七月二十二日　　日蓮　花押

四條中務三郎左衛門尉殿　御返事

○乙御前御消息　啓二五三　鈔一四三四　註一五二五　音上一五　語二五七　拾三三〇　扶九二五

漢土にいまだ佛法のわたり候はざりし時は。三皇　五帝　三王　乃至大公望　周公旦　老子　孔子つくらせ給て候し文を。或は經となづけ或は典等となづく。此文を披て人に禮儀をたしへ父母をしらしめ王臣を定メて世をれさめしかば。人もしたが（從）ひ天も納受をたれ給ふ。此レにたがいし子をば不孝の者と申シ臣をば逆臣の者とて失にあてられし程に。月氏より佛經わたりし時。或一類は用ふべからずと申シ或一類は用べしと申せし程に。あらうひ出來て召シ合メたりしかば外典の者負て佛弟子勝チにき。其後は外典の者と佛弟子を合せしかば。冰の日にとくるが如く火の水に滅するが如くまくるのみならずなにともなき者となりし也。又佛經漸くわたり來リし程に佛經の中に又勝劣淺深候けり。所謂小乘經　大乘經　顯經　密經　權經　實經也。譬ば一切の石は金に對すれば一切の金に劣れども。又金の中にも重重あり一切の人間の金は閻浮檀金には及ハざるがごとく。一切經は金の如くなれども又勝劣淺深ある也。小乘經と申ス經は世間の小船のごとくわづかに人の二人三人等は乘れども百千人は不レ乘セ。設ひ二人三人等は乘れども此岸につ（著）けて彼岸へは行きがたし。又すこしの物をば入るれども大なる物をば入れがたし。大乘と申スは大船也人も十二十人も乘る上大なる物をもつみ。鎌倉よりつくし（筑紫）みち（陸奥）の國へもいたる。實經と申スは又彼大船の大乘經にはにるべくもなし。大なる珍寶をもつみ百千人のりてかうらい（高麗）なんどへもわたりぬべし。一乘法華經と申ス經も又如レ是ノ。提婆達多と申スは閻浮第一の大惡人なれども法華經にして天王如來となりぬ。又阿闍世王と申せしは父をころせし惡王なれども法華の座に列りて一偈一句の結緣衆となりぬ。龍女と申せし蛇體の女人は法華經を文殊師利菩薩說キ給ひしかば佛に

なりぬ。其上佛説には惡世末法と時をさゝせ給て末代の男女にをくら(贈)せ給ぬ。此こゝ唐船の如くにて候一乘經にてはたはしませ。されば一切經は外典に對すれば石と金との如し。又一切の大乘經所謂華嚴經 大日經 觀經 阿彌陀經 般若經等の諸の經經を法華經に對すれば。螢火と日月と華山と蟻塚との如し。經に勝劣あるのみならず大日經の一切の眞言師と法華經の行者とを合すれば水に火をあはせ露と風とを合するが如し。犬は師子をほう(吠)れば腸さくる脩羅は日輪を射奉れば頭七分に破る。一切の眞言師は犬と脩羅との如く法華經の行者は日輪と師子との如し。氷は日輪の出ざる時は堅き事金の如し。火は水のなき時はあつ(熱)き事鐵をやけるが如し。然ども夏の日にあひぬれば堅氷のとけやすさあつき火の水にあひてきへ(消)やすさ。一切の眞言師は氣色のたうとげさ智慧のかしこげさ。日輪をみざる者の堅き氷をたの(恃)み水をみざる者の火をたの(恃)めるが如し。當世の人人の蒙古國をみざりし時のれごり(憍)は御覽ありしやうにかぎり(限)もなかりしぞかし。去年の十月よりは一人もれごる者なし。きこしめししやうに日蓮一人計りこそ申せしが。よせてたにきたる(寄來)程ならば面をあはする人もあるべからず。但いかんが心うべき。答云天台云適時而已章安云取捨得宜不可一向等云云。釋の心は或時は謗じぬべきにはしばらくとかず。或時は謗ずとも強て説べし。或時は一機は信ずべくとも萬機謗べくばとくべからず。或時は萬機一同に謗ずとも強て説べし。初成道の時は法慧功德林金剛幢金剛藏文殊普賢彌勒解脫月等の大菩薩。梵帝四天等の凡夫大根性の者かずをしらず。鹿野苑の苑には俱鄰等の五人迦葉等の二百五十人舍利弗等の二百五十人八萬の諸天。方等大會の儀式には世尊の慈父の淨飯大王ねんごろに戀せさせ給しかば。佛宮に入せ給て觀佛三昧經をとかせ給。悲母の御ために忉利天に九十日が間籠らせ給しには摩耶經をとかせ給。慈父悲母なんどにはいかなる祕法か惜ませ給べき。なれども法華經をば說せ給はず。せんするところ機にはよらず時いたらざればいかにもとかせ給はぬにや。問云いかなる時にか小乘權經をときいかなる時にか法華經を說べきや。答云十信の菩薩より等覺の大士にいたるまで時と機とをば相知がたき事なり。何に況や我等は凡夫なりいかでか時機をしるべき。求云すこしも知る事あるべからざるか。答云佛眼をかつて時機をかんがへよ佛日を用て國土をてらせ。問云

ろろしき所にはまほりとなるべきよしちか（誓）はせ給へり。羅什三藏は法華經を渡し給ひしかば毘沙門天王は無量の兵士をして葱嶺を送りし也。道昭法師野中にして法華經をよみしかば無量の虎來りて守護しき。此も又彼にはかはるべからず。地には三十六祇天には二十八宿まほらせ給ふ上。人には必二ツの天影の如くにうひ（添）て候。所謂一をば同生天と云ひ二をば同名天と申す左右の肩にうひて人を守護すれば。失なき者をば天もあやまつ事なし況や善人にをや。されば妙樂大師のたまはく必假ニ心ノ固ニ神ノ守リ則強シ等云云。人の心かたければ神のまほり必つよしとこそ候へ。是は御ためにぞ。古への御心ざし申す計りなし其よりも今一重強盛に御志あるべし。其時は彌彌十羅刹女の御まほりもつよかるべしとれば日本國の上一人より下萬民に至まで一人もなくあや（失）またんとせしかども。今までかう（斯）て候事は一人なれども心のつよき故なるべしとれば日蓮をべし。一ツ船に乘りぬれば船頭のはかり事わる（拙）ければ一同に船中の諸人損じ。又身つよき人も心かひな（柔弱）ければ多くの能も無用也。日本國にはかしこき人人はあるらめども大將のはかり事つたなければかひなし。壹岐對馬九ケ國のつはもの並に男女多く或はころされ或はとらは（捕）れ或は海に入り或はがけ（崖）よりおち（墮）しものいくせんまん（幾千萬）と云事なし。又今度よせ（寄）なば先にはにるべくもあるべからず。京と鎌倉とは但壹岐對馬の如くなるべし。前にしたく（支度）していづくへもに（逃）げさせ給へ。其時は昔し日蓮を見し聞かしと申せし人人も掌をあはせ法華經を信ずべし。念佛者禪宗までも南無妙法蓮華經と申すべし。抑も法華經をよくよく信じたらん男女をば肩にになひ背にをうべきよし經文に見えて候上。くまらゐん（鳩摩羅琰）三藏と申せし人をば木像の釋迦をわせ給ひて候しぞかし。日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ひぬ昔と今と一同也。各各は日蓮が檀那也爭か佛にならせ給はざるべき。いかなる男をせさせ（爲夫）給ふとも法華經のかたきならば隨ひ給ふべからず。いよいよ強盛の御志あるべし。氷は水より出たれども水よりもすざま（凄冷）し。青き事は藍より出たれども藍よりも色まさる。同じ法華經にてはをはすれども志をかさぬれば。佗人よりも色まさり利生もあるべき也。木は火にやかるれども栴檀の木はやけず。火は水にけ（消）さるれども佛の涅槃の火はきえず。華は風にちれども淨居の華はしぼ（萎）まず。水は大旱魃に失れども

黄河に入ぬれば失せず。檀彌羅王と申せし惡王は月氏の僧の頸を切りしにとがなかりしかども。師子尊者の頸を切りし時刀と手と共に一時に落チにき。弗沙密多羅王は鷄頭摩寺を燒し時十二神の棒にかふべ（頭）われにき。今日本國の人人は法華經のかたきとなりて身を亡ぼし國を亡ぼしぬる也。かう申せば日蓮が自讃也と心ゑぬ人は申ス也。さにはあらず是云ズば法華經の行者にはあらず。又云フ事ノ後にあへ（合）ばこそ人も信ずれ。かう（斯）ただかきをき（書置）なばこそ未來の人は智ありけりとはしり候はんずれ。又身輕法重死身弘法とのべて候ば身は輕ければ人は打チはり惡むとも法は重ければ必弘マるべし。法華經弘まるならば死かばね（屍）還ッて重くなるべし。かばね重くなるならば此かばねは利生あるべし。利生あるならば今の八幡大菩薩といはるる（齎祀）るやうにいはうべし。其時は日蓮を供養せる男女は武内若宮なんどのやうにあが（崇）めらるべしとれぼしめせ。抑モ一人の盲目をあけて候はん功德すら申スばかりなし。況や日本國の一切衆生の眼をあけて候はん功德をや。何況ヤ一閻浮提四天下の人の眼のしゐ（盲）たるをあけて候はんをや。法華經の第四ニ云ク佛滅度ノ後ニ能解ニ其義ヲ是諸ノ天人世間之眼等云云。法華經を持つ人は一切世間の天人の眼也と說れて候。日本國の人の日蓮をあだみ候は一切世間ノ天人の眼をくじ（刳）る人也。されば天もいかり日日に天變あり地もいかり月月に地天かさなる。天の帝釋は野干を敬て法を習しかば今の教主釋尊となり給ヒ。雪山童子は鬼を師とせしかば今の三界の主となる。大聖上人は形を賤みて法を捨テざりけり。今日蓮れろかなりとも野干と鬼とに劣るべからず。當世の人いみじくとも帝釋雪山童子に勝るべからず。日蓮が身の賤きについて巧言を捨テて候故に國既に亡びんとするかなしさよ。又日蓮を不便と申シぬる弟子どもをもたすけがた（難）からん事こうなげかしくは覺ゑ候へ。いかなる事も出來候はば是へ御わたりあるべし奉ラン見。山中にて共にうゑ（餓）死にし候はん。又乙御前こうれとなし（成長）くなりて候らめ。いかにさかし（賢）く候らん。又又申べし。

八月四日

乙　御　前　へ

日　蓮　花　押

○上野殿御書　微下三八　考八二六

態御使と難レ有り候。夫レについては屋形造之由目出度こそ候へ。何か參り候て移徙申シ候はばや。一ッ棟札ノ事承り候書キ候て此伯耆公に進せ候。此經文は須達長者祇園精舎を造りき。然に何なる因縁にやよりけん須達長者七度まで火災にあひ候時。長者此由ヲ佛に問ヒ奉る佛答て曰く汝が眷屬貪欲深き故に此火災の難起ル也。長者申さくさていかんして此火災の難をふせぎ申スべきや。佛の給はく辰巳の方より瑞相あるべし汝精進して彼の方に向へ。彼方より光ささば鬼神三人來りて云ハん。南海に鳥あり鳴忿と名く此鳥の住處に火災なし。又此鳥一ッの文を唱ッべし其文ニ云ク聖主天中天迦陵頻伽聲哀愍衆生者我等今敬禮云云。此文を唱へんには必ず三十萬里が内には火災をこらじと。此三人の鬼神かくの如く告ッべき也云云。須達佛の仰セの如くせしかば少シもちがはず候ヨ。其後火災なきと見ゑて候。これに依りて滅後末代にいたるまで此經文を書きて火災をやめ候。今以てかくの如くなるべく候。返ス返ス信じ給ッべき經文也。是は法華經の第三ノ巻化城喩品に說て候。委は此御房に申シ含メて候。恐恐謹言。

八月十八日　上野殿御返事　日蓮花押

明治三十六年一月十三日豆州韮山江川家ニ到リ祕藏ノ棟札ニ付テノ御消息ヲ拜セリ委細ハ別ニ記ス猶ホ彼書ハ延山錄外棟札ノ年號ニ依レハ年代ノ相違アリ追撰スベキカ（稻田海素慶記）

○身延山御書　啓二七九五　註一八二　鈔一七四七　語三二四　記上四〇　拾四二三　扶一〇三九

誠に身延山之栖はちはやふる神もめぐみ（惠）を垂れ天下りましますらん。無レ心しづの男しづの女までも心を留めぬべし。哀レを催す秋の暮には草の庵に露深く檐にすだ（集多）くさいがに（蜘蛛）の糸玉を連き。紅葉いつしか色深くしてたにだゑ（斷々）に傳ふ懸樋の水に影を移せば。名にしれふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ。又後ろには峨峨たる深山うぐひす（鶯）へて梢に一乘の果を結び下枝に鳴く蟬の音滋く。前には湯湯たる流水湛て實相眞如の月浮び無明深重の闇晴て法性の空に雲もなし。かゝる砌なれば庵の内には晝は終日に一乘妙典の御法を論談し夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳（聞）く釋尊の住ミ給けん鷲峰を我朝此砌に移し置キぬ。霧立テ嵐はげし（烈）き折折も山に入リて薪を

こり露深き草を分て深谷に下て芹をつみ。山河の流もはやき巖瀬に菜をすゝぎ袂しぼ(濡)れて干わぶる思ひは。昔し人丸が詠ける和歌の浦にもしほ(潮汐)垂つゝ世を渡る海士もかくやとゞ思ひ遣る。つくづくと浮身の有様を案ずるに佛の法を求ゝ給しに不レ異。昔釋尊樂法梵志としては。皮をはぎ(剝)て紙とし髓の水を取て硯の水とし肉を割て墨とし骨を摧て筆として。下方の迦葉佛に値ひ奉りて如法應修行非法不應行今世若後世行法者安穏云云と此文を傳へ給ふ。薩埵王子としては飢たる虎の爲に身を與へ。雪山童子としては半偈の爲に身をな(投)げ尸毗王としては鳩の爲に肉を秤にかけ。乞眼婆羅門には眼をくじりて取せ給ひき。又佛大國の王と御座し時は宿善内に催し。月卿雲客の政をも忘れ百官萬乘に仰かれ給ふ十善の樂も。風の前の燈あだなる春の夜の夢離につたふ槿華の日影をまつ程ゞかし。然に過去の戒善いみじきに依りて今生には大國の王たりと云へども。無常の殺鬼にさゝはれて一期空くして後。修するところの善無ゝんば阿鼻大城の炎の底に沈み。剎利も須陀もかはらぬためし(例)にて三熱の炎にまゝ焦はり。鐵繩五體をしばり三熱のまろかし(彈丸)を口に入れ。阿防羅刹三鈷のひしほこを手に取り邪見の音をあらかにして。五體身分を取取に責るならば音を天に響かし叫ふとも地に臥て歎くとも。百官萬乘も來ッて無レ助。親類眷屬も來ッて無レ救。又錦帳の内にしてよなよな(夜々)のねざめの牀にして天にあらば比翼の鳥地に住ば連理の枝とならんと。月日を送り年を重ねて契りし妻子も來ッて訪ふ事はあらじなんどと樣樣に思ひつゞけ給ひて。自ら藏を開きて金銀等の七珍萬寶を僧に供養し象馬妻子を布施し。然して後大法の螺をふき大法の鼓を擊ッて四方に法を求ゝ給ふ。爾時に阿私仙人と申ゝ仙人來ッて申しける樣は實に法を求ゝ給ふ志御坐ば。我れ云へん樣に仕へと云ければ。大に悅んで山に入ッては果を拾ひ薪をこり菜をつみ水をくみ給仕し給へる事千歳也。常に御口ずさみには情存妙法故身心無解惓とゞ唱へ給ける。文の心は常に心に妙法を習へんと存ずる間。身にも心にも仕れどもものうき事なしと云へり。如レ此習へと給ける法は即妙法蓮華經の五字也。爾ノ時の王者今の釋迦牟尼佛是也。佛の仕へ給て法を得給へし事を我朝に五七五七七の句に結び置きけり。今如法經の時伽陀に誦する歌に。法華經を我れ得し事は薪こり菜つみ水くみつかへてゞなれて哀に覺えける也。實に佛になる道は師に仕ふるには不レ過。妙樂大師ノ弘

決ノ四ニ云ク若有テ弟子一見ニ師ノ過一者若ハ實若ハ不實其心自壞ニ失ス法ハ勝利ヲ云云。文の心は若し弟子あて師の過を見ば若は實にもあれ若は不實にもあれ。已に其心有ルは身自ら法の勝利を壞リ失フ者也云云。又止觀ノ一ニ云ク如來慇懃ニ稱歎此法一ヲ聞ク者歡喜ス常啼ハ東ニ請シ善財ハ南ニ求ノ藥王ハ燒キ手ヲ普明ハ刎レ頭ヲ。一日ニ三度捨ニ恆河沙ノ身一ヲ尚不レ能レ報ニ一句之力一ヲ況兩肩ニ荷負シ百千萬劫寧報ニ佛法之恩一ヲ云云。文の心は如來ねんごろに此法を稱歎し給へば聞く者即歡喜す。常啼菩薩は東に法を請ひ善財菩薩は南に法を求め。藥王菩薩は臂を燒き普明王は頭を刎られたり。一日に三度恆河の沙の數程身をば捨ッるとも尚一句の法恩を報ずる事あたはじ。況や二ッの肩に荷負て百千萬劫すとも。寧。佛法の恩を報ずる事あるべからずと云へる心也。止觀ノ五ニ云ク香城に骨を粉き雪嶺に身を投とも亦何ぞ以て德を報ずるに足んやと云へり。弘決ノ四ニ云ク昔毗摩大國と云ッ國に狐あり師子に追れて逃けるが水もなき渴井に落チ入リぬ。師子は井を飛ト越ヘて行キぬ。彼狐井より上んとすれども深き井なれば上る事を得ざりき。既に日數を經るほどに飢死んとす。其時狐文を唱ヘて云ク禍ト哉今日苦ニ所レ逼便チ當ニ沒ス命ヲ於丘井一。一切萬物皆無常と恨不下以レ身ヲ飼ハ中師子上ニ南無歸命十方佛表ニ知我心ノ淨ノ無レ已ヲ文。文の心は禍となる哉今日苦しにせめられて即當に命を渴井に沒すべし。一切の萬物は皆是無常也恨うらくは身を師子に飼ざりける事を。南無歸命十方佛我心の淨きことを表知し給へと喚りき。爾ノ時に天の帝釋狐の文を唱ッる事を聞キ給テ。自下界に下り井の中の狐を取リ上ケ給て法を說キ給へとの(宣)給ヒければ諸天笑ヒ給へり。帝釋誠にことわりと思食して下に居給ヒて法を說キ給へとの給ヒければ。又狐云ク逆ナル哉師も弟子も同座なる事をと云ヒければ。帝釋諸天の上の御衣をぬ(脫)ぎ重テ高座として登せて法を說しむ。狐說テ云ク有リ人樂ヒ生ヲ惡ム死ヲ有リ人樂レ死ヲ惡レ生ヲ云云。文ノ心は人有リて生る事を樂て死せん事をにくみ又人有リて死せん事を願ヒて生ん事をにくむと。此文を狐に値て帝釋習ヒ給て狐を師として敬給けり。天台ノ御釋ニ云ク雪山は隨テ鬼ニ偈を請ひ天帝は畜を拜して爲レ師ト。囊臭きをもて其金を捨ッる事なかれと釋し給へり。されば何に賤き者なりとも實の法を知リたらん人をいるかせにする事あるべからず。然ば法華經の第八ニ云ク若ハ實若ハ不實此人ハ現世ニ得ニ白癩ノ病ヲ云云。文の心は法華經の行者のとがを若は實にもあれ若は不實にもあ

れ云ん者は。現世には白癩の病をうけ後生には無間地獄に墮ッべしと說れたり。此等の理を思とつづくるに大地の上に針を立てて大梵天宮より糸を下して。あやまたず糸ノ針の穴に入ル事は有りとも。我等が人間に生るる事は難く。又億億萬劫不可思議劫をば過クるとも如來の聖敎に奉レ値ト事難し。而るに難レキ受ケ人間に生をうけ難レ値ト聖敎に奉レ値ト。設ト聖敎に値フと云へども惡知識に値フならば三惡道に墮チん事不レ可レ有レ疑ト。師墮ッれば弟子墮つ弟子墮ッれば檀那墮ッと云フ文有ルが故に。今幸に一乘の行者に奉レ値ト皮をはぎ肉を切り千歲仕へざれども。恣に一念三千十界十如一實中道皆成佛道の妙法を學ぶ。實に過去の宿善拙して末法流布の世に不レ生レ値ハ未來永永を過クとも解脫の道可レ難。又世間の人の有リ樣を見ルに口には信心深キ事を云フといへども。實に神にうむる人は千萬人に一人もなし。涅槃經ニ云ク佛法ヲ不レ信セ墮ニ惡道ニ者ハ如ニ大地ノ土ノ信ニ佛法ヲ成レ佛ニ者ハ如ニ爪上ノ土ノ說キ給へるも理也。昔佛摩耶ノ恩を報じ給はんがために俄に人にも知られ給はずして。忉利天へ四月十五日に昇らせ給とて御坐けるに。五天竺の國王大臣を始メとしてあやしのしづ（賤）の男しづの女までも。佛を失ひ奉りて啼き悲みける歎き無ク限リ誠に子を失ひ親

にをくれたるが如し。いとをし（愛）き妻を戀ひ男を戀フる思の暗すら難レ忍ト。何ニ況大覺世尊の三十二相八十種好紫磨金色の粧ひ嚴くして迦陵頻伽の御音を以て。一切衆生を皆佛に成し給はんと御經を說せ給ふ。慈悲深重に御坐す佛の御餘波惜み進する歎き思と遣るに。上陽人之上陽宮に閉チ籠られて歎し歎きにも勝れ。堯王の娘娥皇女英の二人舜王に別レ奉リて歎キし歎きにも勝れ。蘇武が胡國に流されて十九年雪中に住ミけん思にも勝れたり。餘の御戀しさに木を以て佛の御形を奉ンレ作リ。三十二相の一相をだにも作り似せ奉らず。爾ノ時ニ優塡大王と申シける王赤栴檀と云フ木を以て忉利天より毗首羯摩天を請して作り奉リける佛の。忉利天へ本佛の御迎ニ參せ給とけるも優塡大王の信心深き故也。是こそ一閻浮提に佛を作り奉りける始メなれ。又須達長者と云ける人あり佛は忉利天に御坐スが七月十五日に天竺へ下リ給べきよし聞ケければ。御儲に御堂を作ラんとしけるに御堂可レ造ル地を持ざりければ。波斯匿王の太子祇陀太子と云ける人祇陀林と云フ苑ガ持チ給たりけるに。廣四十里有りける此苑に人太刀刀を持て入れば折碎ける苑也。須達祇陀太子に値ト奉リて此苑を賣ラせ給へ御堂ヲ造ラんと云ければ。太子の給フ樣此苑四十里に金を厚四寸に敷

給はば賣んとの給とけり。須達可レ買ヲ之ヲ由を申シければ。太子の給ハく戯レにこそ云とつれ實には叶フまじとの給とけり。須達申シける様は天子に二言なしと云フ爭か假染の戯にも虚言をし給フべきと申シて。波斯匿王に此由を申シけり。大王の給ハく祇陀太子は我位を可レ繼ク者也爭か假染の戯レにも虚言をすべきと仰セられければ。太子力ラなく賣ラせ給とけり。須達四十里に金を四寸に敷イて買と取て悦ンで御堂を造ラんとしけるに。舍利弗來リて繩をひき地をわり(畫)けるに舍利弗空を見上て咲とけり。須達が云ク大聖ハ威儀を不レ亂サ理也ひかに咲ハせ給フぞと怪み申シければ。舍利弗ノ云ク汝此堂を造ラんとすれば六欲天に軍起る。かゝる大善根を修する者なれば我天へこそ迎へんずれとて互に諍をなす事のをかしと覺ユる也。汝は一期百年の後には兜率の内院に可レ生ルとぞの給とける。然して後此堂を作リ畢れり其名を祇園精舍と云フ。此祇園精舍へ七月十五日の夜佛入らせ給フべき由有リしかば。梵天帝釋ハ忉利天より金銀水精の三ツの橋をかけたりける。中の橋を佛は入ラせ給ふに。佛の左には梵天右には帝釋互に佛に天蓋を指かけまいらせ。佛の御後には四衆八部迦葉迦旃延目連須菩提千二百の羅漢萬二千の聲聞八萬の菩薩等を引具して下給とけるに。五天竺に有リと在る人皆たゞ(分き)に隨て油を儲てともしけり。萬燈をともす人もあり千燈をともす人もあり。或は百燈乃至一燈をともす人もありけるに。此に貧女と云フ者ありけり貧しき事可レ譬フ方もなし。身に纏ふ物とてはとふ(十府)のすがでも(菅薦)にも不レ及ハ藤の衣計リ也。四方に馳セ走すとも一燈の代を求るにあたはず。空く歎キ思ヒつもれる涙油ならましかば百千萬燈にともすとも盡きじ。思ヒの餘に自髪を切り手づからかづら(髢)にひねりて油一燈にかへてわづかにゞともしたりけるに。佛神も三寶も天神も地神も納受を垂給とけるにや。藍風毗藍風と申ス大風吹て燈を吹キ消シけるに貧女が一燈計リゞ殘リたりける。此光にて佛は祇園精舍へ入ラせ給とけり。以テ之ヲ思ニ之ヲたのしくして若干の財を布施すとも信心よはくば佛に成ラん事難シ叶ヒ。縱ひ貧なりとも信心強フして志深からんは佛に成ラん事不レ可レ有ル疑ヒ。されば無勝德勝と云ヒける者は土の餅を佛に供養し奉リて。依テ此功德ニ閻浮提の主阿育大王と生レて。終に八萬四千ノ石塔を造り國國に送リ給ひ後に菩提の素懷をとげ給ふ。されば法華經にて四十餘年が程さらはれし女人も成レ佛ニ。五逆闡提と云ハれし提婆も佛になりけり。然者末代濁世の謗法闡提五逆たる僧も俗も尼も

女も此經にて成佛に事無疑と。然者法華經第七に云く於我滅度の後に應に受持すべし此經を是人於佛道に決定無有疑云云。此文こゝろよにより憑敷候へ。此等をさまざま思つゞけて觀念の牀の上に夢を結べば。妻戀鹿の音に目をさまし。我身の内に三諦即一一心三觀の月曇り無く澄けるを。無明深重の雲引覆つ昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事。此砌にしられつゝ自かくぞ思つゞけける。立わたる身のうき雲も晴ぬべしたゞぬ御法の鷲の山風。

建治元年八月二十一日　　日蓮　花押

○兵衛志殿御返事　微上四一　考四二

鷲目二貫文武藏房圓日を使にて給候畢。人王三十六代皇極天皇と申せし王は女人にてをはしき。其時入鹿の臣と申す者あり。あまりれごりのものぐる（狂）わしさに王位をうばはんとふるまいしを。天皇王子等不思議とはをぼせしかどもいかにも力及がざりしほどに。大兄の王子輕の王子等なげかせ給て。中臣の鎌子と申せし臣に申あわせさせ給しかば。臣申さくいかにも人力はかならべしとはみへ候はず。馬子が例をひきて敎主釋尊の御力ならずは叶がたしと申せしかば。さらばとて釋尊を造り奉りていのりしかば入鹿ほゞなく打ルにき。此中臣の鎌子と申す人は後には姓をかへて藤原の鎌足と申す。内大臣になり大職冠と申す人今の一ッの人（藤原）の御先祖也。此釋迦佛は今の興福寺の本尊なり。されば王の王たるも釋迦佛臣の臣たるも釋迦佛。神國の佛國となりし事もゝんのたいう（右衛門大夫）殿の御文と引合て心へさせ給へ。今代の佗國にうばわれんとする事釋尊をいるかせにする故なり。神の力も及ばからずと申すはこれなり。各各は二人はすでにとゝろ人はみ（見）しかども。かくいみじくみへさせ給ばひとひに釋迦佛法華經の御力なりとをぼすらむ。又此にもをもひ候。後生のたのもしさ申すばかりなし。此より後もいかなる事ありともすこしもたゆ（弛）む事なかれ。いよいよはりあげてせむべし。設ひ命に及ぶともすこしもひるむ事なかれ。あなかしこあなかしこ。恐恐謹言。

八月二十一日　　日蓮　花押

兵衛志殿御返事

明治三十五年六月一日京都立本寺に於て御眞蹟を以て拜照し奉る但し御眞蹟は四丁にして紙質は粗ナレドモ御筆勢は疑ナシ（稻田海素慶記）

○富木殿御書　啓三四一　鈔二三三一　語四四二　音下三九　拾七一七　扶一三一四

妙法蓮華經ノ第二ニ云ク若人不レ信セ毀ニ謗シ此經ヲ見テ有ン讀ニ誦シ書ニ持スル經ヲ者ヲ輕賤憎嫉シテ而懷カンニ結恨ヲ。其人命終シテ入ニン阿鼻獄ニ乃至如ク是ノ展轉シテ無ニン數劫ニ。第七ニ云ク千劫於ニ阿鼻地獄ニ第三ニ云ク三千塵點第六ニ云ク五百塵點劫等云云。涅槃經ニ云ク爲ニ惡象ノ殺レテ者不レ至ラ三惡ニ爲ニ惡友ノ殺レテ必ナル至ル三惡ニ等云云。賢慧菩薩ノ法性論ニ云ク愚不レ信セ正法ヲ邪見及憍慢過去ノ謗法ノ障。執ニ著シ不了義ニ著シ供養供（養）敬ニ唯見テ於邪法ヲ遠ニ離シテ善知識ニ。親近シテ謗法者ノ樂ニ著スル小乘ノ法ニ如キ是等ノ衆生上不レ信セ於大乘ヲ故ニ謗ス諸佛ノ法ヲ。智者ハ不レ應ラ畏ル怨家ノ蛇火毒因陀羅霹靂刀杖諸ノ惡獸虎狼師子等ヲ。彼ハ但能斷レ命ヲ不レ能レ令ニ人入ラ可キ畏ル阿鼻獄ニ。雖レ近ツキテ惡知識ニ惡應ベキハ畏ル謗スルニ深法ヲ及謗法ノ知識ニ決定シテ令ニ人入ラ可キ畏ル阿鼻獄ニ。以テ心ニ出シ佛ノ血ヲ及殺ニ害シ父母ヲ斷ニ諸ノ聖人ノ命ヲ破ニ壞シ和合僧ヲ及斷ニ中諸ノ善根ヲ。繫ル念ヲ正法ニ能解ニ脫セン彼ノ處ヲ。若復有テ餘人ノ誹ニ謗シ甚深ノ法ヲ彼人無量劫不レ可得ニ解脫ヲ。若人令ニ衆生ヲ覺ニ信セ如レ是ノ法ヲ彼是我父母亦是善知識彼人ハ是智者。以テ如來ノ滅後ニ廻ニ邪見顚倒ヲ令ニ入ラ正道ニ故ニ三寶清淨ノ信菩提功德ノ業等云云。龍樹菩薩ノ菩提資糧論ニ云ク說ニ五無間ノ業ヲ乃至若於テ未解ノ深法ニ而起ニ執著ヲ。彼前ノ五無間等ノ罪聚ハ比レ之ニ百分不レ及ハ云云。夫賢人ハ居テ案（安）歎キ危ヲ等（後）人ハ居テ危歎ク案（安）大火ハ畏ニ怖シ小水ヲ大樹ハ値テ小鳥ニ折レ枝ヲ。智人ハ可ニ恐怖ス謗ニ大乘ヲ故ニ。天親菩薩ハ云ヒ切レ舌ヲ馬鳴菩薩ハ願ヒ刎レ頭ヲ。吉藏大師ハ身ヲ爲ニ肉橋ト玄奘三藏ハ此ニ占ヘ靈地ヲ。不空三藏ハ疑ヲ決シ天竺ニ傳教大師ハ此ヲ求ム異域ニ。皆上ニ所ロハ舉ル守ニ護スル經論ヲ故歟。今日本國八宗並淨土禪宗等ノ四衆上ミ自リ主上上皇ニ下モ至マテ子臣下萬民ニ。皆無ク一人モ弘法慈覺智證之三大師ノ末孫檀越也。圓仁慈覺大師云ク故ニ與レ彼異ナリ。圓珍智證大師云ク華嚴法華ヲ望ム大日經ニ爲ニ作戲論ト。空海弘法大師云ク望ム後ニ作ス戲論ト等云云。此三大師ノ意ハ法華經ハ已今當之諸經之中ノ第一ナリ雖レ然リト相ニ對スレハ大日經ニ戲論ノ法也等云云。此義有レ心人可レ取ル信ヲ不ヤ。今日本國ノ諸人惡象惡馬惡牛惡狗毒蛇惡刺懸岸險岸暴水惡人惡國惡城惡舍惡妻惡子惡所從等。超ニ過シ此レニ以テ可ニ恐怖ス百千萬億倍ナルハ持ル戒邪見ノ高僧等也。問ヒテ云ク上ニ所ノ擧ル三大師ヲ謗法ト疑フ歟。叡山第二圓澄寂光大師別當光定大師安慧大樂大師慧亮和尙安然和上淨觀僧都檀那僧上慧心先德。此等ノ數百人弘法之御弟子實慧眞濟眞雅等ノ數百人。並ニ八宗十宗等ノ大師先德如ニ日ト與レ日月ト與レ月星ト與レ星並ニ出ニ既ニ經ニ歷ス四百餘年ヲ。此等ノ人人

一人不レ疑ハ此義ヲ一汝以テ何智ヲ難レ之ヲ云云。以テ此等ノ意ヲ案レ之ヲ我門家ハ夜ハ斷レ眠書ハ止レ暇ヲ案レ之ヲ。一生空ク過テ萬歳勿レ悔ユル。恐恐謹言。

八月二十三日　　日蓮花押

富木殿

驚目一結給候畢。

有レ志諸人ハ聚ニ集ル一處ニ可レ有ル御聽聞一歟。

明治三十五年三月三十日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ八丁八十七行ナリ又所々損缺ノ所アリ（稲田海素處記）

○妙心尼御前御返事　考四三

すず（種々）の御志送り給候畢。をさなき（幼）人の御ためにまほり（守）さづけまいらせ候。この御まほりは法華經のうちのかんじん（肝心）一切經のげんもく（眼目）にて候。たとへば天には日月地には大王人には心たからの中には如意寶珠のたまいゑ（家）にははしら（柱）のやうなる事にて候。このまんだら（曼陀羅）を身にたもちぬれば。王を武士のまほるがごとく子ををやのあい（愛）するがごとく。いを（魚）の水をたのむがごとく草木のあめ（雨）をねがう（願）がごとくとりの木をたのむがごとく。一切の佛神等のあつまりまほり晝夜にかげのごとくまほらせ給ふ法にて候。よくよく御信用あるべし。あなかしこあなかしこ。恐恐謹言。

八月二十五日　　日蓮花押

妙心尼御前御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ日興上人ノ御寫本ヲ以テ對校ス因ニ記ス此書ノ御守ハ幼稚長壽之御守ト云テ中山祈禱相傳ニアリ（稲田海素處記）

○單衣鈔　啓二七二四　鈔一七五一　註一八二四　音下二四　語三二七　拾四三三　扶一〇四六

單衣一領送り給ヒ候畢。棄老國には老者をすて日本國には今法華經の行者をすつ。抑も此國開闢より天神七代地神五代人王百代あり。神武より已後九十代欽明より佛法始て六十代七百餘年に及べり。其中に父母を殺す者朝敵となる者山賊海賊數を知らざれども。いまだきかず法華經の故に日蓮程人に惡まれたる者はなし。或は王に惡まれたれども民には惡まれず或は僧は惡めば俗は

もれ男は惡めば女はもれ。或は愚癡の人は惡めば智人はもれたり。此は王よりは民男女よりは僧尼愚人よりは智人惡む惡人よりは善人惡む。前代未聞の身也後代にも有ルべしともれば泛す。故に生年三十二より今年五十四に至ルまで二十餘年の間。或は寺を追ヒ出され或は處をわれ。或は親類を煩はされ或は夜打チにあひ或は合戰にあひ或は惡口數をしらず。或は打たれ或は手を負フ。或は弟子を殺され或は頸を切ラれんとし或は流罪兩度に及べり。二十餘年が間一時片時も心安キ事なし。賴朝の七年の合戰もひま(間)やありけん。賴義が十二年の鬪諍も爭か是にはすぐべき。法華經の第四ニ云ク如來ノ現在猶多シク怨嫉ニ等云云。第五ニ云ク一切世間多レ怨難レシ信シ等云云。天台大師も恐はいまだ此經文をばよみ給はず一切世間皆信受せし故也。傳敎大師も及ヒ給べからず況滅度後の經文に不ニ符合ルカ一故に。日蓮日本國に出現せずば如來の金言も虛くなり。多寶の證明もなにかせん十方の諸佛の御語も妄語となりなん。佛滅後二千二百二十餘年月氏漢土日本に一切世間多怨難信の人なし。日蓮なくば佛語既に絶なん。かゝる身なれば蘇武が如く雪を食として命を繼キ李陵が如く簑をきて世をすごす。山林に交ッて果なき時は空クして兩三日を過ぐ鹿の皮破ぬれば裸にして三四月に及べり。かゝる者をば何としてか哀とれば思はん。未だ見參にも入らぬ人の膚を隱す衣を送リ給候こゝろ何とも存ジがたく候へ。此帷をきて佛前に詣て法華經を讀奉り候なば。御經の文字は六萬九千三百八十四字一一の文字は皆金色の佛也。衣は一ッなれども六萬九千三百八十四佛に一一にきせまいらせ給へる也。されば此衣を給て候ば夫妻二人ともに此佛御尋チ坐して我檀那也と守らせ給ッらん。今生には祈リとなり財ラとなり。御臨終の時は月となり日となり道となり橋となり父となり母となり。牛馬となり輿となり車となり蓮華となり山となり。二人を靈山淨土へ迎ヘ取りまいらせ給ッべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

建治元年乙亥八月　日

日蓮花押

此文は藤四郎殿女房と。常により合ヒて御覽あるべく候。

○阿佛房尼御前御返事　考八二九

御文ニ云ク於ニ謗法ノ淺深輕重ニ者罪報如何ナリ耶云云。夫法華經の意は一切衆生皆成佛道の御經也。然りといへども信ずる者は成佛をとぐ謗ずる者は無間大城に墮つ。若人不レ信セ毀ニ謗斯ノ經ヲ一即斷ニ一切世間ノ佛種ヲ一乃至其人命終シテ入ニ阿鼻獄ニ一とは是也。謗法の者にも淺深輕重の異あり。法華經を持ち信ずれども誠に色心相應の信者能持此經の行者はまれなり。此等の人は介爾ばかりの謗法はあれども深重の罪を受る事はなし。信心はつよく謗法はよはき故也。大水を以て小火をけすが如し。涅槃經ニ云ク若善比丘見テ壞ル法ヲ者ヲ置テ不ニ呵責シ驅遣シ擧處セ一當ニ知是ノ人ハ佛法中ノ怨ナリ若能驅遣呵責シ擧處セハ是我弟子眞ノ聲聞云云。此經文にせめられ奉りて日蓮は種種の大難に値ッといへども。佛法中怨のいましめ(誡)を免レんために申ス也。但し謗法に至ッて淺深あるべし。僞り愚かにしてせめざる時もあるべし。眞言天台宗等は法華誹謗の者いたう呵責すべし。然れども大智慧の者ならでは日蓮が弘通の法門分別しがたし。然ル間まづまづさしをく事あるなり立正安國論の如し。いふといはざる(不言)との重罪難レ免レ。云ッて罪のまぬがるべきを見ながら聞キながら置ていまし(禁)めざる事。眼耳の二德忽に破れて大無慈悲也。章安ノ云ク無レ慈詐親即是彼怨ト等云云。重罪消滅しがたし彌利益の心尤モ可レ然ル也。輕罪の者をばせむる時もあるべし又せめずしてをくも候べし。自然になを(直)る邊あるべし。せめて自佗の罪を脫れてさてゆる(免)すべし。其故は一向謗法になればまされ(勝)る大重罪を受ル也。爲レ彼除レ惡ヲ即是彼カ親とは是也。日蓮が弟子檀那の中にも多く如レ此ノ事共候。さだめて尼御前もきこしめして候らん。一ノ谷の入道の事。日蓮が檀那と内には候へども外は念佛者にて候ぞ。後生はいかんとすべき。然れども法華經十卷渡して候し也。彌信心をはげみ給ッべし。佛法の道理を人に語らむ者をば男女僧尼必にくむべし。よしにくく(憎)まばにくめ。法華經 釋迦佛 天台妙樂 傳敎 章安等の金言に身をまかすべし。如說修行の人とは是也。法華經ニ云ク於テ恐畏ノ世ニ能須臾モ說ク云云。惡世末法の時三毒强盛の惡人等集りて候時正法を暫時も信じ持たらん者をば天人供養あるべしと云ッ經文也。此度大願を立後生を願はせ給へ少しも謗法不信のとが候はば無間大城疑なかるべし。譬ば海上を船にのるに船をろうかにあらざれども。あか(水)入リぬれば必船中の人人一時に死する也。なはて(縄)堅固なれども蟻ノ穴あれば必終に

湛へたる水のたま(溜)らざるが如し。謗法不信のあかをとり信心のなはてをかたむべき也。淺き罪ならば我よりゆるして功德を得さすべし。重きあやまちならば信心をはげまして消滅さすべし。尼御前の御身として謗法の罪の淺深輕重の義をとはせ給ふ事。まことにありがたき女人にてはすなり。龍女にあに(豈)をとるべきや。我聞テ大乘ノ教ヲ度ニ脫苦ノ衆生ヲとは是也。問テ其義趣ヲ是則爲難シと云って法華經の義理を問ふ人はかたしと說れて候。相構相構力あらん程は謗法をばせめさせ給ふべし。日蓮が義を助け給ふ事不思議に覺え候ぞ不思議に覺え候ぞ。穴賢穴賢。

九月三日　　日蓮花押

阿佛房尼御前御返事

○御衣並單衣御書

御衣ノ布並御單衣給候畢。鮮白比丘尼と申せし人は生レさせ給ひて御衣をたてまつりたりけり。生長するほどに次第にこの衣大になりけり。後に尼とならせ給ひければ法衣となりにけり。ついに法華經の座にして記莂をさづかる一切衆生喜見如來これなり。又法華經ヲ說ク人は忍和忍(柔)辱衣と申シて必衣あるべし。物たね(種)と申すもの一なれども(植)ぬれば多となり。龍は小水を多雨となし人は小火を大火となす。衣かたびら(帷)は一なれども法華經にまいらせさせ給ひぬれば。法華經の文字は六萬九千三百八十四字一字は一佛なり。此佛は再生敗種を心符(腑)とし顯本遠壽ヲ其壽とし。常住佛性を咽喉とし一乘妙行を眼目とせる佛なり。應化非眞佛と申シて三十二相八十種好の佛よりも。法華經の文字こそ眞の佛にてはわたらせ給ふと候へ。佛を信ぜし人は佛にならざる人もあり。佛ノ滅後に法華經を信ずる人は無一不成佛如來の金言なり。この衣をつく(裁)りてかたびらをきろい(著添)て法華經をよみて候わば。日蓮は無戒の比丘なり法華經は正直の金言なり。毒蛇の珠をはき伊蘭の栴檀をいだすがごとし。恐恐謹言。

九月二十八日　　日蓮花押

御返事

明治三十五年三月三十一日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲモテ拜照シ奉ル但シ此書ハ四丁五十二行ナリ（稻田海素慶記）

○蒙古使御書　微上五　考二三

鎌倉より事故なく御下りの由承り候てうれしさ申す計りなし。又蒙古の人の頸を刎られ候事承り候。日本國の敵にて候念佛眞言禪律等の法師は切られずして科なき蒙古の使の頸を刎られ候ける事こそ不便に候へ。子細を知ざる人は勘べあてて候をれごり（憍）て云つと思ふべし。此二十餘年の間私には晝夜に弟子等に歎き申す公には度度申せし事是也。一切の大事の中に國の亡るが第一の大事にて候也。最勝王經に云く害の中の極重者無し過レ失ニ國位一等云云。文の心は一切の惡の中に國王と成りて政惡くして。我國を佗國に破らるるが第一の惡にて候と說れて候。又金光明經に云く由下愛ニ敬シ惡人一治中罰スルニ善人上故ニ乃至佗方の怨賊來國人遭ニ喪亂一等云云。文の心は國王と成りて惡人を愛し善人を科にあつれば必ず其國佗國に破らるると云つ文也。法華經第五に云く爲三世所ニ恭敬一如ニ六通の羅漢の等云云。文の心は法華經の敵の相貌を說き候に。二百五十戒を堅く持ち迦葉舍利弗の如くなる人を。國主これを尊て法華經の行者を失なはむとするなりと說れて候ぞ。夫大事の法門と申すは別に候はず。時に當て爲レ我カ國の大事なる事を少も勘へたがへざるが智者にては候也。佛のいみじきと申すは過去を勘へ未來をしり。三世を知しめすに過ぎて候御智慧はなし。設佛にあらねども龍樹天親天台傳敎なんど申せし聖人賢人等は佛程ろなかりしかども。三世の事を粗知しめされて候しかば名をも未來まで流されて候き。所詮萬法は己心に收て一塵もかけ（闕）ず九山八海も我身に備て日月衆星も己心にあり。然といへども盲目の者の鏡に影を浮べるに見ねず嬰兒の水火を怖れざるが如し。外典の外道內典の小乘權大乘等は皆己心の法を片端片端說て候也。然といへども法華經の如く說ず。然れば經經に勝劣あり人人にも聖賢分れて候ぞ。法門多多なれば止ノ候畢。鎌倉より御下りのうろうの御隙に使者申す計りなし。其上種種の物送り給候事悅ヒ入って候。日本は皆人の歎き候に日蓮が一類こそ歎きの中に悅び候へ。國に候へば蒙古の責

はよも脱れ候はじなれども。國のために責られ候し事は天も知しめして候へば後生は必たすかりなんと悦ひ候に。御邊こそ今生に蒙古國の恩を蒙らせ給ひて候へ。此事起らずは最明寺殿の十三年に當らせ給ひては御かりは所領にては申す計りなし。北條六郎殿のやうに筑紫にや御坐なん。是は各各の御心のさから(忤逆)せ給って候也。人の科をあて(當)るにはあらず。又一には法華經の御故にたすからせ給ひて候ぬるかゆゆしき御辯事なり。是程の御悦まいりても悦びまいらせ度候へども。人聞つゝましく(包羞)く候てとどめ候畢。

乃時

西山殿御返事

日蓮花押

◎太田入道殿御返事　微上三二　考四三八

貴札開テ之ヲ拜見ス御痛ノ事一歎キ二悦。維摩詰經ニ云ク爾時ニ長者維摩詰自念寢ヲ疾ニ于牀ニ。爾時ニ佛告ニ文殊師利ニ汝行ニ詣維摩詰ニ問ヘ疾ヲ云云。大涅槃經ニ云ク爾時ニ如來乃至現ニ身ニ有レ疾右脇而臥如ニ彼病人ノ云云。法華經ニ云ク少病少惱云云。止觀ノ第八ニ云ク若偃ニ臥眦耶ニ託テ疾ニ與ス教ヲ乃至如來寄レ滅ニ談シ常ヲ因テ病ニ說ク力ヲ云云。又云ク明ニ病ノ起因緣ヲ有レ六一四大不レ順故ニ病ム二飲食不レ節故ニ病ム三坐禪不レ調故ニ病ム四鬼得レ便五魔ノ所爲六業ノ起故ニ病ム云云。大涅槃經ニ世ニ有リ三人ノ其病難レ治一謗ス大乘ヲ二五逆罪三一闡提如レ是ノ三病ハ世ノ中ノ極重云云。又云ク今世ニ惡業成就シ乃至必應ニ地獄ニ乃至供ニ養三寶ヲ故ニ不レ墮ニ地獄ニ現世ニ受レ報ヲ所謂頭目背痛等云云。止觀ニ云ク若有テ重罪ニ乃至人中ニ輕ク償此ハ是業カ欲レ謝故ニ病也云云。龍樹菩薩ノ大論ニ云ク問テ云ク若爾者華嚴經乃至般若波羅蜜ハ非ス祕密ノ法ニ而法華ハ者祕密也等乃至譬ハ如シ大藥師ノ能變レ毒ヲ爲レ藥ト云云。天台承テ此論ヲ云ク譬ハ如ク良醫ノ能ク變レ毒ヲ爲レ藥ト乃至今經ノ得記ハ即是變レ毒ヲ爲レ藥ト故ニ論ニ云ク餘經ハ非ス祕密ト法華ヲ爲ス祕密ト也云云。止觀ニ云ク法華能ク治ス復稱爲レ妙ト云云。妙樂云ク難レ治シ能ク治ス所以ニ稱ス妙ト云云。大經ニ云ク爾時ニ王舍大城ノ阿闍世王其性弊惡乃至害シ父ヲ已テ心ニ生ス悔熱ヲ乃至心悔熱ス故ニ徧體生レ瘡ヲ其瘡臭穢不レ可ニ附近ス。爾時ニ其母字ク韋提希ト以テ種種ノ藥ヲ而モ爲ニ傅レ之ヲ其瘡遂ニ增無シ有ニ降損。王即白ス母ニ如キ是ノ瘡ハ者從リ心而生ス非ス四大起ル若言ハ衆生有ニ能治者一無レ有ニ是ノ處ニ云云。爾時ニ世尊大悲導師爲ニ阿闍世王ノ入ニ月愛三昧ニ入リ三昧ニ已テ放ツ大光明ヲ其光リ清涼往テ照ニ王ノ身ヲ身ノ瘡即愈ス

云云。平等大慧妙法蓮華経ノ第七ニ云ク此経ハ則為閻浮提ノ人ノ病之良薬若人有レ病ヲ得ハ聞ニ是ノ経ヲ病即消滅不老不死云云。已上引テ上ノ諸文ヲ惟勘ニ御病ヲ不レ出ニ六病ヲ其中ノ五病ハ且置レ之ヲ第六ノ業病最難レ治シ。將タ又業病ニ有リ軽キ有レ重キ多少不レ定。就中法華誹謗ノ業病最第一也。神農黄帝華佗扁鵲モ拱キ手ヲ持水流水耆婆維摩閉ツ口ヲ但限テ釈尊一仏ノ妙経ノ良薬ニ治スレ之ヲ。法華経ニ云ク如レ上ノ。大涅槃経ニ指ニ法華経ヲ云ク若有下毀ニ謗スルモ是ノ正法ヲ能自改悔シ還中帰スル於正法上乃至除ニ此正法ヲ更ニ無シ救護一是ノ故ニ應ニ當還ニ帰ス正法ニ云云。荆谿大師ノ云ク大経自指ニ法華ヲ為レ極ト云云。又云ク如ニ人ノ倒レテ地ニ還テ従レ地ニ起ツ故ニ以テ正ノ謗ヲ接ス於邪ノ墮ヲ云云。世親菩薩ハ本小乗ノ論師為レ止ニ五竺ノ大乗ヲ造ルニ五百部ノ小乗論ヲ。後ニ奉レ値ニ無著菩薩ニ忽ニ翻ニ邪見ヲ一時為レ滅ニ此罪ヲ向テ著ニ欲スレ切レ舌ヲ。著止云ク汝以ニ其舌ヲ讃ニ歎大乗ヲ。親忽造テ五百部ノ大乗論ヲ破ニ失ス小乗ヲ。又制ニ立一ノ願ヲ我レ一生ノ間小乗ヲ不レ置カ舌ノ上ニ然後罪滅生ス彌勒ノ天ニ。馬鳴菩薩ハ東印度ノ人列ニ付法蔵ノ第十三ニ。本為ニ外道ノ長一時ニ勒比丘ト論ニ内外ノ邪正ヲ其心言下ニ解テ為レ遮ニ重科ヲ擬スレ列ニ自頭ヲ所謂我敵ノ於我ニ墮ス獄。勒比丘諫ノ止云ク汝勿レ切レ頭ヲ以テ其頭口ヲ讃ニ歎大乗ヲ。鳴急ニ造テ起信論ヲ破ニ失外小ヲ月氏ノ大乗ノ初也。嘉祥寺ノ吉

蔵大師ハ漢土第一ノ名匠三論宗ノ元祖ナリ獨ニ歩シ吳會ニ慢幢最モ高シ。對ニ天台大師ニ諍ニ己今當ノ文ヲ立ニ處ニ翻ニ破シ邪執ヲ。為レ滅ニ謗人謗法ノ重罪ヲ相ニ語ラヒ百餘人ノ高徳ヲ屈ニ請シ智者大師ノ身ヲ為ニ肉橋ト頭ニ承ニ両足ヲ。七年之間採レ薪ヲ汲レ水ヲ廢シ講ヲ散シ衆ヲ為ニ倒ニ慢幢ヲ不レ誦セ法華経ヲ。大師ノ滅後往ニ詣シ隋帝ニ挍ニ攝シ雙足ヲ流ス涙ヲ告ケ別レ。観ニ見古鏡ヲ慎ニ辱ス自影ヲ欲レ滅ニ業病ヲ如レ上ノ懺悔ス。夫以一乗ノ妙経ハ三聖ノ金言已今當ノ明珠居ス諸経ノ頂ニ。経ニ云ク於ニ諸経ノ中ニ最モ在リ其上ニ又云ク法華最第一ト傳教大師ノ云ク仏立宗云云。予隨分勘ニ大文ノ會通ノ明文ヲ但見ニ畏ル智空法覚證等ノ曲會ニ。是ニ知釈尊大日ノ本意ハ限テ在リ法華ノ最上ニ也。而本朝眞言ノ元祖法覚證等ノ三大師入唐ノ時畏智空等ノ三三蔵ノ誑惑ニ相ニ承ス果全等ニ帰朝シ了。法華眞言弘通之時隱ニ三説超過ノ一乗ノ明月ヲ顕ニ眞言両界ノ螢火ヲ。剰罵ニ詈ス法華経ヲ曰ク戯論也無明ノ邊域也。自害ノ謬悞ニ曰ク大日経ハ戯論也無明ノ邊域也。本師既ニ曲ス末葉豈ニ直カラン乎源濁ル流レ不レ清ラ等是之レ謂フ歟。依テ之レ日本久ク為リ闇夜ト扶桑終ニ欲スレ枯ト佗國ノ霜ニ。抑モ貴邊ハ雖レ非ス嫡嫡末流ノ一分ニ將タ又檀那所従身ハ處ニ邪家ニ年久ク心ハ染ミテ邪師ニ月重ナル。設ヒ頽ル大山ノ設ヒ乾ル大海ハ此罪難レ消ヘ歟。雖レ然宿縁ノ所レ催ス又今生ニ慈悲ノ所レ薫存ノ外ニ値ニ

遇貧道ニ發ニ起改悔ヲ故ニ値ニ未來ノ苦ヲ現在ニ輕瘡出現歟。彼閻王ハ身瘡ハ五逆誹法ノ二罪ノ所レ招ク。佛人テ月愛三昧ニ照ニ其身ヲ惡瘡忽消（延）ニ三七日ノ短壽ヲ保ニ四十年ノ寶算ヲ。兼又屈ニ請千人ノ羅漢ヲ書ニ顯シ一代ノ金言ヲ流ニ布正像末ニ。此禪門ノ惡瘡ハ但謗法ノ一科所持ノ妙法ハ超ニ過ス月愛ニ豈ニ不下愈ニ輕瘡ヲ招ニ長壽ヲ上。此語無ハ徴シ發レ聲ヲ叫下喚上一切世間眼ハ大妄語ノ人一乘妙經ハ綺語ノ典ニ。惜レ名ヲ世尊驗ハシ顯ニ恐誓ヲ諸ノ賢聖來リ護上云フ爾カ。書ハ不レ盡レ言言ハ不レ盡レ心ヲ。事事期ニ見參ノ時ヲ。恐恐。

十一月三日　　日蓮花押

太田入道殿御返事

○兵衛志殿御返事　啓三六九〇　鈔二五七三　語五三五　音下四五　拾八三八　扶一五四四

かたがたのもの（物）ふ（夫）二人をもつてをくりたびて候。うの心ざし辨殿の御ふみに申ス げに候。さてはなによりも御ために第一の大事を申シ候なり。正法像法の時は世もいまだをとろへず聖人賢人もつづき生レ候き天も人をまほり給ヒきゥ末法になり候へば人のとんよく（貪欲）やうやくすぎ候て。主と臣と親と子と兄と弟と諍論ひまなし。まして佗人は申及ハず。これによりて天もうの瞋をすつれば。三災七難乃至一二三四五六七の日いでて。草木か（枯）れうせ小大河もつ（盡）き大地はすみ（炭）のごとくをこり大海はあぶら（油）のごとくになり。けつくは無間地獄より炎いでて止。梵天まで火炎充滿すべし。これていは（是程）の事いでんとてやうやく世間はをと（衰）へ候なり。皆人のをもひて候は父には子したがひ臣は君にかなひ弟子は師にぬ（逸）すべからずと云云。かしこき人もいやしき者もしれる事なり。しかれども貪欲瞋恚愚癡と申ス さけ（酒）にゑいて。主に敵し親をかろしめ師をあなづ（侮）るつねにみへて候。但師と主と親とに隨ひてわしき事ヲ諫（いさめ）ば孝養となる事は。さきの御ふみにかきつけて候しかばつねに御らむあるべし。ただこのたびゑもん（右衛門）の志（さくわん）ぞの（殿）かさねて親のかんだう（勘當）あり。とのの御前にこれにて申せしがごとく一定かんだうあるべし。ひやうへ（兵衛）の志（さくわん）殿をばつかなし。ごせん（御前）かまへて御心へあるべしと申シて候しなり。今度はとのは一定をち給ヒぬとをぼうるなり。をち給はんをいかにと申ス事はゆめゆめ候はず。但地獄にて日蓮ヲうちみ給ヲ事なかれ。しり候まじきなり。千年のかるかや（苅草）も一時にはひ（灰）

となる百年の功も一言にやぶれ候は法のことわりなり。さにもんの大夫殿は今度法華經のかたきになりさだまり給ふとみへて候。ねもんのたいうの志殿は今度法華經の行者になり候はんずらん。とのは現前の計なれば親につき給はんずらむ。ものぐるわ（物狂）しき人人はこれをほめ候べし。宗盛が親父入道の惡事に隨ひてしのわら（篠原）にて頸を切し。重盛が隨はずして先に死せしいづれか親の孝人なる。法華經のかたきになる親に隨ひて一乘の行者なる兄をすてば親の孝養となりなんや。せんするところひとすぢにをもひ切ッて兄と同しく佛道をなり（成）給へ。親父は妙莊嚴王のごとし兄弟は淨藏淨眼なるべし。昔と今はかわるとも法華經のことわりはたがうべからず。富時も武藏入道ありてばくの所領所從等をすてて遁世あり。まして（和殿）わどのばらがわづかの事をへつらひて心うすくて惡道に墮ちて日蓮うらみさせ給ふな。かへすがへす今度とのは墮べしとをぼうるなり。此程心ざしありつるが。ひきかへて惡道に墮ち給はん事がふびんなればなり。百に一ッ千に一ッも日蓮が義につかんとをぼさば親に向ッていね切り給へ。親なればいかにも順とまいらせ候べきが。法華經の御かたきになり給へばつきまいらせては不孝の身となりぬべく

候へばすてまいらせて兄につき候なり。兄をすてられ候わば兄と一同とをぼすべしと申し切り給へ。すこしもをろうる心なかれ。過去遠遠劫より法華經を信ぜしかども佛にならぬ事これなり。しを（潮）のひるとみつと月の出るとは夏と秋と冬と春とのさかひ（境）には必相違する事あり。凡夫の佛になる又かくのごとし。必三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり。此事はわざとも申し又びんぎにとをもひつるに御使とありがたし。墮ち給ならばよもこの御使とはあらじとをもひ候へばもしやと申すなり。佛になり候事は此の須彌山にはり（針）をたてて彼の須彌山よりいと（糸）をはなちて。うのいとのすぐにわたりてはりのあな（穴）に入るよりもかたし。いわうやさかさま（逆）に大風のふきむかへたらんはいよいよかたき事ぞかし。經に云く億億萬劫至ルヨリ不可議ニ時ニ乃シ得レ聞キ是ノ法華經ヲ。億億萬劫至ルヨリ不可議ニ諸佛世尊時ニ說キ是ノ經ヲ。是ノ故ニ行者於テ佛ノ滅後ニ聞テ如レ是ノ經ヲ勿レ生スルヲ疑惑ヲ等云云。此經文は法華經二十八品の中にことにめづらし。序品より法師品にいたるまで等覺已下ノ人天四衆八部其のかずありしかども。佛は但釋迦如來一佛なり重くてかろきへんもあり。寶塔品より囑累品にいたるまでの十二品は殊に重きが中の重

きなり。其故は釋迦佛の御前に多寶の寶塔涌現せり月の前に日の出たるがごとし。又十方の諸佛は樹下に御はしまます十方世界の草木の上に火をともせるがごとし。此御前にてせん（選）せられたる文なり。涅槃經に云く從リ昔無數無量劫ニ來常ニ受ク苦惱ヲ。一一ノ衆生一劫之中ニ所レ積ム身ノ骨ハ如ク王舍城ノ毗富羅山ノ。所レ飲ム乳汁ハ如ク四海ノ水ノ。父母兄弟妻子眷屬ノ命終ニ哭泣所レ出ス目淚ハ多ク四大海ノ。盡ク地ノ草木ヲ爲シ四寸ノ籌ト以テ數ヘ父母ヲ亦不レ能ザ盡ス云云。此經文ハ佛最後に雙林の本に臥てかたり給ひし御言なり。もつとも心をとどむべし。無量劫より已來生ところの父母は。十方世界の大地の草木を四寸に切りてあてかぞう（推算）ともたるべからずと申す經文なり。此等の父母にはあひ（値）しかども法華經にはいまだあわず。されば父母はまうけやすき（易儲）し法華經はあひがたし。今度あひやすき父母のことばをうむきて。あひがたき法華經のとも（友）にはなれずば。我身佛になるのみならずうむきしをや（親）をもみちびきなん。例せば悉達太子は淨飯王の嫡子なり。國をもゆづり位にもつけんとをぼしてすでに御位につけまいらせたりしを。御心をやぶりて夜中城をにげ出テさせ給ひしかば。不孝の者なりとうらみさせ給ひしかども。佛にならせ給ってはまづ淨飯王摩耶夫人をこうみちびかせ給ひしか。をや（親）というをやの世をすてて佛になれと申すをやは一人もなきなり。これはとにせかくによせてわどの（和殿）ばらを持齋念佛者等がつくりをとさんために。をやをすいめをとすなり。兩火房は百萬反の念佛をすゝめて人人の內をせき（塞）て法華經のたね（種）をたたんとはかるときくなり。極樂寺殿はいみじかりし人ぞかし。念佛者等にたぼらかされて日蓮を怨ませ給ひしかば。我身といわ其一門皆ほろびさせ給ふ。ただいまはへちご（越後）の守殿一人計なり。兩火房を御信用ある人はいみじきと御らむあるか。なごへ（名越）の一門の善覺寺長樂寺大佛殿立テさせ給ひて其一門のならせ給ふ事をみよ。又守殿は日本國の主にてをはするが。一閻浮提のそとくなるかたきをへ（得）させ給へり。わどの兄をすててあにがあとをゆづられたりとも。千萬年のさかへかたかるべし。しらず又わづかの程にやいかんがこのよ（此世）ならんずらん。よくよくをもひ切って一向に後世をたのまるべし。かう申すともいたづらのふみ（文）なるべしとをもへば。かくものう（懶）けれどものちのをもひでにしるし申すなり。恐恐謹言。

十一月二十日　　千三百三十（内三十九ノ二十八）

兵衛志殿御返事　　日蓮花押

明治三十五年五月廿八日京都妙覺寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ十六紙ニシテ六十八左終行（一三二八の六行）「多四」已下一行九字ヲ失セリ（稲田海素慶記）

○觀心本尊得意鈔　啓三六九四　鈔二五七五　語五三六　音下四六　拾八三六　扶一五四五

鶯目ニ貫文厚絲ノ白小袖一ヲ筆十管墨五丁給畢。

身延山ハ如ク知食ル冬ハ嵐はげしくふり積ル雪は不レ消ヘ。極寒の處にて候間晝夜ノ行法もはだ、ゐうすにては難レ堪ヘ辛苦にて候ヘ。此小袖を著テは不レ可レ有レ思ヒ候也。商那和修は付法藏の第三ノ聖人也。此因位を佛說テ云ク乃往過去ニ病ノ比丘ヒに與レ衣ヲ故に生生世世ヒに不思議自在の衣ヲ得たり。今御小袖は似レ彼ニ。此功德は自運は不レ可レ知レ之ヲ併奉レ任ニ釋迦佛ニ畢。抑モ今ノ御狀ニ云ク敎信ノ御房觀心本尊鈔ノ未得等ノ付テ文字ニ迹門をよまじ（不讀）と疑心の候なる事不相傳の僻見にて候歟。去文永年中ヒに此書の相傳は整足して貴邊ヒに奉リ候しが。其通リを以テ可レ有ニ御敎訓ニ候。所詮在在處處ヒに迹門を捨テよと書キて候事は今我等が讀ム所の迹門にては候はず。叡山天台宗の過時の迹を破シ候也。設ヒ如ク天台傳敎ノ法のまゝありとも今至ニ末法ニ者去年の曆ノ如シ。何ニ況自リ慈覺ニ已來迷ニ大小權實ニ大謗法ニ同をや。然ル間像法ノ時の利益モ無レ之レ增テ於ニ末法ニ耶。

一北方の能化難云ク爾前の經をば未顯眞實と乍ラ捨テ安國論には爾前ノ經を引キ文證とする事自語相違ヒに不審ノ事前前申せし如し。總じて一代聖敎を大ヒに分ツて爲レ二ト一大綱ニ綱目也。初の大綱者成佛得道の敎也成佛ノ敎者法華經也。次ニ綱目者法華已前ノ諸經也彼諸經等は不成佛ノ敎也。成佛得道ノ文言雖レ說レ之ヲ但有ニ名字ニ其實義ハ法華ニ有リ之レ。傳敎大師ノ決權實論ニ云ク權智ノ所作ハ唯有レ名無レ有ニ實義ニ云云。但於ニ權敎ニ成佛得道の外ハ說相不レ可レ空爲ニ法華ノ綱目なるが故ヒに。所詮成佛ノ大綱を法華ヒに說キ之ヲ其餘の綱目は衆典ニ明。爲ニ法華ノ綱目なるが故ヒに法華の證文ニ引キ之ヲ可レ用ユ也。其上法華經にて可レ有ニ實義ニ爾前の經ヒして名字計りのゝしる事全ク爲ニ法華ノ也。然ル間尤モ法華の證文となるべし。問フ法華を大綱とする證如何。答フ天台ハ當ニ知ル此經ハ唯論ノ如來說敎ノ大綱ニ不レ委ニ細綱目ヲ也ト。問フ爾前を綱目とする證如何。答フ妙樂ノ云ク皮膚毛絲出ニ在衆典ニ云云。問フ成佛ハ限ニ法華ニ云フ證如何。答フ經ニ云ク唯有テ一乘ノ法ノ無ク

二モ亦無シ二モ文。問フ爾前ハ爲ニ法華ノ證如何。答フ經ニ云ク雖レ示ニ種種ノ道ヲ爲ニ佛乘ノ。委細雖ニ申シ度候ト心地違例して候程ニ令ニ省略ヲ候。恐恐謹言。

十二月二十三日　　日蓮花押

富木殿御返事

帥殿ノ物語りしは下總に目連樹と云フ木の候よし申シ候し。其木の根をほりて十兩ばかり。兩方の切目には燒金を宛てて紙にあつ（厚）くつゝみて風ひかぬ樣にこしら（拵）へて。大夫次郎が便宜に給候べきよし御傳へあるべく候。

明治三十五年八月一日佐渡阿佛妙宣寺ニ於テ世尊寺主持參ノ得意抄ヲモツテ對校ス又末紙ノ端書ナシ今ハ平賀本ニ依テ存ス猶ホ彼抄ニハ宛名ナクシテ觀心本尊得意抄トアリサレドモ今ハ平賀本等ニ依ル委細ハ日誌ニ在リ（稻田海素慶記）

高祖遺文錄卷之二十

○上野殿母尼御前御返事

母尼ごぜんには。ことに法華經の御信心のふかくましまし候なる事。悅ヒ候と申させ給候へ。

止觀第五之事。正月一日辰ノ時此をよみ（讀）はじめ候。明年は世間忽忽なるべきよし皆人申スあひだ。一向後生のために十五日まで止觀を談ずし候が。文あまた候はず候御計候べきか。白米一斗御志申シつくしがたう候。鎌倉は世間かつ（渴）して候。僧はあまたをはします過去の餓鬼道ノ苦をばつくの（償）わせ候ひぬるか。

法門の事日本國に人ごとに信せさせんと願して候しが。願や成熟せんとし候らん。當時は蒙古の勘文によりて世間やわらぎて候なり子細ありぬと見へ候。本より信シたる人人はことに悅ッげに候か。恐恐。

十二月二十二日　　日蓮花押

上野殿母尼御前御返事

明治三十五年六月十七日紀州上野家ニ到テ拜シタルハ御寫ニシテ御眞蹟ハ肥后熊本本妙寺ニ在リ今其臨寫セシモノヲ得テ的斷ス但シ彼此ノ文字ニ於テ少異ダモナシ又御眞蹟ハ二紙廿一行ト端書ナリ（稻田海素處記）

右臨寫本とは明治三十五年二月時の寺主金崎惠厚模寫して遙に送くられたるもの也（文雅追記）

⊙強仁狀御返事

啓三三三七　鈔二〇五六　語四三一　拾六五〇　扶一二四八

強仁上人十月二十五日ノ御勘狀同十二月二十六日ニ到來ス。此事余モ年來所ニ鬱訴ス也忽書テ返狀ヲ欲ス釋ニ自佗ノ疑氷ヲ。但シ歎ハ於テ田舍ニ決セハ於邪正ノ者暗中服レ錦ヲ遊行シ澗底ノ長松不レ知レ匠ニ歟。兼テ又定喧嘩出來ノ基也。貴坊欲レ遂ニ本意ヲ者公家ト與ニ關東ト經テ于奏聞ヲ申シ下露默ヲ（點）糾ニ明是非ヲ。上ミ一人含レ咲ヲ下モ萬民散レ疑ヲ歟。其上大覺世尊ハ以テ佛法ヲ付ニ囑王臣ニ決ニ斷世出世ノ邪正ヲ必公場也。就レ中當時我朝ノ爲レ體盛ニ於ニ難ヲ所謂自界叛逆難ト佗國侵逼難ト也。以テ此大難ヲ引キ向ヘテ大藏經ニ見レ之ヲ定國家ト佛法中ニ有ニ大禍ニ歟。仍テ予驚テ正嘉文永二箇年ノ大地震ト大長星ニ開キ見ニ切經ヲ。此國ノ中ニ可レ有ニ前代未起ノ二難ニ所謂自佗叛逼ノ兩難也。是併眞言禪門念佛持齋等以テ權小ノ邪法ヲ滅ニ失法華眞實ノ正法ヲ故ニ所ニ招キ出ス大災也。只今自ニ佗國ニ可レ逼ニ我國ヲ由兼テ知レ之。故ニ捨ニ棄身命ヲ佛神ノ實前ニ不レ恐ニ刀劍武家ノ責ヲ一書ハ奏ニ國主ニ夜ハ語ニ弟子等ニ。雖レ然眞言禪門念佛者律僧等構ヘ種種ノ狂言ヲ企ニ重重ノ讒訴ヲ故ニ不レ被レ叙ニ用セ之ヲ間。於テ處處ニ被レ加ヘ刀杖ヲ兩度蒙ル御勘氣ヲ剩ヘ擬ス刎レ頭ヲ是ノ事也。夫以月支漢土ノ佛法ノ邪正ハ且置ク之ヲ。大日本國可キ爲ル亡國ト由來勘レ之ヲ。眞言宗之元祖東寺ノ弘法天台山第三ノ座主慈覺。此兩大師法華經ト與ニ大日經ト迷ニ惑シ勝劣ニ。日本第一ノ聖人隱ニ沒ス傳教大師ノ正義ヲ已來。叡山諸寺ハ付ニ慈覺ノ邪義ニ神護七大寺ハ隨フ弘法ノ僻見ニ。自リ其レ已來王臣仰ニ邪師ヲ萬民歸ス僻見ニ如キ是ノ諂曲既ニ久ク經ニ歷シ四百餘年ヲ國漸ク衰ヘ王法モ亦爲レ盡。彼月支ノ弗沙彌多羅王ノ焚ニ燒シ八萬四千ノ寺塔ヲ刎ニ無量佛子之頸ヲ。此漢土ノ會昌天子ノ滅ニ失シ寺塔四千六百餘所ヲ令レ還ニ俗セ九國ノ僧尼ヲ。此等雖レ爲ニ大惡人ニ不レ過ニ我朝ノ大謗法ニ。故ニ青天ハ瞋レ眼ヲ睨ミ我國ヲ黃地ハ含レ憤ヲ動ス發ス天孽ヲ。國主非ニ世ノ禍ニ不レ知レ之ヲ諸臣非ニ儒家ニ事不レ勘ヘ之ヲ。剩ヘ爲ニ消ス此災天ヲ竭ニ湯ヲ仰シ眞言師ヲ爲ニ卻ス大難ヲ供ニ養ス持齋等ヲ。譬如ク火ニ加ヘ薪ヲ氷ニ增レ水ヲ法ハ者彌ヽ貴大難ハ者益ス來ル只今此國爲ニ滅亡ヲ。予粗先ヲ勘ニ此子細ヲ之間捨ニ棄シ身命ヲ爲レ報ニ國恩ヲ。而愚人之習ヒ尊レ遠蔑ル近歟將又信ニ多人ヲ捨ニ一人ヲ歟故ニ終ニ空送ル年月ヲ。今幸ヒ強仁上人以テ御勘狀ヲ曉ニ喻ス日蓮ヲ可レ然

者此ノ次奉テ驚ニ天聽ヲ決。誠ニ又御勘文ノ爲レ體以テ非ヲ爲ス先ト。若上人默止空ク過ニ一生ヲ定師檀共ニ招ニ泥梨ノ大苦ヲ。以ニ一期ノ大慢ヲ勿レ殖ニ永劫ノ迷因ヲ。速速經ニ天奏ヲ疾疾遂ニ對面ヲ翻ニ邪見ヲ給ヘ。書ハ不レ盡レ言ヲ言ハ不レ盡レ心ヲ悉悉期ス公場ヲ。恐恐謹言。

十二月廿六日　　日蓮花押

强仁上人座下

明治三十五年五月二十三日京都妙顯寺ニ於テ御眞蹟ヲモテ拜照シ奉ル但シ此書ハ九紙ナリ（稻田海素慶記）

○聖人知三世事　啓三二〇三　鈔二〇三六　語四二三　拾六三六　扶一二二八

聖人と申スは委細ニ知ニ三世ヲ云フ聖人ト。儒家ノ三皇五帝並ニ三聖ハ但知ニ現在ヲ不レ知ニ過未ヲ。外道ハ知ニ過去八萬一分ノ聖人也。小乘ノ二乘ハ過去未來ノ知ニ因果ヲ勝ニ於外道ニ聖人也。小乘ノ菩薩ハ過去三僧祇劫通教ノ菩薩ハ過去ニ經ニ歷動喩塵劫ヲ別教ノ菩薩ハ一一ノ位ノ中ニ多俱低劫知ニ過去ヲ。法華經ノ迹門ハ過去ノ演ニ說ス三千塵點劫ヲ一代超過是也。本門ハ五百塵點劫過去遠遠劫演ニ說シ之ヲ又宣ニ傳ス未來無數劫ノ事ヲ。依テ之ニ案レ之ヲ委ク知ニ過未ヲ聖人ノ本也。教主釋尊ハ既ニ近去後三月ノ涅槃知レ之ヲ遠後五百歲廣宣流布無疑者歟。若爾者以テ近推レ遠以テ現ヲ知レ當ヲ如是相乃至本末究竟等是也。後五百歲以テ誰人ヲ法華經ノ行者ト可レ知レ之ヲ。予ハ未タ信セ我智慧ヲ雖レ然自佗ノ返逆侵逼以テ之ヲ信ス我智ヲ敢テ非ス爲ニ佗人ノ。又我弟子等存ニ知之ヲ。日蓮ハ是法華經ノ行者也紹ニ繼不輕ノ跡ヲ之故ニ。輕毀人ハ頭破ニ七分ニ信者ハ福ヲ積ニ安明ニ。問テ云ク何ソ毀レ汝ヲ人無ニ頭破七分ニ耶。答テ云ク古昔ノ聖人ハ除テ佛ヲ已外毀レ之ヲ人頭破但タ一人二人也。今毀ニ背日蓮ヲ事ハ但不レ可レ限ニ一人二人ニ日本一國一同ニ同ク破ル也。所謂正嘉ノ大地震文永ノ長星ハ誰カ故ソ。日蓮ハ一閻浮提第一ノ聖人也上ミ自リ一人ニ下モ至ニ于萬民ニ輕ニ毀之ヲ加ニ刀杖ヲ處ニ流罪ニ故ニ。梵ト與レ釋日月四天ト仰ニ付鄰國ニ逼ニ責之ヲ也。大集經ニ云ク仁王經ニ云ク涅槃經ニ云ク法華經ニ云ク。設ニ作ニ萬祈ヲ不レ用ニ日蓮ヲ必此國今ノ如ニ壹岐對馬ノ我カ弟子仰テ見レ之ヲ。此偏ニ日蓮カ非ニ尊貴ニ法華經ノ御力ノ依ニ殊勝ニ也。擧レ身ヲ想レ慢下レ身ヲ蔑レ經ヲ。松高藤長ク源深流レ遠シ。幸ヒ哉樂ヒ哉於テ穢土ニ受ニ喜樂ヲ但日蓮一人而已。

明治三十五年三月二十八日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書今ハ五丁五十

二行ヲ存スレトモ能ク覩レハ末ノ第六紙ハ古來紛失セルガ如シ（稻田海素處記）

○瑞相御書　微上一八　考三二九

夫レ大變は衆人のねぞろか（駭）し地天は諸人をうご（動）かす。佛法華經をとかんとし給フ時五瑞六瑞をげん（現）じ給フ。其中に地動瑞と申スは大地六種に震動す。六種と申スは天台大師文句の三ニ釋ノ云ク東涌西沒者。東方ハ青主レ肝ヲ肝ハ主レ眼ヲ西方ハ白主レ肺ヲ肺ハ主レ鼻ヲ此レ表ニ眼根ノ功德生鼻根ノ煩惱互ニ滅ス。鼻根ノ功德生眼ノ中ノ煩惱互ニ滅ス。餘方ノ涌沒ノ表ニ餘根ノ生滅ニ亦復云云。妙樂大師承テ之ヲ云ク言ニ表根ニ者眼鼻已ニ表ニ於東西ニ。耳舌理對ニ於南北ニ中央ハ心也四方ハ身也身具ニ四根ヲ心徧ク緣ス四ヲ故ニ以テ心ヲ對ノ身ニ而爲ニ涌沒ヲ云云。夫十方は依報なり衆生は正報なり。依報は影のごとし正報は體のごとし身なくば影なし正報なくば依報なし。又正報をば依報をもて此をつく（作）る。眼根をば東方をもつてこれをつくる。舌ハ南方鼻ハ西方耳は北方身ハ四方心ハ中央等これをもつてしんぬべし。かるがゆへに衆生の五根やぶ（破）れんとせば四方中央をどろう（駭動）べし。されば國土やぶれんとするしるし（兆）にはまづ山くづ（崩）れ草木か（枯）れ江河つく（竭）るしるしあり。人の眼耳等驚ろう（躁）すれば天變あり人の心をうごかせば地動す。抑何の經經にか六種動これなき。一切經を佛とかせ給ヒしにみなこれあり。しかれども佛法華經をとかせ給はんとて六種震動ありしかば。衆もことにをどろき彌勒菩薩も疑ヒ文殊師利菩薩もこたへしは。諸經よりも瑞も大に久クありしかば疑も大に決しがたかりしなり。故ニ妙樂ノ云ク何レノ大乘經ニカ不ニ集衆放光雨花動地ニ但シ無シ生ニ於大疑ヲ等云云。此釋の心はいかなる經經にも序は候へども此レほど大なるはなしとなり。されば天台大師ノ云ク世人以テ蜘蛛掛レバ則喜ビ來リ。鴉鵲鳴則行人至ルト小尚有レ徵ス大焉無レ瑞以テ近キヲ表レ遠等云云。夫一代四十餘年が間なかりし大瑞を現じて法華經の迹門をとかせ給ヒぬ。其上本門と申スは又爾前の經經の瑞に迹門を對するよりも大なる大瑞なり。大寶塔の地よりをどりいでし地涌千界大地よりならび出テし大震動は。大風の大海を吹クがごとくなる大波の。あし（蘆）のは（葉）のごとくなる小船ノをひは（追帆）につくがごとくなりしなり。されば序品の瑞をば彌勒ハ文殊に問ヒ涌出品の大瑞をば慈氏は佛に問ヒたてまつる。これを妙樂釋シテ云ク迹事ハ淺近可シ寄ス文殊ニ本地ハ難シ裁ス故ニ唯託スレ佛ニ云云。迹門のことは佛け

說給はざりしかども文殊ほぼこれをしれり。本門の事は妙德すこしもはからず。此大瑞は在世の事にて候。佛神力品にいたて十神力を現ず此は又さきの二瑞にはにるべくもなき神力也。序品の放光は東方萬八千土神力品の大放光は十方世界。序品の地動は但三千界 神力品の大地動は諸佛ノ世界 地皆六種ニ震動ス。此の瑞も又又かくのごとし。此神力品の大瑞は佛ノ滅後正像二千年すぎて末法に入ッて法華經の肝要のひろまらせ給ッべき大瑞なり。經文ニ云ク以ニ佛滅度ノ後ニ能持ニ是ノ經ヲ故ニ諸佛皆歡喜現ニ無量ノ神力ヲ等云云。又云ク惡世末法ノ時等云云。疑テ云ク夫瑞は吉凶につけて或は一時二時或は一日二日或ハ一年二年或ハ七年十二年か。如何二千餘年已後の瑞あるべきや。答テ云ク周ノ昭王の瑞は一千十五年に始メてあい(合)り訖利季王の夢は二萬二千年に始メてあいぬ。豈ニ二千餘年の事の前にあらは(現)るるを疑ッべきや。問テ云ク在世よりも滅後の瑞大なる如何。答テ云ク大地の動ずる事は人の六根の動ずによる。人の六根の動きの大小によて大地の六種も高下あり。爾前の經經には一切衆生煩惱をやぶるやうなれども實にはやぶらず。今法華經は元品の無明をやぶるゆへに大動あり。末代は又在世よりも惡人多多なり。かるがゆへに在世の瑞にもすぐれてあるべきよしを示現し給フ。疑テ云ク證文如何答テ云ク而此經ハ者如來ノ現在猶多ニ怨嫉一況ヤ滅度ノ後等云云。去正嘉文永の大地震大天變は天神七代地神五代はさてをきぬ。人王九十代三千餘年が間日本國にいまだなき天變地天なり。人の悅ヒ多多なれば天に吉瑞をあらはし地に帝釋の動あり。人の惡心盛なれば天に凶變地に凶天出來す。瞋恚の大小に隨ヒて天變の大小あり地天モ又かくのごとし。今日本國上ヽ一人より下モ萬民にいたるまで大惡心の衆生充滿せり。此惡心の根本は日蓮によりて起れるところなり。守護國界經と申ス經あり法華以後の經なり。阿闍世王佛にまいりて云ク我國に大旱魃大風大水飢饉疫病年年に起る上佗國より我國をせ(攻)む。而佛の出現し給ふる國なりいかんと問ヒまいらせ候しかば。佛答テ云ク善キ哉善キ哉大王能此問をなせり。汝には多クの逆罪あり其中に父を殺シ提婆を師として我を害せしむ。この二罪大なる故かゝる大難來かくのごとく無量なり。其中ニ我滅後に末法に入ッて提婆がやうなる僧國中に充滿せば正法の僧一人あるべし。彼惡僧等正法の人を流罪死罪に行ヒて王の后乃至萬民の女を犯シて。謗法者ノ種子ノ國に充滿せば國中に種種の大難をこり後には佗國にせめらるべしとときかれて候。今の世ノ念

佛者かくのごとく候上眞言師等が大慢　提婆達多に百千萬億倍すぎて候。眞言宗の不思議あらあら申べし。胎藏界の八葉の九尊を畫にかきて。其の上にのぼりて諸佛の御面をふ(踏)みて灌頂と申す事を行なり。父母の面をふみ天子の頂をふむがごとくなる者國中に充滿して上下の師となれり。いかでか國ほろびざるべき。此事余が一大事の法門なり又又申すべし。さき(前)にすこしかきて候。いた(甚)う人にはぢせ(恥)ある べからず。びん(便)ごとの心ざし一度二度ならねばいかにとも。

（明治三十六年四月十六日延山錄外ノ寫本ノ御眞蹟ト直照セシ校本ニテ校正ス案スルニ此書本ヨリ末闕ケタルカ如シ（稻田海素記）

○善無畏鈔　啓三三三八　鈔二〇五六　語四三二　拾六五一　扶一二四八

善無畏三藏は月氏烏萇奈國ノ佛種王乃太子也。七歲に之天即位十三に之天國を兄に讓リ出家遁世シ。五天竺に於修行志天五乘乃道を極メ三學を兼テ給ヒ幾。達摩掬多に申ス聖人に値ヒ奉リ天眞言乃諸印契一時に頓受志即日に御灌頂人天乃師に定給ヒ幾。雞足山に入天者迦葉尊者能髮を剃テ王城に祈リ雨を給之加者觀音日輪乃中與利出テ以水瓶ヲ灌ギ水ヲ。北天竺ノ金粟王乃塔能下に之天佛法を祈請世之加者。文殊師利菩薩大日經乃胎藏乃曼荼羅を現ハシ天授ケ給フ。其後開元四年丙辰に漢土に渡ル玄宗皇帝尊ミ之ヲ如ニ日月ノ。又大旱魃あり皇帝勅宣を下ス三藏一鉢に水を入レ暫く加持シ給ヒ之に。水乃中に指許乃物有利變シ天龍土成ル其色赤色也。白氣立チ昇リ鉢世利龍出テ天虛空に昇リ忽に雨を降。如ク此い みじき人なれども一時に頓死有リ幾。蘇生天語テ云ク我死津流時獄卒來リ天鐵ノ繩七筋付ケ鐵ノ杖を以天散散にさいなみ閻魔宮に到リ に幾。八萬聖教一字一句毛不レ覺ェ唯法華經乃題名許リ不レ忘レ。題名を思に鐵ノ繩少シ幾許怒息續天高聲に唱ヘ云ク。今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護等云云。七ツ乃鐵ノ繩切レ碎ケ十方に散ス閻魔冠を傾ケ天南庭に下リ向ヒ給幾。今度は命を不レ盡キ土天被レ歸サ也土語リ給幾。今日蓮不審云ク善無畏三藏ハ先生に十善乃戒力五百乃佛陀に仕（太利）。今生に者難レ捨テ王位を つばさ（唾）を捨ル加如ク捨テ之ヲ幼少十三にして出家シ給ヒ。月支國を廻リ天諸宗を習ヒ極ム天乃感を蒙フ利化道乃心深クして震旦國に渡リ天眞言乃大法を弘ム太利。一印一眞言を結ヒ誦すれば過去現在乃無量乃罪滅シ奴覽。何乃科に依天閻魔乃責を者蒙リ給ヒ介流哉覽不審無シ極リ。善無畏三藏眞言乃力を以天閻魔乃責を

不レ脱レ者天竺震旦日本等乃諸國乃眞言師地獄乃苦於可レ脱ル乎。委細に此事於勘へたるに此三藏は世間乃輕罪ハ身ニ不レ御セ諸宗並眞言乃力仁天滅シ奴寛。此責ハ別乃故無志法華經謗誹乃罪也。大日經乃義釋於見ル仁此經ハ是法王ノ祕寶不妄示ニ卑賤之人ニ。如下釋迦出世ノ四十餘年ニ因テ舍利弗慇懃ノ三請ニ方ニ爲ニ略説中妙法蓮華ノ義ヲ上。今此本地之身又是妙法蓮華最深祕處故ニ壽量品ニ云ク常ニ在リ靈鷲山及餘ノ諸ノ住處ニ乃至我淨土ハ不レ毀レ而衆ハ見ル燒キ盡ト。即此宗瑜伽之意耳。又因ニ補處ノ菩薩ノ慇懃三請ニ方ニ爲ニ説レ之ヲ等云云。此釋ノ心は大日經に本迹二門開三顯一開近顯遠乃法門有利。法華經乃本迹二門乃如之。此法門は法華經に同シけれども此大日經に印と眞言と相加和利天三密相應世利。法華經は但意密許仁天身口乃二密闕たれば。法華經をば略説と云ひ大日經をば廣説と可レ申ス也と被レ書カたり。此法門第一乃悞リ有利。又義釋ニ云ク此經横ニ統フ一切ノ佛教ヲ等云云。大日經は當分隨佗意之經也悞リ天隨自意跨節之經ト思江里。かたがた悞りたるを實義と思食故に閻魔乃責於者蒙リ太利之加。智者仁天御座せし故に此謗法於悔と還天法華經に翻之故に此責於被レ免カ歟。天台大師釋云ク法華ハ總ニ括ス衆經ヲ乃至輕慢不レ止マ舌爛ル口中ニ等云云。妙樂大師云ク已今當ノ妙於テ此ニ罔ク迷舌爛不レ止マ猶爲ス華報ト謗法之罪苦流ル長劫ニ等云云。天台妙樂の心は法華經仁勝レ太流經有利ト云はむ人ハ者無間地獄に可レ墮ツ土被レ書カ。善無畏三藏は法華經ト與ニ大日經ハ理は同けれども事乃印眞言は勝レたりと書れたり。然に二人ノ中に一人者必惡道仁可レ墮ツをぼふる處に。天台の釋は經文に分明也善無畏乃釋者經文に其證據不レ見ヘ。其上閻魔王乃責乃時我内證ノ肝心ト思食す大日經等の三部經の内の文を不レ誦セ。法華經の文を誦して此責を免レ奴。無久疑と法華經に眞言勝ルと思フ悞リを翻シたる也。其上善無畏三藏乃御弟子不空三藏乃法華經乃儀軌には。大日經金剛頂經の兩部ノ大日を大日と定メ天兩部ノ大日をば左右の臣下乃如久せり。傳教大師ハ延曆二十三年乃御入唐靈感寺の順曉和尚に眞言三部乃祕法於傳。佛瀧寺乃行滿座主に天台止觀乃寶珠於請け取り顯密二道の奥旨を極め給ヒたる人。華嚴三論法相律宗乃人人乃自宗我慢の邊執を倒して。天台大師に歸入せる由を書せ給ヒ天候依憑集守護章秀句なむど申ス書乃中に。善無畏金剛智不空等は天台宗に歸入して智者大師を本師ト仰ク由のせ(載)られたり。各各思ひらく宗を立つる法は自宗をほめて佗宗を嫌フは常乃習也と思ひ

り。法然なむどは又此例を引天曇鸞ノ難易道綽ノ聖道淨土善導加正雜二行乃名目於引キ天。天台眞言等の大法於念佛乃方便と成せり。此等は牛跡に大海を入レ縣乃額於州に打ッ者也。世間の法には下剋上背上向下ハ國土亡亂乃因緣也。佛法には權小乃經經於本として實經於あなづる。大謗法の因緣也可シ恐ル可シ恐ル。嘉祥寺乃吉藏大師は三論宗の元祖或時は一代聖教於五時に分ケ或時は二藏と判せり。雖レ然龍樹菩薩ノ造ノ百論中論十二門論大論を尊天般若經を依憑と定ノ給ヒ。天台大師を邊執して過キ給ヒ之程に智者大師の梵網等乃疏於見天。少シ心とけ(解)やうやう近天法門於聽聞せし程に。結句は一百餘人ノ弟子を捨テ般若經並に法華經をも不レ講セ七年ニ至天天台大師に仕ヘさせ給ヒ幾。高僧傳仁者衆ヲ散シ身於肉橋と成すと書れたり。天台大師高坐に登リ給ヒ寄天肩於足仁備ヘ路於行キ給ヒ負奉リ給天堀於越ヱ給幾。吉藏大師程乃人だにも謗法於恐レ天加久古曾仕ヱ給ヒしか。然ルを眞言三論法相等乃宗宗乃人人今末末仁成リ天邊執せさせ給うは自業自得果なるべし。今乃世仁淨土宗禪宗なんど申ス宗宗者天台宗仁をとされし眞言華嚴等仁不レ可レ及フ。依經既に楞伽經觀經等也此等乃經經は佛乃出世乃本意にも非ず一時一會の小經也一代聖教於判仁不レ及ハ。而彼經經於依經として一代乃聖教於聖道淨土難行易行雜行正行仁分ケ教外別傳なむどのゝしる。譬ば民加王於しゐたげ小河乃大海於納加如し。加加留謗法乃人師共於信シ天後生於願フ人人は無間地獄可レ脫ル乎。然者當世乃愚者は佛には釋迦牟尼佛於本尊と定ノぬれば自然仁不孝乃罪脫がれ。法華經於信シぬれば不慮に謗法の科於脫たり。其上女人は五障三從ニ申シ天世間出世に嫌ハレ一代の聖教に被レ捨テ畢。唯法華經計リ仁古曾龍女加成レ佛ニ。諸ノ尼乃記莂はさづけられて候ぬれば。一切乃女人は此經於捨テさせ給ヒては何乃經をか持タせ給フべき。天台大師ハ者震旦國ノ人佛滅後一千五百餘年仁佛乃御使ヒとして世に出テさせ給幾。法華經に三十卷乃文於注シ給ヒ文句と申ス文乃第七ノ卷には佗經但記レ男ニ不レ記セ女ニ等云云。男子も餘經にては佛に不レ成ラ。ども且與ヘ天其をば許シてむ。於ニ女人ニ者一向於ニ諸經ニ者不レ可レ成ルと雖モ爲レ許法華經に嫌なば何乃憑加可レ有ル乎。教主釋尊我カ諸經四十餘年經經於未顯眞實と悔返。涅槃經等をば當說と嫌ヒ給ヒ無量義經をば今說と定ノ置キ。三說仁秀テ太流法華經仁正直ニ捨テ方便ヲ但說ク無上道ヲ。世尊ノ法ハ久ノ後要當ニ說ク眞實ヲ釋尊宣ヘ給しかば。寶淨世界乃多寶佛は大地より出テさせ給ヒ

天眞實なる由乃證明を加江。十方分身の諸佛廣長舌於梵天仁付ゞ給フ。十方世界微塵數乃諸佛乃舌相は不妄語戒乃力仁酬天八葉乃赤蓮華仁生出させ給ヒ幾。一佛二佛三佛乃至十佛百佛千萬億佛ゝ。四百萬億那由佗乃世界に充滿せる佛乃御舌を以天定ノ置キ給ひる女人成佛乃義也。謗法無久之天此經於持ッ女人は十方虛空仁モ滿せる慳貪嫉妬嗔恚十惡五逆なりとも。草木乃露乃大風仁あひるなる可シ二冬乃冰乃夏乃日仁滅加如之。但難キ滅シ者は法華經謗法乃罪也。譬ば三千大千世界乃草木於薪と爲スとも須彌山は一分も難シ損シ。縱令ヒ七日出ッ天百千日照スとも大海乃中をばかわか(涸)しがたし。設八萬聖教を讀ミ大地微塵能塔婆を立テ大小乘乃戒行を盡シ。十方世界能衆生於一子乃如久仁爲すとも法華經謗法能罪はさゆべからず。我等過去現在未來乃三世乃間仁佛仁不ン成ラ六道乃苦於受るは偏に法華經誹謗能罪なるべし。女人と生レ天百惡身仁備ふるも根本此經誹謗能罪より起れり。然者此經仁値ヒ奉らむ女人は皮於はいで紙ニ爲志血於切リ天墨と爲し骨於折リ天筆ニ爲志。血乃涙於硯ノ水ニ爲志天雖レ奉レ書キ不レ可レ有ニ飽ク期。何ニ況衣服金銀牛馬田畠等乃布施於以天供養せむはもののかずにてかずならず。

明治三十五年六月二十三日京都本國寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ御書ハ十六丁百五十三行ナレトモ末文ハ闕失セリ又裏書モアレトモ裏打ノタメニ見ヘス（稻田海素慶記）

○神國王御書　微上一八　考三三二

夫以日本國を亦ハ云ヒ水穗ノ國ト亦野馬臺又秋津嶋又扶桑等ト云云。六十六ヶ國二嶋已上六十八ヶ國東西三千餘里南北は不定也。此國に五畿七道あり五畿と申スは山城大和河內和泉攝津等也。七道と申スハ東海道十五箇國東山道八箇國北陸道七箇國山陰道八ヶ國山陽道八ヶ國南海道六ヶ國西海道十一ヶ國。亦云ヒ鎭西ト又太宰府ト云云。已上此レは國也。國主をたづぬれば神世十二代ハ天神七代地神五代。天神七代ノ第一ハ者國常立尊乃至第七ハ伊奘諾ノ尊男也伊奘冊ノ尊妻也。地神五代の第一は天照太神伊勢太神宮日ノ神是也いざなぎいざなみの御女也。乃至第五は彦波瀲武鸕鷀草葺不合ノ尊。此の神は第四のひこ波(彦火火出見尊)の御子也母は龍ノ女也。已上地神五代。已上十二代は神世也八王は大體百代なるべきか。其第一の王は神武天皇此レはひこなぎさ(彦波瀲)の御子也。乃至第十四は仲哀天皇八幡御父也第十五は神功皇后八幡御母也。第十六は應

神天皇仲哀ト神功ノ御子今の八幡大菩薩也。乃至第二十九代は宣化天皇也。此時までは月支漢土には佛法ありしかども日本國にはいまだわたらず。第三十代は欽明天皇此の皇は第二十七代の繼體の御敵(嫡)子也治三十二年。此の皇の治十三年壬申十月十三日辛酉百濟國の聖明皇金銅の釋迦佛を渡し奉る。今日本國の上下萬人一同に阿彌陀佛と申ス此レ也。其表ノ文ニ云ク臣聞ク萬法之中佛法最善シ世間之道佛法最上ナリ天皇陛下亦應シ修行アル。故ニ敬テ捧テ佛像經敎法師ヲ附レン使ニ貢獻ス宜ク信行アル者ヲ上キ。然といへども欽明敏達用明の三代三十餘年は崇給フ事なし。其間の事さまざまなりといへども其時の天變地夭は今の代にこりにて候へども。今は亦其の代にはにるべくもなき變天也。第三十三代崇峻天皇の御宇より佛法我朝に崇ばれて。第三十四代推古天皇の御宇に盛にひろまりぬ。此時三論宗と成實宗と申ス宗始テ渡リて候き。此三論宗は月氏にても漢土にても日本にても大小乘宗の始なり故に宗の母とも宗の父とも申ス。人王三十六代皇極天皇の御宇に禪宗わたる。人王四十代天武ノ御宇に法相宗わたる。人王四十四代元正天皇の御宇に大日經わたる。人王四十五代に聖武天皇ノ御宇に華嚴宗を弘通せさせ給フ。人王四十六代孝謙天皇ノ御宇に律宗と法華宗わたる。しかりといへども唯律宗計リ弘テ天台法華宗は弘通なし。人王第五十代に最澄と申す聖人あり法華宗を我と見出シて。倶舍宗 成實宗 律宗 法相宗 三論宗 華嚴宗等の六宗をせめをとし給フのみならず。漢土に大日宗と申ス宗有リ、としろしめせり。同御宇に漢土にわたりて四宗をならいわたし給フ所謂法華宗 眞言宗 禪宗 大乘の律宗也。しかりといへども法華宗と律宗をば弘通ありて禪宗をば弘め給はず。眞言宗をば宗の字をけづり七大寺等の諸僧に灌頂を許し給フ。然ども世間の人人はいかなるという事をしらず。當時の人人の云く此の人は漢土にて法華宗をば委細にならいて。眞言宗をばくはしくも知し食シ給はざりけるかとすい(推)し申ス也。同シき御宇に空海と申ス人漢土にわたりて眞言宗をならう。しかりといへども未だ此の御代には歸朝なし。人王第五十一代に平城天皇の御宇に歸朝あり。五十二代嵯峨の天皇の御宇に弘仁十四年癸卯正月十九日に。眞言宗の住處東寺を給ヒて護國敎王院とがうすの傳敎大師御入滅の一年の後也。人王五十四代仁明天皇の御宇に圓仁和尙漢土にわたりて重テ法華眞言の二宗をならいわたす。人王五十五代文德天皇の御宇に仁壽と齊衡とに金剛頂經の疏蘇悉地經の疏已上十四卷を

造て。大日經の義釋に並て眞言宗の三部とがうし。比叡山の內に摠持院を建立し眞言宗を弘通する事此時なり。叡山に眞言宗を許されしかば座主兩方を兼たり。しかれども法華宗をば月のごとく眞言宗をば日のごとしといいしかば。諸人等は眞言宗はすこし勝たりとをもへけり。しかれども座主は兩方を兼て兼學し給とけり大衆も又かくのごとし。同き御宇に圓珍和尙と申す人御入唐漢土にして法華眞言の兩宗をならう同御宇に天安二年に歸朝す。此の人は本朝にしては叡山第一の座主義眞第二の座主圓澄別當光定第三の座主圓仁等に。法華眞言の兩宗をならいきわめ給つのみならず又東寺の眞言をも習給へり。其後に漢土にわたりて法華眞言の兩宗をみがき給つ今の三井寺の法華眞言の元祖智證大師此也。已上四大師也。摠じて日本國には眞言宗に又八家あり。東寺に五家弘法大師を本とす天台に三家慈覺大師を本とす。人王八十一代をば安德天皇と申す父は高倉院の長子母は太政入道の女建禮門院なり。此の王は元暦元年乙巳三月二十四日八島にして海中に崩ぬ。此の王は源ノ賴朝將軍にせめられて海中のいろくづ（魚族）の食となり給つ。人王八十二代は隱岐ノ法皇と申す高倉の第三の王子文治元年丙午御即位。八十三代には阿波ノ院隱岐ノ法皇ノ長子建仁二年に位に繼給つ。八十四代には佐渡ノ院隱岐ノ法皇ノ第二ノ王子承久三年辛巳二月二十六日に王位につき給つ同き七月に佐渡の島にうつされ給つ。此の二三四の三王は父子也鎌倉の右大將の家人義時にせめられさせ給へる也。此に日蓮大に疑て云く佛と申すは三界の國主大梵王第六天の魔王帝釋日月四天轉輪聖王諸王の師也主也親也。三界の諸王は皆は此の釋迦佛より分ち給て諸國の摠領別領等の主となし給へり。故に梵釋等は此の佛を或は木像或は畫像に等にあがめ給つ。須臾も相背かば梵王の高臺もくづれ帝釋の喜見もやぶれ輪王もかぶり（冠）落て給べし。神と申すは又國國の國主等の崩去し給るを生身のごとくあがめ給う。此又國王國人のための父母也主君也師匠也片時もうむかば國安穩なるべからず。此を崇れは國は三災を消し七難を拂人は病なく長壽を持ち。後生には人天と三乘と佛となり給つべし。しかるに我日本國は一閻浮提の內月氏漢土にもすぐれ八萬の國にも超たる國ぞかし。其故は月氏の佛法は西域等に載られて候但七十餘國也其餘は皆外道の國也。漢土の寺は十萬八千四十所なり。我朝の山寺は十七萬一千三十七所也。此の國は月氏漢土に對すれば日本國に伊豆の大嶋を對せ

るがごとし。寺をかずうれば漢土月氏のも雲泥すぎたり。かれは又大乘の國小乘の國大乘も權大乘の國也。此レは寺ごとに八宗十宗をならい家家宅宅に大乘を讀誦す。彼の月氏漢土等は佛法を用ゐる人は千人に一人也此日本國は外道一人もなし。其上神は又第一天照太神第二八幡大菩薩第三は山王等の三千餘社。晝夜に我國をまはり朝夕に國家を見りなわし給フ。其上天照太神は內侍所と申ス明鏡にかげをうかべ內大裏にあがめられ給ヒ。八幡大菩薩は寶殿をすてて主上の頂を栖とし給フと申ス。佛の加護と申シ神の守護と申シいかなれば彼の安德と隱岐と阿波 佐渡等の王は相傳の所從等にせめられて。或は殺サれ或は島に放レ或は鬼となり或は大地獄には墮チ給ヒぐ。日本國の叡山 七寺 東寺 園城等の十七萬一千三十七所の山山寺寺に。いさゝかの御佛事を行フには皆天長地久玉體安穩ところいのり給ヒ候へ。其上八幡大菩薩は殊に天王守護の大願あり。人王第四十八代に高野天皇の玉體に入リ給て云ク我カ國家開闢以來以レ臣ヲ爲レ君ト未レタ有ラ事也天之日嗣必立ツ皇緒ヲ等云云。又太神付ツ行教ニ云ク我ニ有リ百王守護ノ誓ヒ等云云。されば神武天皇より已來百王にいたるまでは。いかなる事有リとも玉體はつゝが(恙)あるべからず王位を傾る者も有ルべからず。一生補處の菩薩は中天なし聖人は橫死せずと申ス。いかにとして彼レ彼四王は王位ををいをとされ國をうばはるるのみならず。命を海にすて身を島島に入レ給けるやらむ。天照太神は玉體に入リかわり給はざりけるか八幡大菩薩の百王の誓はいかにとなりぬるぞ。其上安德天皇の御宇には明雲の座主御師となり。太上(政)入道並に一門捧ニテ怠狀ヲ云ク如下彼ノ以ニテ興福寺ヲ爲ニ藤氏ノ氏寺ト以ニ春日ノ社ヲ爲中藤氏ノ氏神ト。以ニテ延曆寺ヲ號ニ平氏ノ氏寺ト以ニテ日吉ノ社ヲ號ニ平氏ノ氏神ト云云。叡山には明雲座主を始メとして三千人の大衆五壇の大法を行ヒ。大臣以下公家家に尊勝陀羅尼 不動明王を供養し。諸寺諸山には奉幣し大法祕法を盡クさずという事なし。又承久の合戰の御時は天台ノ座主慈圓仁和寺の御室三井等の高僧等を相催して。日本國にわたれる所の大法祕法殘リなく行なわれ給フ。所謂承久三年辛巳四月十九日に十五壇之法を行ハる。天台ノ座主は一字金輪法等。五月二日は仁和寺の御室 如法愛染明王法ヲ紫宸殿にて行ヒ給フ。又六月八日御室 守護經法を行ヒ給フ。已上四十一人の高僧十五壇の大法此法を行フ事は日本に第二度なり。權ノ大夫殿は此事ヲ知リ給フ事なければ御調伏も行ヒ給はず。又いかに行ヒ給とも彼の法法彼の人人にはすぐべからず。佛法の御力と申シ王法の

威力と申シ。彼は國主也三界の諸王守護し給フ。此は日本國の民也わづかに小鬼ぞまほりけん代代の所從重重の家人也。譬へば王威を用て民をせめば鷹の雉をとり貓のねずみを食と蛇のかへる（蛙）をのみ師子王の兎を殺ス にてこそ有ルべけれ。なにしにかかろがろ（輕々）しく天神地祇には申スべき。佛菩薩をばをろかし奉るべき。師子王が兎をとらむには精進すべきか。たかがきじを食ンには いのり有ルべしや。いかにいのらずとも大王の身として民を失ハンには大水の小火をけし大風の小雲を卷ク にてこそ有ルべけれ。其上大火に枯木を加ルがごとく大河に大雨を下スがごとく。王法の力に大法を行と合せて頼朝と義時との本命と元神とをば梵王と帝釋等に拔キ取ラせ給フ。譬へば古酒に醉る者ノごとし蛇の蝦（かへる）の魂を奪フがごとし。頼朝と義時との御魂御名御姓をばかきつけて諸尊諸神等の御足（みあし）の下にふませまい（進）せていのり（祈）しかば。いかにもこそう（堪）べしともみへざりしに。いかにとして一年一月も延ずしてわづか二日一日にはほろび給けるやらむ。佛法を流布の國主とならむ人人は能能御案ありて後生をも定め御いのりも有ルべきか。而ルに日蓮此事を疑しゆへに幼少の比より隨分に顯密二道並に諸宗ノ一切ノ經を。或は人にならい或は我と開キ見し。勘へ見て候へば故の候けるぞ。我が而を見る事は明鏡によるべし國土の盛衰を計ることは佛鏡にはすぐべからず。仁王經　金光明經　最勝王經　守護經　涅槃經　法華經等の諸大乘經を開キ見奉リ候に。佛法に付きて國も盛へ人の壽（いのち）も長く。又佛法に付て國もほろび人の壽（いのち）も短カるべしとみへて候。譬へば水は能く船をたすけ水は能く舟をやぶる。五穀は人をやしない人を損ず。小波小風は大船を損ずる事かたし大波大風には小船をやぶれやすし。王法の曲ルは小波小風のごとし大國と大人をば失ヒがたし。佛法の失あるは大風大波の小舟をやぶるがごとし。國のやぶるる事疑ヒなし。佛記ニ云ク我滅（スルノ）後末代には惡法惡人の國をほろぼし佛法を失（うする）には失すべからず。譬へば三千世界の草木を薪（たきぎ）として須彌山をやくにやけず。劫火の時須彌山根より大豆計リの火出テて須彌山やくが如く。我法も又如シ此惡人外道　天魔　波旬　五通等にはやぶられず。佛のごとく六通羅漢のごとく三衣を皮のごとく身に紆（まと）い一鉢を兩眼にあてたらむ持戒の僧等と。大風の草木をなびかすがごとくなる高僧等我が正法を失ヒぬし。其時梵釋日月四天いかりをなし。其國に大天變大地天等を發していさめむにいさめられずば。其國の內に七難ををこし父母兄弟王臣萬民等互に大怨敵

となり。梟鳥が母を食と破鏡が父をがいするがごとく自國をやぶらせて。結句佗國より其國をせめさすべしとみへて候。今日蓮一代聖教の明鏡をもて日本國を浮へ見候に。此の鏡に浮ッで候人人は國敵佛敵たる事疑ひなし。一代聖教の中に法華經は明鏡の中の神鏡なり。銅鏡等は人の形をばうかぶれどもいまだ心をばうかべず。法華經は人の形を浮ッるのみならず心をも浮べ給へり。心を浮ッるのみならず先業をも未來をも鑒ミ給ッ事くもり（曇）なし。法華經の第七の卷を見候へは於ニ如來ノ滅後ニ知リ佛ノ所說ノ經ノ因緣及次第ヲ隨テ義ニ如ク實ノ說。如ク日月ノ光明ノ能除ニ諸ノ幽冥ヲ斯ノ人行テ世間ニ能滅ス衆生ノ闇ヲ等云云。文の心は此法華經を一字も一句も說ク人は必一代聖教の淺深と次弟とを能能辨へたらむ人の說ベき事に候。譬へば曆の三百六十日をかんがうるに一日も相違せば萬日倶に反逆すべし。三十一字を連ねたる一句一字も相違せば三十一字共に歌にて有ルべからず。謂一經を讀誦すとも始メ寂滅道場より終リ雙林最後にいたるまで次第と淺深とに迷惑せば。其人は我が身に五逆を作らずして無間地獄に入リ。此レを歸依せん檀那も阿鼻大城に墮ッべし。何ニ況智人一人出現して一代聖教の淺深勝劣を辨へん時。元祖が迷惑を相傳せる諸僧等或は國師となり或は諸家の師となりなんどせる人人。自のきず（疵）が顯ハるる上人にかろ（輕）しめられん事をなげきて。上に擧ク一人の智人を或は國主に訴へ或は萬人にろしらせん。其時守護の天神等ノ國をやぶらん事は。芭蕉の葉を大風のさき。小舟を大波のやぶらむがごとしと見へて候。無量義經は始メ寂滅道場より終リ般若經にいたるまでの一切經を。或は名を擧ケ或は年紀を限リて未顯眞實と定メぬ。涅槃經と申すは佛最後の御物語に初め初成道より五十年の諸教の御物語四十餘年をば。無量義經のごとく邪見の經と定め法華經をば我が主君と號シ給フ。中に法華經ましまして已今當の敕宣を下タし給ヒしかば。多寶十方の諸佛加判ありて各各本土にかへり給ヒしを。月氏の付法藏の二十四人は但小乘權大乘を弘通して法華經の實義を宣ヘ給フ事なし。譬へば日本國の行基菩薩と鑒眞和尙との法華經の義を知リ給て弘通なかりしがごとし。漢土の南北の十師は內にも佛法の勝劣を辨ヘず外にも淺深に迷惑せり。又三論宗ノ吉藏華嚴宗の澄觀法相宗ノ慈恩此等の人人は內にも迷ヒ外にも知ラざりしかども。道心堅固の人人なれば名聞をすてて天台の義に付キにき。知ラずされば此人人は懺悔の力に依リて生死やはなれけむ。將タ又謗法の罪は重く懺悔の力は弱くして阿

閻世王無垢論師等のごとく地獄にや墮ちにけん。善無畏三藏 金剛智三藏 不空三藏等の三三藏は一切の眞言師の申ス は大日如來より五代六代の人人即身成佛の根本也等云云。日蓮勘テ云ク法倫ノ元祖也盜人の根本也。此等ノ人人は月氏よりは大日經金剛頂經蘇悉地經等を齎シ來る。此の經經は華嚴經般若經涅槃經等に及ばざる上法華經に對すれば七重の下劣也。經文に見へて赫赫たり明明たり。而ルを漢土に來リて天台大師の止觀等の三十卷ヲ見て舌をふるい心をまよわして此に及ばずば我が經弘通しがたし。勝レたりといはんとすれば妄語眼前なり。いかんがせんと案せし程に一ッの深き大妄語を案じ出タし給フ。所謂大日經ノ三十一品を法華經二十八品並に無量義經に腹合せに合セて。三密の中の意密をば法華經に同シ其上に印と眞言とを加ヘて。法華經は略也大日經は廣也已にも入れず今にも入れず當にもはづれぬ。法華經をかたうどとして三說の難を脫れ結句は印と眞言とを用ヒて法華經を打チ落シて眞言宗を立てて候。譬へば三女が后と成リて三王を喪せしがごとし。法華經の流通の涅槃經の第九に我れ滅して後ノ惡比丘等我が正法を滅すべし。譬へば女人のごとしと記シ給けるは是也。されば善無畏三藏は閻魔王にせめられて鐵の繩七脉つけられてから(辛)くして蘇たれども。又死する時は黑皮隱隱骨甚タ露焉と申シて無間地獄の前相其の死骨に顯ハれ給ヒぬ。人死して後ち色の黑キは地獄に墮ッとは一代聖敎に定メる所なり。金剛智 不空等も又此をもて知シぬべし。此の人人は改悔は有リと見へて候へども强盛の懺悔のなかりけるか。今の眞言師は又あへて知ル事なし。玄宗皇帝の御代の喪ヒし事も不審はれて候。日本國は又弘法 慈覺 智證此の謗法を習ヒ傳て自身も知ロしめさず人は又をもひもよらず。且くは法華宗の人人相論有リしかども終には天台宗やうやく衰ヘて。叡山五十七代の座主明雲 人王八十一代の安德天皇より已來は叡山一向に眞言宗となりぬ。第六十一代ノ座主顯眞權僧正は天台座主の名を得て眞言宗に遷ルのみならず。然ル後法華眞言をすてて一向謗法の法然が弟子となりぬ。承久調伏ノ上衆慈圓僧正は第六十二代並五九七十一代の四代の座主隱岐ノ法皇ノ御師也。此等の人人は善無畏三藏 金剛智三藏 不空三藏 慈覺智證等の眞言をば器はかわれども一の智水也。其上天台宗の座主の名を盜ミて法華經の御領を知行して。三千の頭となり一國の法の師と仰テて。大日經を本として七重くだれる眞言を用ヒて八重勝レリとをもへるは。天を地とをる

い民を王とあやまち石を珠とあやまつのみならず珠を石という人。教主釋尊多寶佛十方ノ諸佛の御怨敵たるのみならず。一切衆生の眼目を奪ヒ取リ三善道の門を閉三惡道の道を開く。梵釋日月四天等の諸天善神いかでか此人を罰せさせ給はざらむ。いかでか此人の仰く檀那をば守護し給ッべき。天照太神の內侍所も八幡大菩薩の百王守護の御ちかいもいかでか叶はせ給ッべき。余此由を且つ知しより已來一分の慈悲に催されて。粗隨分の弟子にあらあら申せし程に次第に增長して國主まで聞ヒぬ。國主は理を親とし非を敵とすべき人にてをはすべきが。いかがしたりけん諸人の讒言ををさめて一人の余をすて給フ。彼の天台大師は南北の諸人あだみしかども陳隋二代の帝重ンじ給ヒしかば諸人の怨もうすかりき。此の傳教大師は南都七大寺讒言せしかども桓武平城 嵯峨の三皇用ヒ給しかば怨敵もれがしがたし。今日蓮は日本國十七萬一千三十七所の諸僧等のあだするのみならず。國主用ヒ給ざれば萬民あだをなす事父母の敵にも超ヘ宿世のかたきにもすぐれたり。結句は二度の遠流一度の頭に及ぶ。彼大莊嚴佛の末法の四比丘並に六百八十萬億那由他の諸人が普事比丘一人をあだみしにも超ヘ。師子音王佛の末の勝意比丘無量の弟子等が喜根比丘をせめしにも勝れり。覺德比丘がせめられし不輕菩薩が杖木をかをほりしも。限リあれば此にはよもすぎじとぞをぼへ候。若百千にも一つ日蓮法華經の行者にて候ならば日本國の諸人後生の無間地獄はしばらくをく。現身には國を失ヒ佗國に取れん事彼徽宗欽宗のごとく優陀延王訖利多王等に申せしがごとくならん。又其外は或は其身は白癩黑癩或は諸惡重病疑ヒなかるべきか。もし其義なくば又日蓮法華經の行者にあらじ。此の身現身には白癩黑癩等の諸惡重病を受ケ取リ。後生には提婆瞿伽利等がごとく無間大城に墮ッべし。日月を射奉る修羅は其矢還て我が眼に立ち師子王を吼る狗犬は我が腹をやぶる。釋子を殺せし波琉璃王は水中の中の大火に入リ。佛の御身より血を出タせし提婆達多は現身に阿鼻の炎を感せり。金銅の釋尊をやきし守屋は四天王の矢にあたり。東大寺興福寺を燒キし清盛入道は現身に其身もう（燃）る病をうけにき。彼等は皆大事なれども日蓮が事に合ハすれば小事なり。小事すら猶しるしあり大事いかでか現罰なからむ。悅ヒ哉經文に任セて五五百歲廣宣流布をまつ。悲ヒ哉鬪諍堅固の時に當ッて此國脩羅道となるべし。清盛入道と賴朝とは源平ノ兩家本より狗犬と猿猴とのごとし。少（小）人少福の賴朝をあだしゆ

へに宿敵たる入道の一門ほろびし上。科なき主上の西海に沈ミ給事は不便の事なり。此ゝは教主釋尊多寶十方の諸佛の御使として世間には一分の失なき者を。一國の諸人にあだまするのみならず。兩度の流罪に當てて日中に鎌倉の小路をわたす事朝敵のごとし。其外小菴には釋尊を本尊とし一切經を安置したりし其室を刎こぼ(毀)ちて。佛像經卷を諸人にふま(踏)するのみならず糞泥にふみ入れ。日蓮が懷中に法華經を入まいらせて候しをとりいだして頭をさんざんに打ちさいなむ。此事如何宿意もなし當座の科もなしただ法華經を弘通する計りの大科なり。日蓮天に向テ聲をあげて申サく。法華經の序品を拜見し奉れば梵釋と日月と四天と龍王と阿脩羅と二界八番の衆と無量の國土の諸神と集會し給たりし時。已今當に第一の說を聞キし時。我とも雪山童子の如く身を供養し藥王菩薩の如く臂をもやかんとをもいしに。教主釋尊多寶十方の諸佛の御前にして今於テ佛前ニ自說ク誓言ヲと諫曉し給しかば。幸に順風を得て如ク世尊ノ教ノ當ニ具ニ奉行ス一と二處三會の衆一同に大音聲を放テて誓ヒを給しはいかんが有ルべき。唯佛前にては如レ是ノ申シて多寶十方の諸佛は本土にかへり給フ。釋尊は御入滅ならせ給てほど久クなりぬれば。末代邊國に法華經の行者有リとも梵釋日月等御誓ヒをうちわすれて守護し給フ事なくば。日蓮がためには一旦のなげきなり。無始已來鷹の前のきじ(雉)蛇の前のかへる(蛙)貓の前のねずみ(鼠)犬の前のさる(猿)と有リし時もありき。ゆめ(夢)の代なれば佛菩薩諸天にすかさ(賺)れまいらせたりける者にてこそ候はめ。なによりもなげかしき事は梵と帝と日月と四天等の。南無妙法蓮華經の法華經の行者の大難に値をすてさせ給ヒて。現身に天の果報も盡キて花の大風に散ルがごとく雨の空より下ルごとく。其人命終入阿鼻獄と無間大城に墮テ給はん事こそあはれにはをぼへ候へ。謂(いはゆる)彼人人(三世十方の諸佛をかたうどとして知ラぬよしのべ申し給フとも。日蓮は其人人には強キかたきなり。若佛の返(偏)頗をはせずば梵釋日月四天をば無間大城には必ずつけたてまつるべし。日蓮が眼をゝろ(怖)しくばいろぎ(急)いろぎ佛前の誓ヒをばはたし給へ。日蓮が口。

又むぎ(麥)ひとひつ(一櫃)(鵞目兩貫わかめ(裙帶菜)かちめ(搗布)みな(皆)一俵給ヒ畢(シヌ)。干い(飯)やきごめ各各一からぶくろ(紙袋)給ヒ畢(シヌ)。一一の御志はかきつくすべしと申せども法門巨多に候へば留畢(とどめシヌ)。佗門にきかせ給フなよ。大事の事どもかきて候なり。

明治三十五年五月二十五日京都妙顯寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ四十三紙ニシテ前二十二紙ヲ乾軸トシ其下ヲ坤軸トス其中即チ大本二十四右四行（一三五七の九行）「薪」ヨリ六行ノ「れす」マデ闕失セリ今ハ延山朝師ノ御本ニテ校正ス此朝本ハ御正本ト大同ナリ又此書ノ末ハ闕文ナリ猶ホ端書ハ該山ニ別ニ斷編トシテ存セリ（稲田海素慶記）

○上野殿御消息　微上二四　考四五

三世の諸佛の世に出テさせ給ヒても皆皆四恩を報せよと說き。三皇　五帝　孔子　老子　顏回等の古の賢人は四德を修せよと也。四德と者一には父母に孝あるべし。二には主に忠あるべし。三には友に合て禮あるべし。四には劣れるに逢ヲて慈悲あれと也。一に父母に孝あれとはたとひ親はもの（物）に覺えずとも惡さまなる事を云ヲとも。聊かも腹も立テず誤る顏を見せず親の云ヲ事に一分も違へず。親によき物を與へんと思ヒてせめてする事なくば一日に二三度ゑみ（笑）て向へと也。二に主に合て忠あるべしとはひさゝかも主にうしろめたなき（後痛）心あるべからず。たとひ我身は失はるとも主にはかまへ（構）てよかれ（善）と思ヲべし。かく（懇）れての信あればあらは（顯）れての德ある也と云云。

三には友にあふて禮あれとは友達の一日に十度二十度來れる人なりとも。千里二千里來ル人の如く思ふて禮儀ひさゝかをろか（疎）に思ヲべからず。四に劣れる者に慈悲あれとは我より劣りたらん人をば我子の如く思ヒて一切あはれみ慈悲あるべし。此を四德と云ヲ也。是の如く振舞ヲを賢人とも聖人とも云ヲべし。此の四の事あれば餘の事にはよからねどもよき者也。如ク是ノ四の得を振舞ふ人は外典三千卷をよまねども讀みたる人となれり。一佛敎の四恩者一には父母の恩を報せよ二には國主の恩を報せよ三には一切衆生の恩を報せよ四には三寶の恩を報せよ。一に父母の恩を報せよとは父母の赤白二滯和合して我身となる。母の胎内に宿る事二百七十日九月の間三十七度死るほどの苦みあり。生落す時たへがたしと思ひ念ずる息頂より出ヲる煙り梵天に至る。さて生落されて乳をのむ事一百八十餘石。三年が間は父母の膝に遊び人となりて佛敎を信ずれば先づ此父と母との恩を報ずべし。父の恩の高き事須彌山猶ひきし母の恩の深き事大海還て淺し。相構へて父母の恩を報ずべし。二に國主の恩を報せよとは生れて已來衣食のたぐひより初メて。皆是國主の恩を得てある者なれば現世安穩後生善處と祈り奉るべし。三に一切衆生の恩を報せ

よとは。されば昔は一切の男は父なり女は母なり然る間生生世世に皆恩ある衆生なれば皆佛になれと思ふべき也。四に三寶の恩を報せと者。最初成道の華嚴經を尋ぬれば經も大乘 佛も報身如來にて坐ます間。二乘等は晝の梟 夜の鷹の如くしてかれを聞ぐといへども耳しゐ目しゐの如し。然ぬ間四恩を報ずべきかと思ふに女人をきらはれたる間母の恩報じがたし。次に佛阿含小乘經を說給し事十二年是こそ小乘なれば我等が機にしたがふべきかと思へば。男は五戒女は十戒法師は二百五十戒尼は五百戒を持て三千の威儀を具すべしと說たれば。末代の我等かなふべしともたぼねねば母の恩報じがたし。況や此經にもきらはれたり。方等般若四十餘年の經經に皆女人をきらはれたり。但天女成佛經觀經等にすこし女人の得道の經文有りといへども但名のみ有って實なき也。其上末顯眞實の經なれば如何が有りけん。四十餘年の經經に皆女人を嫌はれたり。又最後に說給たる涅槃經にも女人を嫌はれたり。何れか四恩を報ずる經有りと尋ぬれば法華經こそ女人成佛する經なれば。八歲の龍女成佛し佛の姨母憍曇彌 耶輸陀羅比丘尼記莂にあづかりぬ。されば我等が母は但女人の體にてこそ候へ畜生にもあらず蛇身にもあらず。八歲の龍女だにも佛になる如何ゞ此經の力にて我母の佛にならざるべき。されば法華經を持つ人は父と母との恩を報ずる也。我心には報ずると思はねども此經の力にて報ずる也。然ぬ間釋迦多寶等の十方無量の佛上行地涌等の菩薩も普賢文殊等の迹化の大士も。舍利弗等の諸大聲聞も大梵天王日月等の明主諸天も八部王も十羅刹女等も。日本國中の大小の諸神も。揔じて此法華經を强く信じまいらせて餘念なく一筋に信仰する者をば影の身にそふが如く守らせ給ひ候也。相構て相構て心を翻へさず一筋に信じ給ふならば。現世安穩後生善處なるべし。恐恐謹言。

上野殿　　日蓮花押